

關西建築協會雜誌

大正七年九月廿五日

第一輯第十一号

關西建築協會會則

第一條　本會ノ目的ハ我國建築界ノ改善ナル發展ヲ期スルニ在リ

第二條　本會ハ關西建築協會ト稱ス

第三條　本會ハ事務所ヲ大阪市ニ置ク

地方ニ支會ヲ設クルコトヲ得

第四條　本會ハ人格、學識、經驗アル建築家ヲ以テ會員トス

會員ノ氏名住所ハ會員名簿ニ之ヲ記載ス

會員タラムト希望スル者ハ會員五名以上ノ紹介ヲ以テ入會希望書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會ノ詮衡ヲ經テ例會ニ於テ之ヲ議決ス

第五條　本會ハ其目的ヲ贊成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員トス

贊助員ヲ分チテ左ノ四種トス

一　名譽贊助員―地位又ハ學識アル名望家

二　終身贊助員―金百圓以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會ニ寄附スル篤志家

三　特別贊助員―建築ニ關聯スル特種ノ技術家又ハ事業家

四　普通贊助員―建築ニ關係又ハ趣味ヲ有スル者

贊助員ノ氏名住所寄附ノ金額又ハ物件ハ各贊助員名簿ニ之ヲ記錄ス

第六條　名譽贊助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會之ヲ推薦ス

終身贊助員タラムトスル者ハ會員貳名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及寄附ノ金額又ハ物件ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

特別贊助員タラムトスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

普通贊助員タラムト欲スル者ハ會員ノ紹介ヲ以テ申込書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

第七條　會員ハ第十九條ニ關スル權利ヲ享有ス

會員ハ會內ニ於ケル其言行ニ付會外ニ於テ責任ゼザルコトヲ得

名譽贊助員ハ本會ノ盛運及第十九條ニ基キ相當ノ利得ヲ受ク

終身贊助員、特別贊助員及普通贊助員ハ第十九條ニ基キ會誌ノ配布其他各相當ノ利得ヲ受ク

第八條　會員ニシテ脫會セムトスル者ハ其旨ヲ本會ニ申込ムベシ

前項ノ規定ハ贊助員ニ之ヲ準用ス

第九條　本會ハ會員ニシテ本則ノ規定ニ違背シ又ハ本會ノ名譽ヲ毀損スルノ行爲アリト認メラルル者ニ對シ理事會ノ決議ヲ經テ其權利ヲ停止シ若ハ之ヲ除名スルコトヲ得

前項ノ規定ハ贊助員ニ之ヲ準用ス

第十條　脫會其他ノ事由ニ因リ會員タルノ資格ヲ失ヒタル者ハ既納會費ノ返還ヲ求ノ又ハ其債務ヲ免カルルコトヲ得ズ

前項ノ規定ハ贊助員ニ之ヲ準用ス

第十一條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一　會頭　一名

二　副會頭　一名

三　理事長　一名

四　理事　六名

會頭ハ會務ヲ總監シ本會ヲ代表ス

副會頭ハ會頭ヲ補佐シ會頭事故アルトキ其職務ヲ代理ス

理事長ハ會務ヲ總理シ會頭、副會頭事故アルトキ其職務ヲ代理シ理事會ヲ代表ス

理事ハ會務ヲ處理シ理事長事故アルトキ理事會ノ決議ニ依リ其職務ヲ代理ス

第十二條　役員ハ會員中ヨリ例會ニ於テ之ヲ選舉ス但會頭副會頭ハ名譽贊助員中ヨリ之ヲ選出スルコトヲ得

役員ノ任期ハ貳年ト

理事ノ改選ハ每年半數トス但引續キ重任スルコトヲ得ズ

第十三條　本會ニ左ノ職員ヲ置ク

一　主　記　一　名

二　主　計　一　名

三　編　輯　若干名

四　書　記　若干名

主記ハ庶務ヲ、主計ハ會計ヲ、編輯ハ編纂ヲ處理ス

編纂補ハ編輯ノ旨ヲ受ケ編纂ヲ分掌ス

書記ハ理事長理事ノ命ヲ受ケ會務ニ從事ス

第十四條　主記、主計、編輯ハ理事之ヲ互選ス

編輯補ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名ス

書記ハ理事會之ヲ任命シ有給トナスコトヲ得

第十五條　本會ハ調査研究ノ必要ニ應シ例會ノ決議ニ依リ各部ノ委員會ヲ設ケ各部ニ委員長一名委員若干名ヲ置ク

委員長及委員ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名シ委員長ハ當該委員ノ互選ト

理事會ノ特殊事項ニ關シ會員外ノ專門家ヲ囑託委員トナスコトヲ得

第十六條　委員長ハ當該委員會ヲ代表シ委員長事故アルトキハ當該委員會ノ決議ニ依リ委員其職務ヲ代理ス

委員會ノ經過ハ例會ニ於テ之ヲ報告ス

委員會ノ調査研究報告ハ例會ノ決議ヲ經テ本會ノ名ヲ以テ之ヲ發表ス但ヲ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テスルコトヲ得

第十七條　本會ハ每月一回會員ヲ召集シ例會ヲ開キ重要事項ヲ審議シ報告會、談話會、討論會又ハ講演會ヲ催ス但理事會ハ必要ト認ムルトキ臨時之ヲ開催スルコトヲ得

例會ニ於ケル議案其他ノ事項ハ理事會之ヲ會員ニ報告ス但緊急事項ニ付テハ此限ニ在ラス

第十八條　本會ノ年秋二季大會ヲ擧行ス

第十九條　本會ノ行フ事業左ノ如シ

一　建築ニ關スル講演會ノ開催

二　調査研究報告ノ發表

三　建築ニ關スル重要事項ノ議決

四　決議事項ノ實行促進

五　會誌ノ發刊

六　建築ニ關スル圖書ノ刊行

七　建築ニ關スル講演會ノ開催

八　建築ニ關スル展覽會ノ公開

九　建築ニ關スル視察

十　建築ニ關スル有志者ノ親睦會

十一　理想的建築ノ計畫

十二　其他建築ニ關シ有益ナル事項

第二十條　會費ハ會役年額金貳拾圓ヲ本會ニ醵出ス

但例會ニ出席シ難キ地方ニ在ル會員ノ會費ハ半額トス

一時ニ金百圓以上ヲ出ストキハ爾後前項ノ會費ヲ免ス

會員タルノ承認ヲ得タル者ハ入會金貳圓ヲ本會ニ納付スベシ

特別贊助員ハ特別贊助費年額金六圓ヲ、普通贊助員ハ普通贊助費年額金參圓ヲ本會ニ前納スベシ

但六期以內ニ之ヲ分納スルコトヲ得

第二十一條　本會ノ經費ハ會費入會金寄附金贊助費其他ノ收入ヲ以テ支辨ス

本會ノ財產ハ理事長之ヲ管理ス

第二十二條　本會ノ財產積立債務及每月ノ收支ハ主計其計算書ヲ作リ翌月理事會ニ報告ス

本會ノ財產積立債務及每年ノ收支ハ理事會其決算書ヲ作リ翌年一月例會ニ於テ報告ス

第二十三條　本會及本則ニ關スル詳細ノ事項ハ例會ノ決議ニ依リ細則ニ之ヲ定ム

第二十四條　本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得

特許第七九三五號

大野式防火捲上ヶ戸

（特許大野式シヤッター）

開閉　戸を開くには極めて輕く捲上げ得べく、戸を閉すには把手を要せず只把手函表面の小蓋を半回轉する而已にて本品特殊の機構に依り自から靜穩に降下閉鎖す

自働　特に自働裝置を附したるものは火災に際し附近の氣溫稍々上昇する時は融金（ヒューズ）の融解に依り直ちに自働閉鎖す

構造　一分乃至六厘厚軟鋼板を用ひ鈑と鈑との繼目最も堅實にして且つ上方捲込口及び溝金と鎧戸の間隙殆ど無きを以て耐火力並に耐久力優秀なり

取付　如何樣の建物にても積込、後付、連窓、孤形窓、表裏兩把手等凡て取付簡易にして殊に把手函は隨意の場所に設くる事を得

信用　多年の經驗を有する事と漸次改良を加へたる事とに依り「內外國同種品中最も安心し得べきものなる事」は既に斯界の定論に有之候

最近御採用を蒙りたる建物の內重なる二三

東京帝國大學書庫　東京銀行集會所　東京建物株式會社　東京第一銀行增築　大阪三越吳服店
農商務省特許局　京都商業會議所　大阪東洋紡績會社　同　丁酉銀行本店　同　石原時計店
海軍省技術本部　橫濱取引所　同　藤田鑛業會社　大阪近江銀行本店　同　稻畑染料商店
大阪控訴院　神戶日本郵船會社　同　古河合名會社　同三井銀行西支店　同日本棉花會社
警視廳防火設備　同　三井物產倉庫　神戶住友會庫　同　日本貯藏銀行　同鑛業會社工場

火災の實例　數年前東京板紙會社工場燒失の際階上階下の間仕切に依り延燒を防ぎ又神田大火に東京瓦斯會社の木造石造倉庫は火焰に面せる十數箇の窓を悉く閉鎖して類燒を免かれ何れも其儘使用せられ居候

代價　材料の時價に依り變動有之候間乍御面倒御入用の都度壁內法寸法御申越被下見積方被仰付度尙ほ御建物の略圖御送附相願はれ候はゝ取付設計圖調製御覽に入れ可申候

大野正營業所

東京市本鄕區弓町一丁目（電話小石川六二九番）

關西建築協會雜誌 第壹輯 第十壹號

目次

□繪
大阪市の表玄關たる梅田停車場(三色版)
伯林見物(一)(二)(三)(四)(五)(六)(七)(八)(九)(十)(十一)
都市建築の今昔(十七)

△都市內外の住居欠乏 …… 會員 片岡安 一
△都市計畫より見たる遷都(中) …… 會員 片岡安 二
△最近の大阪港(四) …… 大阪市役所 港灣部 一二
△覺めたる聲(下) …… 大阪市役所 港灣部長 直木倫太郎 二六
△本邦森林と建築用材に付いて(五) …… 會員 谷民藏 三五
□北海道の林況(挿繪) …… 會員 都市研究生 五四
△都市と建築 …… 五四
□三十年後の大阪(三) …… 五四
□物價暴騰と救濟事業 …… 六〇
△女流の住宅觀 …… 六五

□椽外の硝子障子は故博士の創案……法學博士 鳩山春子談・六五
□お臺所中心の家庭……未亡人
□西洋風にしかけた住宅の失敗……醫學博士 入澤常子談・六八
……青山學院教授夫人
△亞米利加の田園住宅(四)……會員・谷本多喜治・七五
△建築の職業と其技術に就いて(二)……會員・日高胖・八一
△京都古建築觀……會員・伊藤清造・八九
△東大寺建築史(五)……會員・須藤眞金・九七
△演劇と建築(五)……會員・波江悌夫・一〇二
△建築史ローマンス……會員・まがね・一一一
△建堂閑話……會員・望蜀生・一一四
△大阪工業試驗所の火災に就いて……第四部委員會・一一七
□故名譽賛助員安永義章氏……一二〇
△會報……一二五
△編輯たより……一二五

附錄

△議院建築意匠設計懸賞募集規程……一六頁

須賀商會

大阪市東區今橋四丁目　長電話本局三一五二三八
振替大阪一三九六七

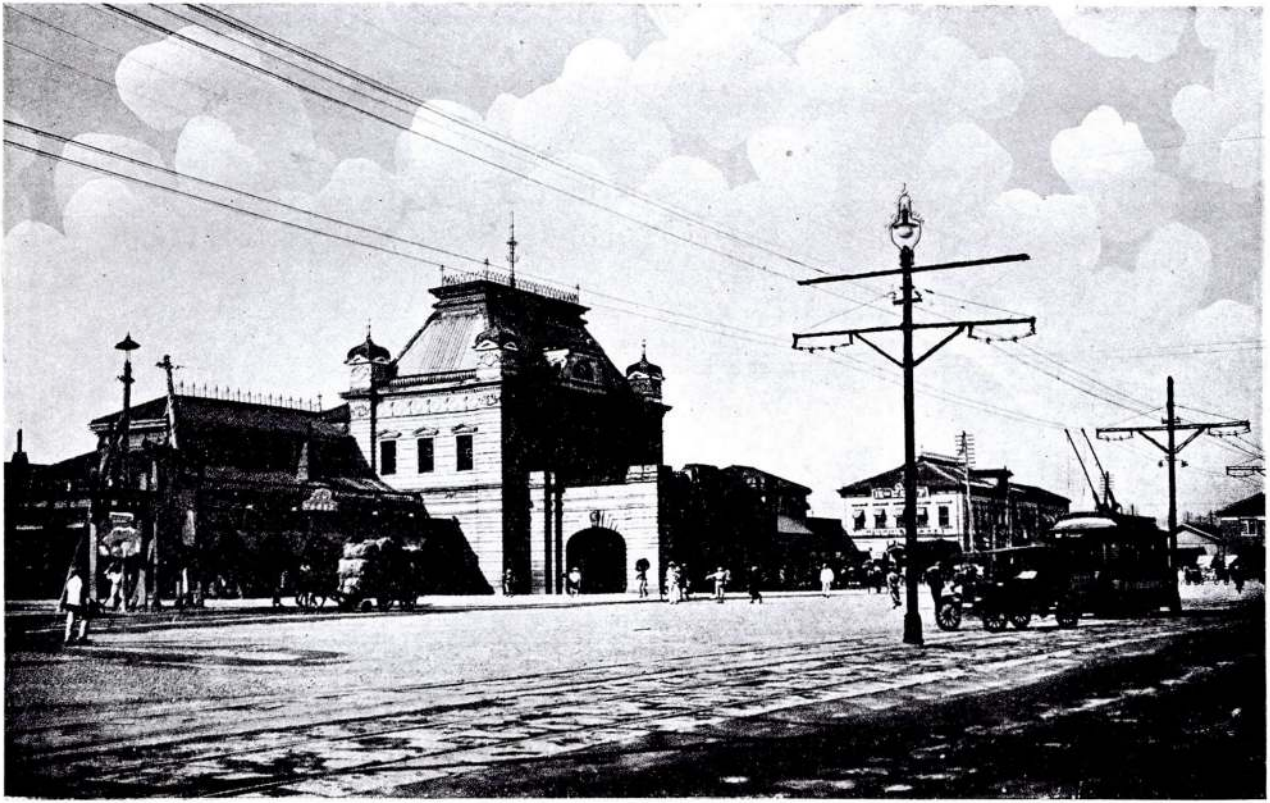
營業課目

●水道　●衛生　●暖房　●諸機械　●溫水工事　●設計　●請負　●監督鑑定
同附屬器具製造及ビ直輸入販賣並ニ喞筒製作

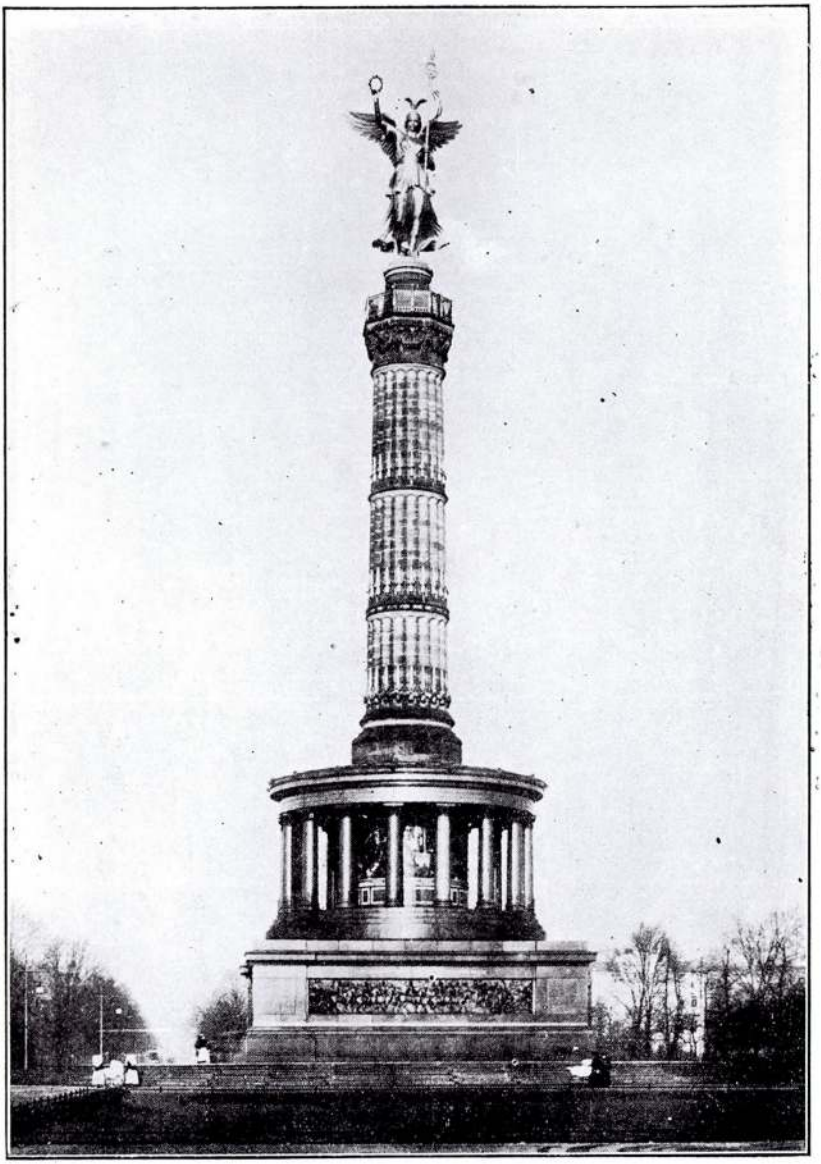
三井物産鉛管及アルミニユム管一手販賣
ユニバーサルウイングス喞筒一手販賣

支店

東京支店　東京市日本橋區本銀町二　電話長本局三七〇四
神戸支店　神戸市長狹通二丁目　電話長三宮一一〇二
名古屋支店　名古屋市西柳町　電話長三三八四
京都支店　京都市烏丸二條　電話上一九六九
博多支店　福岡市博多上吳服町　電話長一二七五

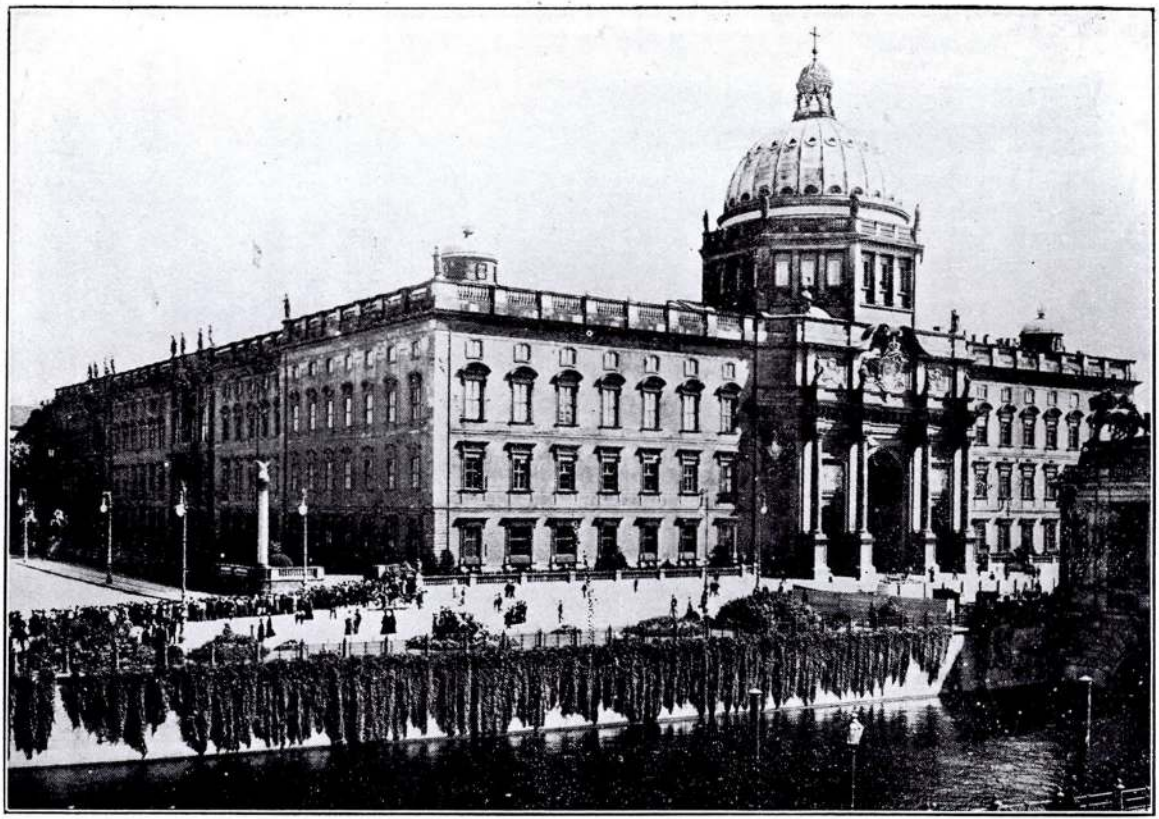


大阪市の表玄關たる梅田停車場



戰勝記念塔

巴里のエッフエル塔が技の優とすれば此の戰勝記念塔は武の誇であらう、伯林の鳥瞰を齎にせんには此の塔に昇らなければならぬ、ストラツク氏の設計に成り一八七三年除幕式を擧げられた、チーア・ガルテンの一角を占め丁抹、墺太利及佛蘭西との各戰役を記念したものである・塔上には戰勝の女神像を安置してあるが、面貌頗るカイザーに似てゐるのは甚だ皮肉である。



シュプレー河畔の獨逸皇宮

佛のヴエルサイユ宮の華なく、露のクレムリン宮の雄なしと雖も廣袤實に三千餘坪、軒高九十八呎の四層樓、中央に大圓蓋を戴いて遖に大帝國の皇城である。四周の風致は英のバッキンガム宮に及ばずとも、北にルストガルテンを控へてドームや、美術館と相望み、伯林中樞の大建築である。內部の壯麗は亦國民の誇とする處である。

伯林見物（其三）



伯林中央寺院

ホーヘンツオルレン家の寄縁寺でウンテルデンリンデン街の末端にある、美しいルストガーテンに相對し一九〇五年前後十一年間の歳月を費して竣成した。ヲツト・ラシユドルフ氏の設計に基き精密細心の努力を重ねた大建築である。

伯林見物（其四）



フレドリツヒ皇帝博物館

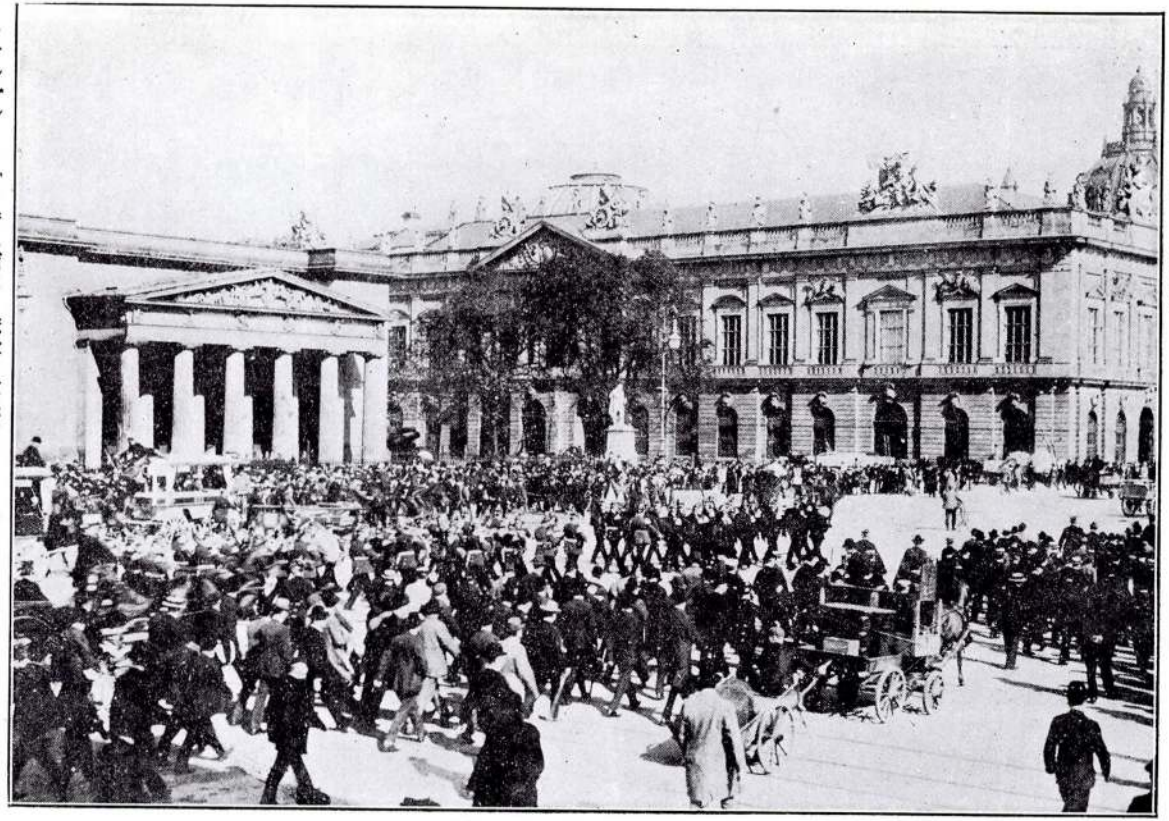
建築家イーネ氏の設計に成る、一九〇四年工を終へたもの、スプレー河中の島に建てられてある。正面入口の前にメーゾン氏作フレドリツヒ三世の彫像がある。館内の寶物は英佛の夫れに遠く及ばないけれども尚世界の寶物として誇るに足るものが多い。



獨逸皇室劇場

初めの皇室劇場はクノ！ベルストフ氏の設計に成つたが一七四三年出來上つて間もなく、祝融氏の襲ふ所となり現在のものはラングハンス氏によつて大修理を施されたのである。破風の奇抜な彫刻はリーツベル氏の作で亞鉛製とか聞く。現皇帝は本劇場の大株主であるが同時に此劇場は文藝方面に對する皇帝の不斷の奬勵を盡さるゝ表象であるともいへる。

伯林見物（其六）



伯林遊就館

ウンテルデンリンデン街に面せる宏壯な建築物で、獨逸帝國が今日迄經驗した幾多の戰爭の戰利品、建國以來の武器遺物等を整頓陳列せるは、やがて武の國の誇であるに違いない。斯の國が其光榮ある其武を捨てるのは何時だろうか。

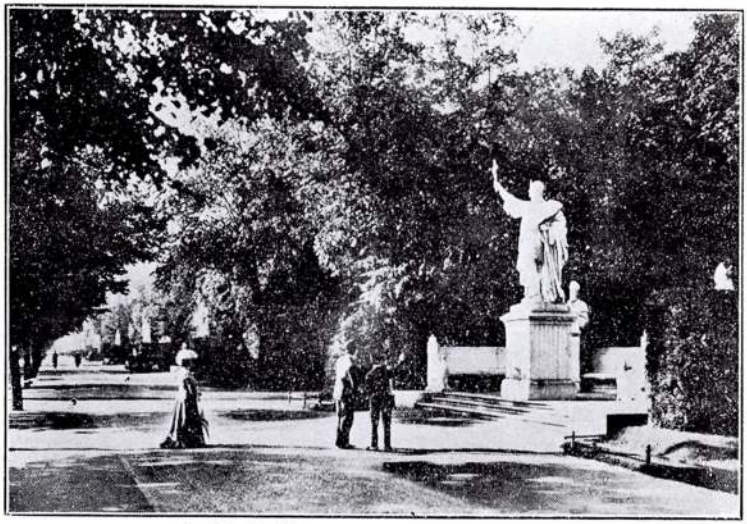
伯林見物（其七）



ブランデンブルグ門

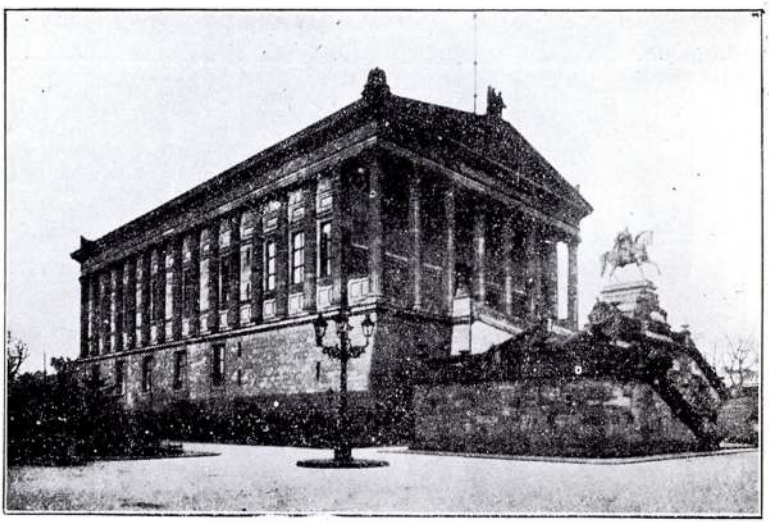
皇宮に通するウンテルデンリンデン街の起點に在つてケー・ギー・ロンクハンス氏の考案に依り一七九一年に竣成してゐる。ドーリック式巨柱を連れて高さ八十五呎屋上の神像彫刻はスチャドウ氏の作であるが一八〇七年奈翁に分捕られ後七年にして取返したが此度は後向に載せてゐるのは中々面白い。

伯林見物（其八）



チーアガルデンの凱旋道路

其昔の狩獵地は今は公園となつて伯林の休憩所である今尙皇室の所有であるかその閑雅幽邃な凱旋道路は現帝の案出に成り獨逸建國の諸皇帝並びに偉人柱石の大理石塑像が排列されてゐる



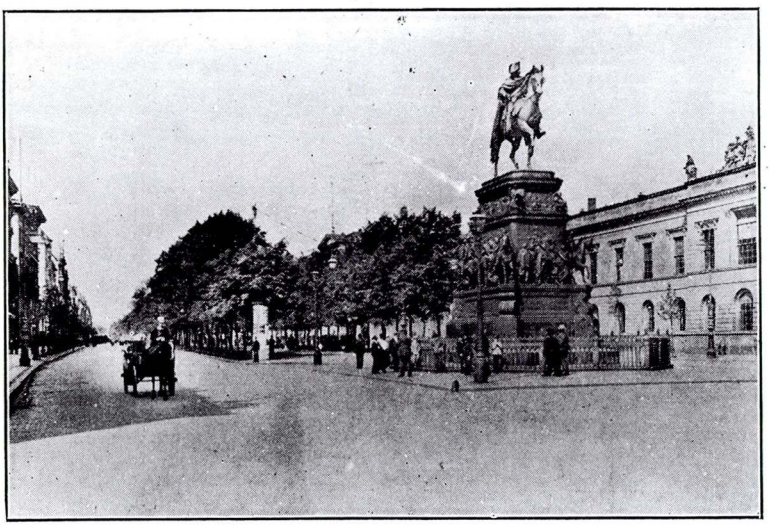
國立繪畫館

此コクント式繪畫館はフレドリツヒ・ウイリアム四世の計畫に係りストラック氏の十年の努力を以て一八七六年漸く竣工したものである。ベックリンの靈筆を始め十九世紀神秘派の作物が多い。

伯林見物（其九）



ウンテルデンリンデン街の一



ウンテルデンリンデン街の二

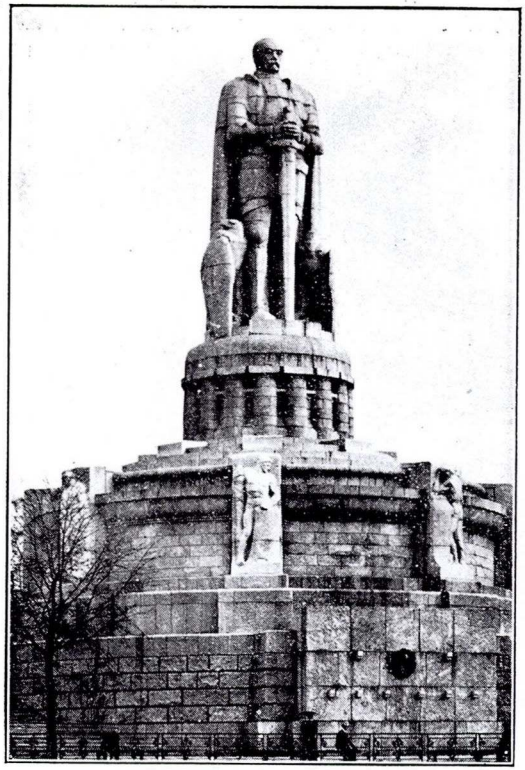
伯林の特色は其清潔にして整然たる所にある、伯林の街路はウンテルデンリンデン街によつて代表されてゐる。フレトリツヒウイリアム帝の時から既に計畫されたもので、後フレドリツヒ大王の時更らに經營を盡されたが大伯林となつてからは世界の模範的市街の隨一である。

伯林見物（其十）



ロ　ー　ン　記　念　像

ビスマルク、モルトケの兩傑と相提携して獨逸軍制の基礎を築いたのは陸軍大臣ローンである。彼の功業を記念する此銅像は伯林のアールセンブラッツに不斷の光輝を放つて居る。



ビ　ス　マ　ル　ク　記　念　像

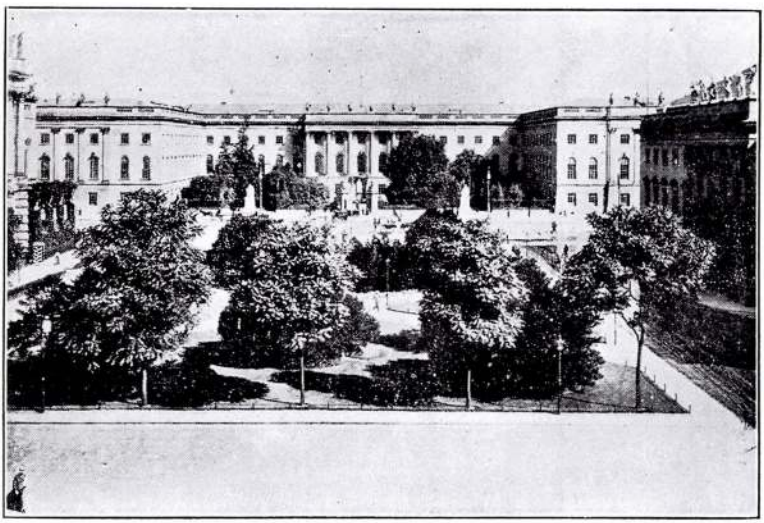
ビスマルク畢世の儒業は元より世界の史上に不滅の光を放つて居るが、靈あらば今頃の戰爭を何と思つて居るだろうが。此像はハンブルク市に在るもので最近の建築に係り遺憾なく剛健な巨人を語つてゐる。

伯林見物（其十一）



東洋風の此の動物園の正門は甚だ珍奇なので有名であるが、同時に東洋趣味を大膽に取り入れた作では可なり古いものである。

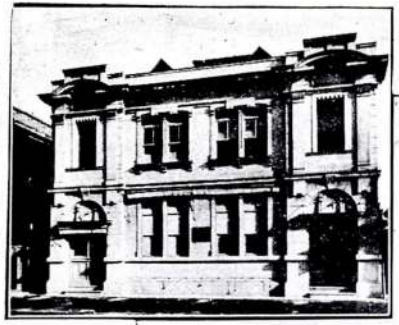
伯林動物園

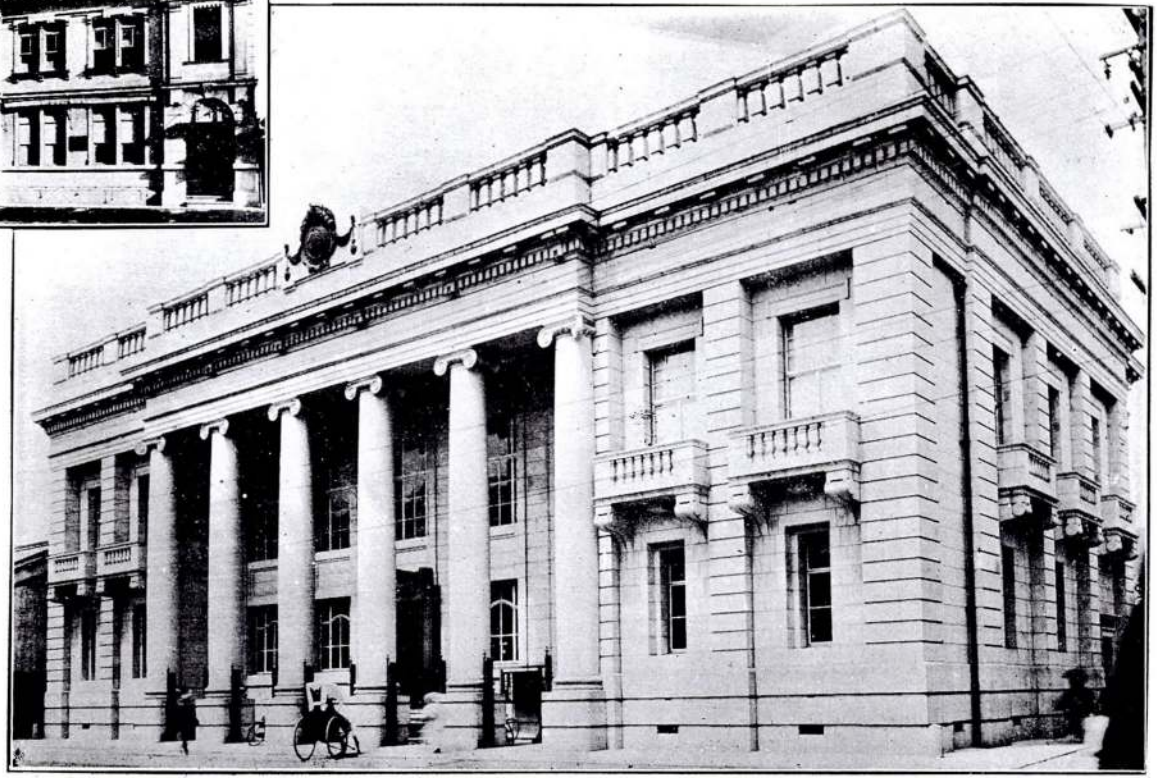


元は親王家の宮殿として建築されたもの今は獨逸最高の學府である、校舎の華麗は高等工科學堂に及ばないが奈翁戰役後の慘憺たる歴史を語る處に學府の權威が保たれてゐる。

伯林大學

同銀行舊館





株式會社三井銀行神戸支店新館　（榮町通二丁目）



都市内外の住居欠乏

近來都市内外の住宅甚しき欠乏を告げ、中流の人士は固より細民階級に至るまで、其不潔なる不便不廉の陋屋を得るさへも困難しつゝあるの狀態に迫れるは、一は戰時特別の景況に連れて民衆の都會集中を促がしたるに依るべしと雖も、其最大原因は近時我國の大都市は凡て現代都市の一般的趨勢に添ひ、都市大發展の緒に就きたるが爲なるべし。都市の大發展には其反面に必ず市民の生活不安と住居欠乏の二者を伴はざるはなし、之れ自由なる生存競爭の必然的結果なりと雖も、國家として又公共團体としては其難問題を適當に解決するを以て其のあらゆる施設の基礎とせざるべからず。如何なる美政も亦如何なる訓話も市民の生活不安と住居欠乏を處理せずしては何等の効果を擧ぐるものにあらざるべし。近時食糧品暴騰の爲めに下層社會一般に動搖を生ぜるの例あり、住居欠乏は食糧品よりも更に根蒂深き社會の生活狀態不安を來たすの虞なしとせず。世の先覺者宜しく此動機を察して、都市住宅經營の準備に思を致すべきにあらずや。



都市計畫より見たる遷都（中）

會員　片岡安

三　明治維新の東京遷都

王政復古の新政實行に就きては、先づ以て天下の耳目を一新する爲めに遷都を斷行するを最も時宜に適した處置とすべきは、我國の古來幾度かの遷都が之を說明して居るのである。初め大久保利通遷都の己むを得ざるを看破し明治元年一月之を廟議にて決定せんと企てしも、多年の因襲に捉はれたる皇居維持論者を說破すること能はず、其年三月二十二日に天皇大阪へ行幸されて江戶御親征の行在所を此處に置かれた、之れ恐らく大久保公の建議を試に採用して天下の容子を探ると言ふ意味であつたかも知れぬ。併るに其のうちに江戶開城となり、德川氏は駿府へ引上げ、江戶は東京と命名せられ、其年の九月東國第一の大都として暫時行幸の意味にて車駕親臨さるゝに立至つたのである。

大久保利通が明治元年正月江戶討伐の大詔の發せられた後、大阪遷都の議を上つた趣意を見るに全く弊習打破を第一の目的とし、海外交通の便と富國強兵の利を第二として遷都の地を大阪に如くはなしとしたのであつた。今其文を摘記すれば、

維新前 江戸大繪圖

萬延元庚申年改版
須原屋藏版ニ據ル

凡例
- 寺院
- 神社
- 町家
- 武家

北 西 東 南

王子村 飛鳥山 奥州街道 陽田川 池袋村 高田村 目黒不動寺

今日の如き大變態、開闢以來未だ曾て聞かざる所なり。然るに尋常定格を以て豈是に應せらるべきや。今一戰官軍の勝利となり、巨賊東走すと雖、巢穴鎭定に至らず、各國交際永續の法立たず列藩離反の方向定まらず、人心恟々、百事紛紜として、復古の鴻業未だ其の半に至らず。纔に其端を開きたるものと謂ふべし。然るに朝廷上に於て一時の勝利を恃み、永久治安の思をなされ候ては、則ち北條の跡に足利生じ、前姦去つて後姦來るの覆轍を踏ませられ候は、必然たるべし。依つて深く皇圖を注目し、觸視する所の形跡に拘らず、廣く宇內の大勢を洞察し給ひ、數百年來一塊したる因循の腐臭を一新し、官武の別を放棄し、國內同心合體、一天の主と申し奉るものは斯くまでに有り難きもの、下蒼生といへるものは、斯くまでに賴もしきものと、上下一貫、天下萬人の感動涕泣致し候程の御實行擧り候事、今日急務の最急なるべし。是までの通り、主上と申し奉るものは、玉簾の內に在はし、人間にかはらせ給ふ樣に、纔に限りたる公卿方の外、拜し奉る事の出來ぬ樣なる御さまにては、民の父母たる天賦の御職掌には大いに乖戾したる譯なれば、此の御根本、道理適當の御職掌定まつて、初めて內國事務の法起るべし。右の根本を推窮して、大變革せらるべきは、遷都の典を擧げらるゝにあるべし。如何となれば、弊習といへるものは理にあらずして勢にあり。勢は觸視する所の形跡に歸すべし。今其の形跡上の一二を論ぜんに、主上の在す處を雲上と云ひ、公卿方を雲上人と唱へ、龍顏は拜し難きものと思ひ、玉體は寸地を踏み給はざるものと、餘りに推尊奉りては、自ら外に尊大高貴なるもの樣に思食させられ、終に上下隔絕して、其の形今日の弊習となりしものなり。敬上愛下は人倫の大綱にして、論なき事な

がら、過ぐれば君道を失はしめ、臣道を失はしむるの實あるべし。仁德帝の時を天下萬世稱讃し奉るは外ならず。即今外國に於ても、帝王從者一二を率して國中を歩き、萬民を撫育するは、實に君道を行ふものと謂ふべし。然れば更始一新、王政復古の今日に當り、本朝の聖時に則らせ、外國の美政を壓するの大英斷を以て擧げ給ふべきは、遷都に在るべし。是を一新の機會にして、簡易輕便を本にし、數種の大弊を拔き、民の父母たる天賦の君道を履行せられ、命令一度下りて天下慄動する所の大基礎を立てゝ推及し給ふにあらざれば、皇威を海外に輝し、萬國に御對立あらせられ候事叶ふべからず。

一、遷都の地は浪華に如くべからず。暫く行在を被定、治國の體を一途に居る、大いに爲すことあるべし。外國交際の道、富國强兵の術、攻守の大權を取り、海陸軍を起す等の事に於て、地形適當なるべし。尙其の局々の論あるべけれど、贅せず。

右內國事務の大根本にて、今日寸刻も置くべからざる急務と奉存候此の議行はれて、內政の軸立ち、百目の基本始て擧るべし。若し眼前些少の故障を觀念し、他日に讓り給はゞ、行はるべきの機を失し、皇國の大事去るといふべし。仰ぎ願はくは、大活眼を以て一斷して卒急施行あらんことを千祈萬禱し奉り候死罪。

正　月　　大久保一藏

右の上奏文は其形に於ては大阪遷都論なれども、其實質に至つては實に君主立國の經綸の眞髓を說くものであることを知らねばならぬ。大久保利通の炯眼は、王政復古の大令降下と共に、早くも

遷都の急要を上奏して廟堂の議を纏めんとした。併るに異論百出して議容易に決せず、取り敢へず臨時大阪行幸と決して明治元年三月二十二日天皇は大阪西本願寺別院へ入御され、江戸御新征の爲の行在所と定められた。其のうち江戸開城となり、江戸は東京と改められ、東京遷都の議油然として勢を得て來たのである。

東京遷都の首唱者は大木喬任、江藤新平氏等なりと雖も、それに先ち前島密氏は大久保利通の大阪遷都主張を駁して江戸を帝都とせざるべからざる所以を細密に開陳したと言ふことである。東京遷都を主張したるものは舊來の積弊打破と言ふ點に於ては利通の議論と一致し、地形の勝に據るべき點に於ても全く同一の見界であつた。唯東北の雄藩未だ佐幕の志を棄てず、人心動搖の兆著しきものあるに加へて、北方露領境界の問題等もあり、國權統一の必要上東都は最も便利の地位なるを主張したのであつた。更に有力なる議論としては大阪の地は百貨輻輳の利便ありて商工業自然に殷賑を極むるも、若し東都の地をその儘にさし置けば一時に衰頽を來し、東北の雄鎭立どころに疲弊するの虞なしとせず、三百年間の繁榮の一朝に枯渇するは容易からぬ事態なり、宜しく帝都を此處に占めて其繁榮を持續すべしと言ふのであつた。

大阪遷都論の根據は主として東京遷都論と一致して居つた爲めに、廟議は自然東京遷都を決行するに傾き、其年七月十七日左の詔あり。

朕今萬機ヲ親裁シ億兆ヲ綏撫ス江戸ハ東國第一之大鎭四方輻湊之地宜シク親臨以テ其政ヲ視ルヘシ因テ自今江戸ヲ稱シテ東京トセン是朕ノ海內一家東西同視スル所以ナリ衆庶此意ヲ體セヨ

斯くて八月初度の東京行幸御發表あり、九月二十日御進發となつた、けれども京都市民の失望や公卿其他の反對を虞り、未だ公然たる遷都を決したのではなかつた、即ち東京へは臨幸さるゝのであつて不日京都へ還幸なるべき筈であつた。十月十三日東京へ御着、西城へ入御、乃ち令して西城を皇居となし東京城と稱へ、登城を參內と稱すべきを命せられた。

其歳十二月京都へ還幸仰出され京都御滯在は僅かに二ケ月餘にして翌明治二年三月再び東京行幸となり、太政官をも東京へ移され政治の中心は此處に全く東京に遷つたのである。斯かる中にも各府縣中京都を第一とし、東京、大阪之に次ぎ尙ほ京都を以て第一の皇居地とせられしも明治四年に至り東京を第一とし、京都、大阪之に次ぐの順序となり、天皇京都へ赴かるゝを行幸と稱し、東京に還御さるゝを行幸とは言はざるように定まり、東京は自然に帝都と確定したのである。約まり京都は皇居であるとしても名義上又形体上御所を存有するに止まり、實際の皇居即ち政治の中心地としての宮城は早くも明治二年より東京に遷されたのである。

之を冷靜に觀察するに、明治維新の東京遷都は人心を新たにする爲めに企てられたる大阪遷都より、再轉して德川氏三百年の都城を利用するに至つたのであると言ふことが出來る。其大阪行幸より京都還幸、東京再度の行幸に於ける廟議の移り變りは全く朝令暮改の譏なきにあらず、況して京都を皇居と稱へ東京行幸と觸れ廻して置きながら、何時の間にか東京を皇居と定められしは、京都士民の反抗を避くる爲とは言ひながら餘りに巧妙なる手段であつた。

今其當時の京都及東京兩大都の實質を考ふるに、其廣袤に於て又人口に於て東京は京都に優るこ

と約三倍以上であり、繁榮の度に於て又交通の便利に於て京都は到底東京と比較し得ない程劣つて居たのである。殊に皇居其ものゝ地相、結構、防備等に於て從來の京都の假皇居は、江戸城の雄大なる組織には比肩し得ない程貧弱であつたことは事實である。故に遷都の急要なることに廟議略傾きかけた際丁度江戸城開放と言ふ好機到來した爲め、大阪遷都の主唱者も、京都居据はり論者も一齊に東京遷都に同意したのは、さもあるべきことゝ思はれる。若し其當時江戸城開け渡しの順序に運はず、江戸の市街戰猛烈となり、江戸城を初め市の繁榮地域が全部燒失したとすれば、假令德川氏の大政奉還が無事に出來たとしても、或は東京遷都は行はれなかつたかも知れぬ。むしろ大久保利通の意見の如く大阪を帝都として、東京には一有力なる地方廳を置いたに過きなかつたかも知れぬのである。

東京は三百年間德川氏の都として實際の政權を此處に蒐め、近代に於ける我國の最善最美の都市であり、又其の消費力に於て他の如何なる都市も及ぶものがなかつたから中古式の都市としては全く理想的のものであつた。殊に其城內の結構は人力と財力を盡し、形勝の優と相待つて其當時の我國民の欽望崇敬の目標であつた程に其價値は偉大なものであつた。大阪遷都論者たりし大久保甲東までも直ちに東京遷都に同意したのも無理はない。

乍然其當時東京嘆美者が唱へた如く東京は果して帝國の中央地なるや否や、又其海面は大艦巨船を容るゝに便なるや否や、其防備完全にして市街宏濶なりと言ふ實あるや否や、數へ來れば其當時の東京遷都論者の以て特長なりと信じたる其の地相や海面の關係、及市街の組織等は、吾人の都市

觀を以てすれば、何れも貧弱姑息のものたるを免かれぬのである。唯大阪や京都に比して多少優つた點があつたに過ぎない、若し其當時廟堂の士にして眞實の帝都建設を理解するものありしならば大阪又は京都の郊外に於て一大都市の計畫を企てたであろふと思はれる。けれども其當時の事情又餘りに切迫して、都市建設の計畫をなすが如き暇なかりしことも考慮して江戸城利用の如き姑息手段を寬怒して遣らねばならぬ。

四　帝都としての淀河流域

我國の帝都建設の位置としては淀河流域を最好適の地となすべきこと、古來定說ありて今更事新らしく論ずるまでもなきことなれども、我國の現狀及今後の發展に考へ及ぶ時は切實に其感を深くするのである。明治三十二年の頃其當時の大阪商船會社長にして現時の政友會總務たる中橋德五郎氏は其著大阪の經營の中に大阪遷都論を唱へしは吾人の同感に値するものであつた。其論旨に曰く

『遷都の事本より言ひ易からざるなり。惟ふに一國の帝都は其國の國是に遵ひ、其領域の廣狹山海の形勢と隣邦領土の配置とに應じて、之を定めざるべからず。或は力を內地に專らにするが爲めに、其宜しきに從ひ、或は禍亂を戡定するが爲めに、之れを一方に遷すが如く、各其時の必要に適應すべくして、未だ必ずしも百年不動の帝都を肇造すべきものにあらず。我邦に於ても亦王政復古に際して、一旦帝都を關東に移したりと雖も、封建の歷史習慣相共に破壞し盡し、中央集權の基礎確立し、進んで領土を海外に開拓し、我商權を四表に伸張せんとするの今日に當て、關東

や一方に僻在して、東亞南洋に向つて國威を顯揚せんと欲する帝國の首都としては、未だ以て其所を得たりといふ能はず。故に今の秋に當て、算あつて計を畫し、都を大阪の地に移すは、豈時の宜しきに從ひ、開國進取の國是を遂行するに關し、最も緊要なる問題と謂はざるを得んや。……王政復古の時に當てや、東北の各藩幕府の脫兵と相結び、以て王師に反抗し、月を閱して初めて之を鎭定することを得たりと雖も、天下の人心尙未だ全く一に歸せず、封建の習慣未だ打破し盡らず、動もすれば輒ち不軌を圖るの徒を現はさんとしたるが故に、遽に歷代の都を捨てゝ帝都を幕府政權の中心たりし江戶に遷し、以て東北の人心を撫鎭し、爰に北方開拓防禦の途を啓き遂に天下の人心を新にしたるは、又其時の宜しきに適應したる者なり。今や封建の歷史習慣共に破壞し盡し、中央集權の基礎確立し、不軌を圖るの輩其跡を絕ち、國勢は駸々として進み、萬民各々事功を擧ぐるに急なり。然らば則ち維新の宏謨に基き、開國進取の國是に據り、東亞南洋に向つて國威を顯揚するの秋に際しては、東京の地たる以て大船巨舶を容るべからず、橫濱の地たる輸出港にして輸入港に非ず。是に於て獨り大阪の地たる北西比利亞の鐵道貫通し、東巴拿馬の運河開鑿其の功を竣り、東亞南洋の各國と南北亞米利加各邦との間に介立して、優に太平洋上の商權を掌握するの勢を有するものなり。故に今の時に方り徐ろに計を定めて、帝都を大阪の平原に遷すは、最も現今の急務なるべし。……』

中橋氏の論旨は現在及今後の東亞の形勢より打算して東京を偏僻の地と見做し、むしろ大阪の平原を以て適當なる中心地點と斷定したるものであつた。此の論旨に於ては恐らく如何なる人も異議

なきことであらふと思はれる。然るに何故か同氏の斯かる大論文が一の空論として取扱はれ、今日まで一度も識者から眞面目の批評を受けないのである。遇々之を論評するものがあつても唯漠然たる否定說に過ぎないので、少しも傾聽の價値がなかつた。又中橋氏の意見も其大体に於ては首肯すべきものであつたが、何故に更らに數理的に之を敷衍して、社會より默殺さるゝを防がなかつたかは一の疑問である。遷都の如き大問題を社會に提供しながら全く默殺されて其儘に終るが如きは其態度に於て熱誠と眞摯を欠きたるものと言はねばならぬ。乍併中橋氏の以上の見識は已に二十年前に發表されたるものにして今日とは多少事情を異にすれども其精神に至つては現在及今後に亙り變りなき卓論であることを承認するの價値を見出すのである。吾人は後章に於て更らに此見識を敷衍して其實現の計畫の緊急なるを論述して見たい。

其後十四年を經て大正の當初男爵九鬼隆一氏は御大禮奉祝會に於て京都遷都計畫を提案したけれども、其當時多少社會の耳目を惹きたるのみにて再び默殺されて了つたのである。同氏の論旨は大体に於て中橋氏の意見を踏襲したものであつた。曰く

『前略……第一に維新に際し大久保公等が主として東京に遷都の議を立てゝ之を實行せらるゝに至りましたのは、人心を新たにするの必要もあつたでありませふけれども、其實は東北地方若くは北海道を始め北方の關係が東京遷都を一大必要としたのであります。……然るに帝都の位置の內地の關係に就きましては今や言ふべきことはありませぬが、外に對する關係は實に時勢上大變遷をなしたのであります、例せば支那の事、朝鮮に關する事、又露國との親善益々厚きも其極東

に關係する事、歐洲列強の東洋に於ける事、殊に列強の支那に關する均勢の事等數へ來れば幾多の關係が殆んど測知すべからざるものがありまするが、此等は皆西方の事に屬しますので、曾て關係の多大なりし內外、東北乃至北方の事は殆んど全く關係がなきことになつたのでござります隨ふて嘗て東京に帝都を遷されたる當時適當なりし理由は今は殆んど消滅したと申しても失言でないと信じます。……』

而して同氏は更らに今後の交戰の場合を想像して東京灣の防禦は非常に困難なれば、皇居が其東京灣に臨むは危險此上もなし、京都は國勢上からも亦此の危險を避くるに於ても好適の地なりと斷定し、最後に帝都を京都に遷すに就きて東京に於ける公館その他の損害を一億七千萬圓と計上せられた。其他可なり詳細の問題まで考慮されたようなれども、其等は現代都市の發展を眼中に置かざる消極的見地より出發せるもののみにして此處に列擧すべき價値あるものではなかつた。

要之我淀河の流域たる畿內の平原は結局我國の帝都を建設せねばならぬ運命を有するのである。凡そ一國の文化の中心は地理的に又經濟的に最も利便多き處なるを要し、對外的發展の關係に於ては殊に其重要なるを感ずるのである。況して現時の如き內外交通の頻繁を增し、內治、外交、商事等凡て寸刻の速さを爭ふの時期に於ては其首都の地理的利便が招徠する利益は幾何なるや測り知るを得ないのである。淀河流域が古來我帝都の地として選ばれたのは必ずしも偶然ではなかつた。唯明治維新の際東北鎭定の目的と江戶從來の繁榮の便利を踏襲せん爲め關東の地に帝都は移されたけれども、其目的が達せられた以上は再び淀河流域の好適の地に永遠的計畫の帝都を建設するのが順序でなくてはならぬ。帝都建設の具体的意見は後章に之を論ずる。（此章畢）



最近の大阪港

（四）

大阪市役所港灣部

大阪港輸出入貨物地方別五ヶ年對照表

輸出之部　其一

	關東州		露領亞細亞		北支那		長江流域		南支那	
	噸數	價額	噸數	價額	噸數	價額	噸數	價額	噸數	價額
大正元年 大阪積 大阪稅關手數	六〇、六三五	一四、三五〇、一八〇	一八五	六、四三二	二七、八九四	一〇、三七、三四七	三、二八九	九二〇、九二〇	—	—
神戶經由積 大阪稅關手數	一七、六六六	四、〇五九、七六八	一二八	四一、五三二	五六、九〇〇	二六、九九五、〇三	九、六二九	五四一	一、七六〇	六八二、八八〇
計 神戶稅關手數	二一、二五一	四、八三六、九〇七	一二八	四一、五三二	五六、九〇〇	二六、九九五、〇三	九、六二九	五四一	一、七六〇	六八二、八八〇
	九九、五五五	二三、一四六、八四七	三三	四七、九五七	四七、二九〇	二四、二五四、九三九	三七、四四七	一、九三一	八、七七九	二、八四七、三〇三
同二年 大阪積 大阪稅關手數	四九、八八九	一三、二六八、一〇四	—	—	四八、五二九	二六、八二八、一三	一八、〇一四	四、九四一、四四〇	—	—
神戶經由積 大阪稅關手數	一九、二〇五	六、七三三、八一三	一九四	五九、三二一	七七、七六五	二六、一五三、一〇一	七一、〇六六	一七、三一三、三三〇	一、三六	三八一、三九
神戶稅關手數	三三、九〇〇	七、四四一、一五六	—	—	七三、〇〇五	一九、七、一三三	四四、一七六	一〇、三一一、三三二	七、三一〇	二、二五四、五八三
計	一〇三、九四四	二七、四三三、二五三	一九四	五九、三二一	一九九、二九九	六二、一七八、五四五	一二三、二五六	三一、四六三、八九三	八、五四六	二、六三五、八〇二

輸出之部　其二

年	大阪積	關手數	大阪稅	神戶積	關手數	大阪稅	經由積	關手數	神戶稅	計	大阪積
同三年	四九、五三一、三八八	二、九四	四、三六、三九	二、八、七五六	二、三〇、一一	二、四三	九〇、二四三、二一八、五、〇二四	八七	二五、五〇〇	七三、八五五、二四、二六二、八四六	七、八、八四八
同四年	五〇、四八二、二一八、四四二	二〇、五四一	四、六一八、五二一	五、五四一、六〇八	一三、二〇〇	三一、七〇八	九三、八七六、三二、三〇六、五七一	一六、二八三	八、一四三、五四九	二九、一八八、〇四三	五、九〇三、二四三
同五年	五一、四七四	三〇、九〇八	四〇、五二四	一〇、三五一、四三五	二、四五七	二一、二一七	一二三、九〇六	一七、二二九	九、二三四、三九二	一二、八、六四五	三〇、九〇九、二七六

年	英領香港	噸數	價額	佛領印度	噸數	價額	遲羅	噸數	價額	海峽殖民地	噸數	價額	英領印度	噸數	價額
大正元年	三、〇三〇	一、八、六八、八三	二一、一八五	一八三	五六、九六六	九五、八三一	一四〇	一五、一四六	二六三、一九三	一、七七七	四八六、七五	三、三九六、〇三八	五、四八八	二九、三〇六	三四、七九四
計	二四、二二五	七、一六三、〇六〇	五三三	一五二、七九八	六六、八六八	八〇八	二七八、四三八	一四、三五七	一、八五六、八三八	三、八八二、七五三	一、四九六、一二九三	九、七三八、四七〇	一、四九六、一二九三	八、二四二、一七七	九、七三八、四七〇

輸出之部 其三

年	大阪積	神戸積	經由積	計	大阪税	關手税	神戸税	經由税	計	大阪數	關手數	神戸數	經由數	計
同二年	五、九六一			五、九六一										
	二五、九七七			二五、九七七										
	三一、九三八			三一、九三八										
同三年	八、四七七			八、四七七										
	二〇、三九三			二〇、三九三										
	二八、八七〇			二八、八七〇										
同四年	六、八一九			六、八一九										
	三、三九六			三、三九六										
	一五、二八九			一五、二八九										
	二五、五〇四			二五、五〇四										
同五年	七、四一六			七、四一六										
	三、六五〇			三、六五〇										
	一八、一〇〇			一八、一〇〇										
	二九、一六六			二九、一六六										

年	大阪積	神戸積	經由積	計	大阪税	關手税	神戸税	經由税	計	大阪數	關手數	神戸數	經由數	計
同二年	三四			三四										
	一〇、六四八			一〇、六四八										
	五七四			五七四										
	二三〇、九八六			二三〇、九八六										
	一、九一			一、九一										
	一五、五〇一			一五、五〇一										
	一七、四二三			一七、四二三										
同三年	五三	三四六		五三	三四六									
	四、二四五、〇四六			四、二四五、〇四六										
	四、七六八、三九二			四、七六八、三九二										
	六、四三九			六、四三九										
	三九、四六二、一一〇			三九、四六二、一一〇										
	四五、九〇一、一三、一八五、一九〇			四五、九〇一、一三、一八五、一九〇										
同四年	二、一七二、一〇三			二、一七二、一〇三										
	二、五七三、九八五			二、五七三、九八五										
	二、七一八、九四九			二、七一八、九四九										
	一、九〇〇、一四八			一、九〇〇、一四八										
	三、七七四、二四六			三、七七四、二四六										
	一、〇七二、一四一			一、〇七二、一四一										
同五年	二、三四〇、四八九			二、三四〇、四八九										
	二、五八三、九五五			二、五八三、九五五										
	二、八三五、二四四			二、八三五、二四四										
	一、九五六、一九〇			一、九五六、一九〇										
	四、〇四六、〇四六			四、〇四六、〇四六										
	一、〇七二、一四一			一、〇七二、一四一										

洲名	數	價額	噸數	價額	噸數	價額	噸數	價額	噸數	價額
濠洲及南洋諸島	七、四一六	四、二九三、四四三	一、三三五、四二九	一、六九二、一一九、五八四	一六、九四五	一、八〇四	一六、七五五	一、六九六、七三三	五、二五五	四、〇〇一、七九九
伊太利	三、六五〇	一、三三五、四二九	五、四九一、六九二	二、一一九、五八四	七一、六五八	二、一四四	五、四七八	八五、六七九	五、〇四九	九、二四一、三六五
佛蘭西	一八、一〇〇	五、四九一、六九二	三、七五三	四、二一九、二五四	一、三〇五、二八二	一、一四四	三、〇四九	一、六九六、七三三	八、六二一、四九二	六、九、九〇二、九七〇、〇七二
英吉利	二九、一六六	一一、一一九、五八四	四、二九三	一、八九二	一、七九九、二〇七	三、九八二	三一、七八二	八、一〇〇	九、九三七、六五六	二二〇、八七六、四〇八、四八九

年	大阪積	神戸積	經由計	大阪積	神戸積	經由計	大阪積	神戸積	經由計	大阪積	神戸積	經由計	大阪積	神戸積	經由計
	關手數	關手數	關手數	關手數	關手數	關手數	關手數	關手數	關手數	關手數	關手數	關手數	關手數	關手數	關手數
大正元年	八、四三四	七五	一七、六六四	二五七、六六〇	二九、二七四	二六、一七三	一三〇	七三一	八六一	五、五九七	八七、七七三	九三、三一七	一〇	二、三六七	二、三七七
	廂			円			廂			円			廂		
同二年	三六二		一七、四九七	一一〇、二九七	五、三三一、〇三〇	五、四四一、三一七	四八		四八	一、八七九		五、一九九	三	三、四三五	三、四三八
同三年	三七		三三、七一四	六五、八一四	六、五八五、四八五	六、六五一、二九九	六		七六	一、八七九		二三、七四五	一七	二、三三七	二、三四四
同四年	三七、六八五	三、八六一	三九、八六七	一、六四四、九八三	六六五、八九二	三、九〇四、三四九	一〇三		一〇三	二四、二八四		二四、二八四	二五九	五、六三四	五、八九三
同五年	一八、〇三〇	四、〇七三	四六、四五五	一、九七九、八六二	八二、三五五	一七、九三九、五六三							三一四		八、六四四

輸出之部　其四、

年		獨逸		北亞米利加		其他		總合計	
		噸數	價額	噸數	價額	噸數	價額	噸數	價額
計		六八、五五八	二〇、七三一、八五九	三三八	七四、三二六	八、九五八	二、七六九、九二四	〇、七三九	七、一八四、三五七
大正元年	大阪積								
	關手數	噸	円	座	円	噸	円	噸	円
	大阪稅	一五	六、四五七	二九〇	五四、五二〇	二六七	六〇、五六〇	一〇、二五三	二五、七六六、一〇七
	神戶經由積	二、六一五	五九八、四五八	三五、一五三	六、六〇七、七二七	一、〇三七	一五、五〇五	一五八、八八二	四七、七三二、九二九
	關手數	二、六二〇	六〇四、九一五	三五、四四三	六、七〇五、二四七	一、三〇四	二一六、〇六五	一五六、一五七	七〇、三六、三六
	大阪稅								
	關手數	四	九二七	一九二	三六、〇八四			二一六、四三二	三五、〇七六、六五六
同二年	神戶經由積	二、三〇〇	五三四、九六六	二五、七三四	六、七一五、八九〇	一、〇八九	二七一、七三三	一八六、八〇一	五六、六九二、三四
	關手數	二、三二四	五三五、八九三	二五、九二六	六、七五一、九七四	五、九四六	一、五三五、二九	三一九、二九	八〇、〇四四、四〇四
	大阪稅								
	關手數							六三一、三六二	一七一、七四四、三二四
三年	大阪積								
	關手數								
	大阪稅								
	神戶經由積	一、一〇四	三四五、九六九	一	一七三	三、六七四	八、九二四	一〇、八五五	一、〇八、九二四
	關手數	一、一〇四	三四五、九六九	二六、七四〇	四、三九三、九四八	三、六七四	八、九二四	八八、九二四	八八、九二四
	大阪稅								
	關手數								
同	大阪積								
	關手數								
	大阪稅								
	神戶關手數			一一四	二〇八、五七〇	一〇		一、一八〇	

輸入之部　其一

年	經由積 神戶稅 關手數	計	同五年	神戶經由積 大阪稅 關手數	神戶經由積 大阪稅 關手數	神戶經由積 神戶稅 關手數	計
	———	———		———	———	———	———
	———	———		———	———	———	———
	三六、二七五	三六、五二四		一四一	一、三〇七	三八、四二六	三九、八七四
	四、五三七、七三三	六、〇二一、〇一六		二三四、八九二	二、〇一五、二三五	五、一一六、一五四	七、三六六、一八二
	三、九九八	四、〇〇八		———	二八	四、六六五	四、六九三
	一七〇、四八八	一七一、六六八		———	九六、七二八	一、一一〇、四二九	一、二〇七、一六七
	三二六、三六五	七三五、三七一		二五六、五四三	一八〇、四九〇	三九八、四二七	二二〇、〇七七、九五五
	八三、〇八三、七七二	一九一、五〇一、二五三		七五、三七七、八八四	六四、五二二、七二八	二二〇、一八七、三四三	二二〇、〇七七、九五五

年	關東州 露領亞細亞 北支那 長江流域 南支那	大阪卸 關手數	大阪卸 大阪稅	神戶經由卸 關手數	神戶經由卸 大阪稅	神戶經由卸 神戶稅	計	同二年	大阪卸 關手數	大阪卸 大阪稅	神戶經由卸 關手數	神戶經由卸 大阪稅	神戶經由卸 神戶稅	計	同
大正元年	噸數	二六、九七一	一、〇四〇、〇四〇	五、三六七	一、九六八	三四、三〇六	二、〇九六、九八一		一〇、一二四	一、〇二六、二九七	八、〇二八	三八一、三二七	七、五八一	二、一〇四、五三一	五八、〇二九
	價額	一、九九八、〇三〇	二三〇、三八四	七九六、五六七	一、六一八	一、二四七	三、〇三九		一、七八〇	五六二	一三一	二、四七三		一三	
	噸數	二六、九七一	一、〇四〇、〇四〇	五、三六七	一、九六八	三四、三〇六	二、〇九六、九八一		一〇、一二四	一、〇二六、二九七	八、〇二八	三八一、三二七	七、五八一	二、一〇四、五三一	五八、〇二九
	價額	一、九九八、〇三〇	二三〇、三八四	七九六、五六七	一、六一八	三、〇三九	二、〇九六、九八一		一〇四、七二三	七四、一一一	一五、二九五	一九四、一一八		一、八五七	
	噸數	二三、九九八	二、〇七三、三六一	二九、一五二	一、二九九、四四一四	三〇、三八〇	八三、五三〇		二八、七三六	一一、九八四	六、一三六	四六、九四六		一五五、二九九	
	價額	二、〇七三、三六一	一、二九九、四四一四	二、四五六、六一〇	八、二九、三八五		五、八二、五七九		二、〇三八、四三九	八九八、六七九	四四、〇四四	七九、九〇四	一三、八九五	六、四九六、四〇八	一四、〇四三
	噸數	四八〇	九四九、六五六	七七	三、六九三		七七		八、五三三	四四、〇四四	七九、九〇四	一三、八五九、四九七	三、八八四、四七四	二、四六二、二九七	
	價額	———	———	———	———		———		———	———	———	———	———	———	
	噸數	———	七五、三七七、八八四	六四、五二二、七二八	二二〇、一八七、三四三		二二〇、〇七七、九五五		一、八六三、三二三	六、九六五、七〇五	二、八五九、四九七	二、八六八、四七四		———	
	價額	———	八三、〇八三、七七二	一九一、五〇一、二五三	二四、三〇一		五、五九四		二、五一三	二、五一三	五一	二、五六四		———	

| 三年 | | |

輸入之部 其三

年	大阪卸	關手數	大阪稅	神戶卸	關手數	大阪稅	神戶稅	經由計	關手數	大阪稅	神戶稅
同二年	大阪卸	一五	二一、四〇二	神戶卸	一、六七二	一、八七七	一、六八一	計	二三、六五五	二三、三五三	一三、〇六五、九〇二
同三年	大阪卸	一	七、〇五〇	神戶卸	八五	九〇一、二五二	八、〇八四、七四八	計	九八、三三五	八、九八五、九八六	一〇五、三八六
同四年	大阪卸	—	—	神戶卸	—	—	—	計	—	—	—
同五年	大阪卸	—	—	神戶卸	—	—	—	計	—	—	—

年	大阪卸	關手數	大阪稅	神戶卸	關手數	大阪稅	神戶稅	經由計	關手數	大阪稅	神戶稅
同二年	大阪卸	八、五五八	三六、七九五	神戶卸	六八一	三九、八六六	三、七〇〇	計	九、三三九	四〇、四九五	三二、四八八
同三年	大阪卸	三六七、〇六五	八二一、六三二	神戶卸	三九、八六六	八二、五七八	八二、五七八	計	四〇七、〇三一	九〇四、二一〇	一九、一八八
同四年	大阪卸	—	—	神戶卸	—	—	—	計	—	—	—
同五年	大阪卸	—	—	神戶卸	—	—	—	計	—	—	—

年	大阪卸	關手數	大阪稅	神戶卸	關手數	大阪稅	神戶稅	經由計	關手數	大阪稅	神戶稅
同二年	大阪卸	二五八	一、八九一、五二九	神戶卸	八四、六八六	二、四〇〇、一四六	一、八九、一四六	計	四、四〇八、一四四	五、六七三	二、四〇〇、一四六
同三年	大阪卸	—	—	神戶卸	—	—	—	計	—	—	—
同四年	大阪卸	—	—	神戶卸	—	—	—	計	—	—	—
同五年	大阪卸	—	—	神戶卸	—	—	—	計	—	—	—

年	大阪卸	關手數	大阪稅	神戶卸	關手數	大阪稅	神戶稅	經由計	關手數	大阪稅	神戶稅
同二年	大阪卸	二一、三六四	四、六二八、五八〇	神戶卸	一〇、九八一	三、四九二、六五八	七〇、一八七、七〇六、五五〇	計	一〇二、五三三、八三七、七八八	二一、三六四	四、六二八、五八〇
同三年	大阪卸	三一、六八六	六、七八二、三九四	神戶卸	九、一七二	三、七六九、六九五	七〇、五七二、五九三、六七九	計	一二一、四三〇、一四五、七六八	三七、〇七五	一五、五七五、八五三
同四年	大阪卸	—	—	神戶卸	—	—	—	計	—	—	—
同五年	大阪卸	—	—	神戶卸	—	—	—	計	—	—	—

年	大阪卸	關手數	大阪稅	神戶卸	關手數	大阪稅	神戶稅	經由計	關手數	大阪稅	神戶稅
同二年	大阪卸	二一、三六四	四、六二八、五八〇	神戶卸	一〇、九八一	三、四九二、六五八	七〇、一八七、七〇六、五五〇	計	一〇二、五三三、八三七、七八八	二一、三六四	四、六二八、五八〇
同三年	大阪卸	三一、六八六	六、七八二、三九四	神戶卸	九、一七二	三、七六九、六九五	七〇、五七二、五九三、六七九	計	一二一、四三〇、一四五、七六八	三七、〇七五	一五、五七五、八五三
同四年	大阪卸	二四、六五〇	八、六六〇、二九	神戶卸	九、一七二	三、七六九、六九五	七〇、五七二、五九三、六七九	計	一二一、四三〇、一四五、七六八	三七、〇七五	一五、五七五、八五三
同五年	大阪卸	二四、六五〇	八、六六〇、二九	神戶卸	九、一七二	三、七六九、六九五	七〇、五七二、五九三、六七九	計	一二一、四三〇、一四五、七六八	三七、〇七五	一五、五七五、八五三

年	大阪卸	關手數	大阪稅	神戶卸	關手數	大阪稅	神戶稅	經由計	關手數	大阪稅	神戶稅
同二年	大阪卸	一五	二一、四〇二	神戶卸	一、六七二	一、八七七	一、六八一	計	二三、六五五	二三、三五三	一三、〇六五、九〇二
同三年	大阪卸	一	七、〇五〇	神戶卸	八五	九〇一、二五二	八、〇八四、七四八	計	九八、三三五	八、九八五、九八六	一〇五、三八六
同四年	大阪卸	—	—	神戶卸	—	—	—	計	—	—	—
同五年	大阪卸	—	—	神戶卸	—	—	—	計	—	—	—

年	大阪卸	關手數	大阪稅	神戶卸	關手數	大阪稅	神戶稅	經由計	關手數	大阪稅	神戶稅
同二年	大阪卸	八、五五八	三六、七九五	神戶卸	六八一	三九、八六六	三、七〇〇	計	九、三三九	四〇、四九五	三二、四八八
同三年	大阪卸	三六七、〇六五	八二一、六三二	神戶卸	三九、八六六	八二、五七八	八二、五七八	計	四〇七、〇三一	九〇四、二一〇	一九、一八八
同四年	大阪卸	—	—	神戶卸	—	—	—	計	—	—	—
同五年	大阪卸	—	—	神戶卸	—	—	—	計	—	—	—

年	大阪卸	關手數	大阪稅	神戶卸	關手數	大阪稅	神戶稅	經由計	關手數	大阪稅	神戶稅
同二年	大阪卸	二五八	一、八九一、五二九	神戶卸	八四、六八六	二、四〇〇、一四六	一、八九、一四六	計	四、四〇八、一四四	五、六七三	二、四〇〇、一四六
同三年	大阪卸	—	—	神戶卸	—	—	—	計	—	—	—

年	大阪卸	神戸經由卸	計	大阪卸	神戸經由卸	計	大阪卸	神戸經由卸	計	大阪卸	神戸經由卸	計
	關手數	關手數		關手數	關手數		關手數	關手數		關手數	關手數	
	大阪稅	大阪稅		大阪稅	大阪稅		大阪稅	大阪稅		大阪稅	大阪稅	
	神戸稅	神戸稅		神戸稅	神戸稅		神戸稅	神戸稅		神戸稅	神戸稅	
大正元年	三八一、五五九	一一、三一一	三八一、五五九	四六、二〇八	一七、八〇八	六四、〇一六	二、七三六、三二八	七〇、五八八	二、八三四、〇九六			
	二、七三六、三二八	七、四五四、二一〇	一〇、一九〇、五三八	五、五七二、三三三	一、〇二三、九八六	六、九五三、二一六	四、五八一、七一一	一七、〇七五、三〇九	二一、八三四、〇九六			
	三一	六	三七	二三		二三	九四八	九七一	三三一			
	一〇七、三一四	五一、〇五六	一五八、二五八	三、八三五		三、八三五	一五七、六六一	一六一、四八六	一六一、四八六			
	三、七六〇	一九	三、七四一	二三		二三	二、五五五	二、五六七	二、五六七			
	一、四二五、〇六三	六八、六七五	一、三五六、三八七	二、九二九、三五六		二、九二九、三五六	一、三五八、七五五	一、三五八、七五五	一、三五八、七五五			
	三、八二三	一三六	三、六八七	七		七	三、九〇七	三、九〇七	三、九〇七			
	八一〇、一八九	三九、六七二	七七〇、五六二	二五、五一〇		二五、五一〇	七八七、〇四四	七八七、〇四四	七八七、〇四四			
同三年	大阪卸	神戸經由卸	計	大阪卸	神戸經由卸	計	大阪卸	神戸經由卸	計	大阪卸	神戸經由卸	計
	關手數	關手數		關手數	關手數		關手數	關手數		關手數	關手數	
	大阪稅	大阪稅		大阪稅	大阪稅		大阪稅	大阪稅		大阪稅	大阪稅	
	神戸稅	神戸稅		神戸稅	神戸稅		神戸稅	神戸稅		神戸稅	神戸稅	
	九、九九六	五五、三五〇	三四、八六一	一、〇三二、九八六	二、七一七、四七八	三、七五〇、三五四	一〇二、三五五、七〇四	一〇二、三五五、七〇四	一〇二、三五五、七〇四			
		二〇	六四八		三	九四八		六六八	六六八			
		三、〇〇二	一二三、四九七		一七九五	一、八三八		一、〇二四、三二四	一、〇二四、三二四			
		四三	一、七九五		二四、六三五	二四、六三五		一、三七七	一、五六七			
		一九〇	一、三七七		三八、〇〇〇	三八、〇〇〇		二七五、三四九	三一三、三四九			
同四年	大阪卸	神戸經由卸	計	大阪卸	神戸經由卸	計	大阪卸	神戸經由卸	計	大阪卸	神戸經由卸	計
	關手數	關手數		關手數	關手數		關手數	關手數		關手數	關手數	
	大阪稅	大阪稅		大阪稅	大阪稅		大阪稅	大阪稅		大阪稅	大阪稅	
	神戸稅	神戸稅		神戸稅	神戸稅		神戸稅	神戸稅		神戸稅	神戸稅	
	三、九三三	二九、三五九	一、〇三二、九八六	一、〇三二、九八六	二、七一七、四七八	三、七五〇、三五四	一〇二、三五五、七〇四	一〇二、三五五、七〇四	一〇二、三五五、七〇四			
		五	二九		二、四三七、四八三	二、四三七、四八三		一、一〇二、五五五	一、一〇二、五五五			
		三、三五九	三、八三六		一、五五五	一、五五五		二四、四一三	二四、四一三			
		二、三四四	二三七、六〇五		四三	四三		七〇、四〇四	七〇、四〇四			
			二四一、四四一		一九〇	一九〇		三、八五〇	三、八五〇			
同五年	大阪卸	神戸經由卸	計									
	關手數	關手數										
	大阪稅	大阪稅										
	神戸稅	神戸稅										
	一八、五四三	二一、二〇二	五三、六六九									
	九六八、二九三	一、五六七、四三八	二二、五四二、七八一									
			五、五六〇									
			六七九、四四〇									
			一、八七〇									
			一、〇七〇、七〇二									

輸入之部 其四

年		英吉利		白耳義		和蘭		獨逸		瑞典諾威丁抹	
		噸數	價額	噸數	價額	噸數	價額	噸數	價額	噸數	價額
		噸	円	噸	円	噸	円	噸	円	噸	円
計		九二、四一四	二五、〇七八、四九二	五、五六〇	六七九、四四〇	一、九八二	一、一七五、〇三二	—	—	—	—
大正元年	大阪卸	三、九九四	一、八五三、〇一〇	—	—	—	—	—	—	—	—
	神戸卸	二、九九三	一、〇三五、六四七	二、〇八二	八七、一〇五	三、六二四	三五四、六〇六	四、五〇三	二、〇四六、五八八	七九	二、七八四
	經由關手數	一四〇、九四二	一、四七七、三三二	九三、八九二	九五、九七四	一、七九二	一八六、五〇七	六三、四三九	七、五三三、〇五五	一四、八九三	五八八、八八五
	經由神戸稅	一四七、八七九	一、三五、八八九	一〇、六二九、六〇六	一〇、五三二、五〇一	五、四一六	五四一、一一三	六七、九四一	九、五七九、六四三	一四、九七二	五九一、六六九
計		二三二、四五六	二、六九二、三三五	九、二〇七	一、五〇八、四一八	一、一八六	一二一、六二四	三、三三五	一、一四七、五六九	五四九	一三、五八一
同二年	大阪卸	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	神戸卸	二、六九二	二、三五、七七五	七二、九九九	八、二〇六	一、三〇五	一二九	三三五	一四、〇七四	九、九四九	一、〇九二、三六一
	經由關手數	二、八三三	二、三八、二三二	一〇、六四八、三六二	一〇、六二九、九四四	一、三〇五	一二、二〇三	四一、四七四	九、九〇三、六二〇	一三、二四四	四四六、五〇四
	經由神戸稅	二、八三三	二、三八、二三二	一〇、六四八、三六二	一〇、六二九、九四四	一、三〇五	一二、二〇三	四一、四七九	八、〇五一、一七九	一三、六七三	四四六、〇一六三
計		二三二、四五六	二、六九二、三三五	九、二〇七	一、五〇八、四一八	一、一八六	一二一、六二四	三、三三五	一、一四七、五六九	五四九	一三、五八一
同三年	大阪卸	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	神戸卸	九、五七八	八二、九九四	六、〇四〇	一、三九〇、一八六	四四八	六、八八四	一、六八四	一、〇九二、三六一	六六六	八〇、六一六
	經由關手數	八二、九九四	一一、三三一、〇一六	五五、六八九	九、七五五、八七四	四四八	五八、一五五	三九、二三三	六、〇〇九、三九八	一三、一四〇	一、四六六、八六六
	經由神戸稅	九二、五七八	一三、四〇九、三八九	六一、七二九	一、一五六、七三九	四九七	六五、〇三九	四〇、九〇七	七、一〇一、七五九	一二、八〇六	一、五四七、四八三
計		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同四年	大阪卸	八、五三九	二、一二三、七五七	二、九七〇	三二、九二六	二一	二九、二七三	三四七	二〇一、一七一	五七四	二〇、一六三
	神戸卸	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	關手數	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	大阪稅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	關手數	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	神戸稅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

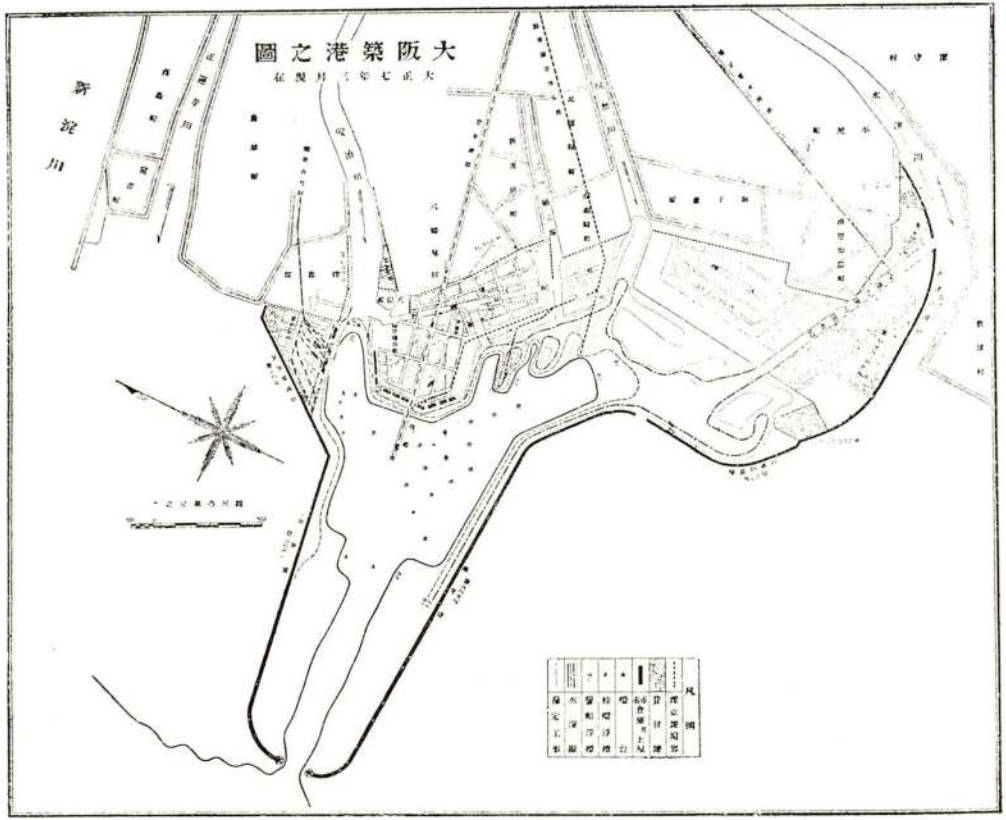
輸入之部 其五

年	經由	神戶稅關手數	計	大阪稅關手數	大阪稅	神戶經由	神戶稅關手數	大阪稅關手數	大阪稅
同五年	計	五五、五七四	一〇、二一九、七二六	六四、一一三	一二、四八三、四八三	五八、二〇四	三、三四〇、七三八	六六、七七六	二五、一四三、四一三
	神戶經由	七、二七三	一、四七九、七九九	二三四	二四五	一、七九二、七二五	二、〇一二、二四五	一〇、二四二	二、二九八、七三九
	大阪經由	一、四七九、七九九	二、〇一二、二四五	二四五	二、二九八、七三九	一、七〇二、三七三	二、一〇七三	二、一〇九	二、一〇九
	神戶	三三四	九〇、二八二	三、三四四	六九、五六六	八九八、八二七	一五、七二七	一六、三二一	二、六八三、九〇八
	大阪	九〇、二八二	二九、五五五	三、六九一	八七八、九〇三	一七、五三五	二四八	六八、一二四	二、六一五、〇一五
大正元年	神戶經由	三、三四四	三六	四五七	四五七	二四五	二四五	二四五	二四五
	大阪經由	六九、五六六	二六、一三五	八七八、九〇三	一七、五三五	一七、五三五	三、六二三、七九七	三、六八〇、九一一	三、六八〇、九一一
	神戶	二四八	七〇、二九二	六八、一二四	三、六二三、七九七	一四六、五〇三、三五〇	一四六、五〇三、三五〇	一四六、五〇三、三五〇	一四六、五〇三、三五〇
	大阪	二五、七八七、三一三	一九、六一〇、四八三	一九三、五一一	一九、三一〇、五三三	一九三、五一一	一九、三一〇、五三三	一九三、五一一	一九、三一〇、五三三
同二年	大阪卸	二三、三〇六	一、五六四、八三〇	五五、五五〇	一、四九一、九一三	二四〇	一五、九五八	一三四、〇九〇	三一、〇七九、五八七
	神戶經由卸	九、七一七	一、三四一、〇八一	一九、二〇一	二五五、八四七	二四〇	一五、九五八	一三四、〇九〇	三一、〇七九、五八七
	計	八三、五〇七	一〇、四九一、九六三	一三一、〇八三	五二、四七八	八、四〇四	二〇七、七〇二	七〇二、五八〇	七〇二、五八〇
	大阪卸	四七、六二二	三、〇三三、四九〇	五一、〇一五	一、五三〇、二九	八、六四四	二三三、六五九	八、九〇八	二三五、八〇九
同	大阪卸	四七、六二二	三、〇三三、四九〇	五一、〇一五	一、五三〇、二九	八、六四四	二三三、六五九	八、九〇八	二三五、八〇九

三年	大阪税関手数	神戸税関手数	神戸経由卸計	大阪税関手数	大阪卸計	同四年	大阪税関手数	神戸税関手数	神戸経由卸計	大阪税関手数	大阪卸計	同五年	大阪税関手数	神戸税関手数	神戸経由卸計	大阪税関手数	大阪卸計
	七、三九九	四二、九六二	九七、八八二	一、〇九八、六二九	一四〇、三〇四		六、五〇六	四三八、一一〇	八、三三五	一、三四、六〇五	一四〇、三〇四		九、〇七四	二四、九二〇	八二、一八〇	三、五六八、六〇〇	一四〇、三〇四
	―	―	一六、二六〇	一六、二六〇	一六、二六〇		―	―	三〇、三七〇	三〇、三七〇	三〇、三七〇		―	六	三〇、〇四〇	三〇、〇四〇	三〇、〇四〇
	―	―	一、一七〇、七三〇	一、一七〇、七三〇	一、一七〇、七三〇		―	―	一、三九七、四〇〇	一、三九七、四〇〇	一、三九七、四〇〇		―	二、九六五	四、八〇二、三三五	四、八〇二、三三五	四、八〇二、三三五
	―	―	八、〇六二	五九、〇七七	五九、〇七七		―	―	五、一八七	一四、七三三	一九、九三〇		―	―	一四、八九五	一四、八九五	一四、八九五
	―	―	七三五、〇〇一	二、二五五、一三〇	二、二五五、一三〇		―	―	一八〇、三〇八	四、六七四、九九〇	四、八五五、二九八		―	―	五、〇六八、三六五	五、〇六八、三六五	五、〇六八、三六五
	―	―	―	七、五三三	七、五三三		―	―	―	六、一一四	六、一一四		―	一、〇四八	六、六八一	七、七五九	七、七五九
	―	―	―	九一七、九二七	九一七、九二七		―	―	―	一、一六五、九二〇	一、一六五、九二〇		―	二六六、七九五	一、一八九、四六三	一、四七六、二五七	一、四七六、二五七
	二四〇、三〇四	五六、六六七	一四二、九六二	一、〇九八、六二九	一四〇、三〇四		二七五、一九二	四三六、〇五八	一四三、八六〇	二九、〇〇一、三〇三	一、〇三八、四三一		二六八、三五六	四四、五一一、五六七	五五八、四八五	一〇、〇三〇、四四〇	一九九、二七七、〇五五
	二四〇、三〇四	五六、六六七	一四二、九六二	一、〇九八、六二九	一四〇、三〇四		二七五、一九二	四三六、〇五八	一四三、八六〇	二九、〇〇一、三〇三	一、〇三八、四三一		二六八、三五六	四四、五一一、五六七	五五八、四八五	一〇、〇三〇、四四〇	一九九、二七七、〇五五

第六　灣港將來の進運

明治三十年本市が八箇年計劃を以て着手したる築港工事は、起工後物價勞銀の暴騰、財界の變動等に際會し、豫定工費に不足を生ずるに至りたるを以て、明治三十八年尙十箇年間即ち大正四年迄延期の許可を受け其工事を續行し、大正四年末に至りて既に豫定計劃の大部を竣成し餘す所は船渠の築造及埋立工事の一部のみとなりたるも、之等殘工事を尙繼續施行するとは市財政の到底容さゝるものあるにより、同年度を以て一先づ中止し、未成工事は大正十年度より着手して五箇年間に完成するとゝせり、然るに歐洲戰亂の影響を受け、近時本市商工業の急激なる發達と最近臨港鐵道敷設の決定及尻無川改修工事の本港に及ぼす影響とに顧み、港灣設備


大阪築港之圖
大正七年三月製圖
新淀川

の完成は一日も忽にすべからざるに至り、幸ひ市財政にも餘裕を生ずる見込あるを以て、大正十年度を待たず此際殘工事たる船渠の築造及一部の未成埋立工事を遂行し以て本邦有數の商港としての使命を全うせんとす。

今其計劃の大要を述べんに、本市の義務工事に屬する二船渠築造の既定方針に依れば、安治川尻無川間に於て北より始めて先づ第一第二の船渠を造り各其の兩側に繫船岸を設備するにありしも、今回該計劃を多少變更して第二船渠の實施を姑く見合せ從て第二突堤の築造を廢して代ふるに將來港内に於て最形勝の地點たるべき尻無川口の第三突堤を完成せんとすると共に曩に住友吉左衛門に工事施行を委託せる第一船渠北岸を除き同船渠の南岸及第三突堤の兩岸に繫船岸を施設し尚之に附帶する設備竝第一及第三突堤以外に於ては安治川及木津川沿岸に面積約三萬四千九百餘坪の埋立工事を施行せんとし、六箇年の繼續事業として目下許可禀請中に屬す

若し夫れ第二突堤外四突堤の埋立工事に至りては、繫船設備を施すに非ざれば全然利用の途なきを以て、其工事は之を他日に讓るとゝせり終りに築港將來の施設に關して述ぶべきは、正蓮寺川築港連絡工事なりとす、該工事は臨港土地株式會社外沿岸關係の地主より目下出願中のものに係り、正蓮寺川兩岸土地竝に其上流地域の利用を增進するの目的を以て同川を築港に連絡せしめ、以て船舶の出入を自由ならしめんとするに在りて、築港北突堤起點の西方一部を撤去すると共に新淀川道水堤尻に向て防波堤を築造し、内部を適當に浚渫し以て内港を北部に擴張せんとする計劃なり。該計劃にして實現されんか、獨り内港を擴張するに止まらず、正蓮寺川を港内に包擁し、安治川以北一帶の發展蓋顯著なるものあるべし。

更に正蓮寺川改修工事と相俟つて本市の企圖する所は、現在櫻島地先埋立地九萬坪の地先に十五萬の埋立地を得んとし、其内に水路並船溜を設備し岸接荷役の用に供せしむる計劃にして目下其筋に禀請中に屬す。

此地域は西成線の延長により、海陸の連絡極めて容易なるを以て、竣成の曉は忽ち港灣利用の途を進め得べく、南方船渠の計劃と共に、大阪港の眞價を高むるに至るべし。（完）



覺めたる聲

（下）

大阪市役所
港灣部長
直木倫太郎

（五）常識の修養

さあれ時勢は間斷なく動きつゝある、機運は着々として進みつゝある。然り、我等の知らざる暇に、我等の豫期せざる裡に。

曩日我等は畏敬する我先輩門野氏から「技術者の敎育」と題する一篇の意見書を寄せられた就て見れば之ぞ氏が該博の見聞に徵し我技術家の修養に對する限りなき遺憾と要求とを切實に指摘し說盡されたるものである。即ち讀み行くまゝに我等はまづ先覺の意氣が海の內外となく期せずして既に相呼應せるの深きに打たれざるを得ぬ。請ふ姑く氏が覺めたる聲の內容を聞け。

氏は述べて曰く「工科の學生にして學窓を出で實世間に入るに際しては、其專攻學科以外の學識を一層蘊蓄するを肝要とす。普通敎育は現に其殆どは中學のみにして、高等學校に入るや既に概括的ながらも三專門に岐れ、所謂普通敎育と、コンモンセンスの養成に與ふるの敎課時間甚だ尠く、爲に遂に專門に偏して其他に及ばす、これ其卒業生の人事浮世に接して最も遺憾に感ずる点にして、又其人の爲に惜む所以なり乃ち今の敎職に在るもの亦心して學生を指導すべきは勿論、學生としても專門の學習と共に所謂普通敎育と、コンモンセンスの發達とに注意を怠らざらんことを切望せざるを得ず」と。

恰もこれ彼のスエーン敎授をして我等技術家

に人間學修養の必要を絶叫せしめたると同一病根を指摘するものに非ずして何ぞ。

門野氏は更に曰く「予輩は頭腦の練習としてマテリアル、サイエンス教育の最上なるものたるを確信する一人にして、部門の如何を問はず職業の如何に關せず、教育の基礎をマテリアルサイエンスに置くを欲するものなり、數の觀念なき時は如何なる現象を說明し斷定を得るにも粗雜に流るゝの弊あり。技術者は已に數の觀念を有す、これに所謂高等普通教育と、コンモンセンスを兼ね備ふる時は即ち恰も雙手に利刀を握るが如く、其專攻の技術は云ふまでもなく、他の如何なる方面に於ても先導役となり支配役となり得べし。一好適例として三井鑛山會社の首腦たる先輩、團、山田兩氏の如きは技術教育を基として本邦に於ける第一位の鑛業の支配役として何人の後にも立たず。斯かる類例尙乏しからざるなり」と。

如何にも我等は斯かる愉快なる先例の多數を有することを誇ると同時に、又如何にすれば我等後輩も等しく其後へに追躡し能ふべきかに焦慮しつゝあるものである。而して茲に我羨むべき先輩の一人たる門野氏よりして、其秘訣が結局常識修養の一途に外ならざる所以を明快に指摘されたるを見る。豈能く猛然として自省せざるを得むや。

氏は又曰く「回顧すれば二三十年前、制度今日の如くに整然たらざりしが、一般に混雜的なからも面白き教育の逕路を踏んで、廣き意味に於ての學習を爲し得たるが如し。何人にも簿記を課し、天文學を教へ、相當の智識ありたり。明治十七年頃の東洋學藝雜誌は理科學生のみならず、法律學生にも愛讀せられ、天文學會の演說會には文科の學生も列席したり。學生一般の趣味如何にも廣かりしを覺ゆ。然かも今や制度整然として却て學生の趣味多方面ならざるを見寧ろ今昔の感に堪へず、將來學制の改善に際し明治十年乃至二十年頃の札幌學校、慶應義塾、若くは東京大學三學部の如きものを、變化し進歩したる今日にも實現く能はざるかを想起せず

んば非ず」と。

彼の時代に於て我凡ての專門に幾多の人材の鬱然として輩出したりしことは我等又能くこれを聞知し將た景仰す。然かも其時代の敎育方法としては敢て特異のものなく單に所謂人間學の修養方法に於て今日と大に其趣を異にせるものありしを思へ。專門の末技末節にのみ拘泥して動きの取れざる窮極にまで我等を押付け去らんとする今の敎育方法の面白からざることは現に歷然として今の我等が自分自身を以て明に證明しつゝはあらぬか。

（六）曉鐘は鳴れり

見よ、我等が技術の一点張りに終始するを以て滿足したりし時代、單に設計と構造との末技に執着して自ら賢こしとしたりし時代、折角その創意と苦心と努力とによつて纏め上げたる立案企畫の全体を擧げてこれを他人の運用操縱に委し、自分は寧ろ何時までも其指揮の下に犬馬の勞を執るべきものとのみ思ひ諦らめ來つた時代は既に其根底からして動き始めたるではないか。

海外では近來大會社の社長若くは重役として技術家の眞價が目立つて認められ來つた、獨逸の如きは尙更以てさうだと云ふ。成程我國とても亦近頃多少は左樣な氣振りも見ぬではないが未だ〳〵餘所の世界とは比較にもならざる程度のものである、否技術家自身に果して左樣の活動を待ち構ゆるだけの用意があるかも疑問である。近く米國の或技術雜誌にも、去る會社の技師が突如として米國有數の大會社の社長に擧げられたるを記して、さて曰くには「其然る所以のものは一に該技術家の經濟的手腕の卓越したが爲めであつた、腕ある技術が自由に羽を延し得る時が遂に來つた、が唯殘念ながら一般の技術家には未だ組織的技倆、財政的技倆、財政的才能の不十分なるものが多い。從つて事業の遂行に必要なる概括的綜合的の理解力と判斷力とに乏しきことを遺憾とせねばならぬ」と。即ちそを救ふの道は遂に彼のコンモン、センスの修養を促すより外なしとの結論には誰もが到達

せざるを得まい。

聞くが如くんば、頃者米國マサチユセツツ州のインスチチユート、オブ、テクノロジーの卒業學生團は委員を設けて。技術家には科學と技術の基礎的敎育以外、別に事業の經營方法、經濟並に法制の講義を必要とする旨を決議したりと云ふ。其決議の內容によれば、學年には一年を加へて四ケ年とし、經濟、經濟史、經濟地理會計法、統計學、商工業組織、商法、財政學、銀行論、保險法、運輸交通制策、外國貿易論、工業心理學、並に事業の立案報告の一般を學習せしむる而已ならず、尙人格修養上の訓化の爲めに從來に比して六割の時間を英文學に增加すべしと云ふのである。

尙詳しく云へば、在學中の總体の授業時間に於て五割九分を科學と技術とに、二割五分を法制經濟に、一割六分を英文學文明史、及び外國語に充當すべしと爲すのである。但し法制經濟は第四學年に至つて課せらるべき筈である。

技術家の覺醒と及びこれに伴ふ必然の用意とは既に此の如くにして誰にも明瞭なるではないか、そして太平洋の彼岸では早くも其曉鐘を打鳴らし初めたるではないか。我等技術家の眞に救はる可き道、否寧ろ其邁往躍進し得べき道は斯くて歷々指呼し能ふ可きでは無い乎。

（七）リーダーシップ

近くは去る二月、米國電氣學會の席上に於て例のスエーン敎授が試みたる講演は、愈々以て氏が熱烈なる主張を說盡して餘さず、然かも其論旨に至つては益々以て我門野氏の期待に裏書すべきものである、即ち我等は飽迄覺めたる聲の紹介に徹底すべく左に少しく其講演の眼目を寫すを禁ぜぬ。

曰く「技術てふ專門は到底其全價を正當に他に認めしめ得難きものである、從て技術家は所詮公共的生涯に於て其任務に適當なる評價を贏ち能ふべきものではないと、誰もが斯う思つて居る。現に技術自身が斯う思ひ來つて居る、我等自身も亦隨分我過去に於て幾度か左樣に感じ又幾度か左樣な言を吐いた。無論今でも尙左樣

思つて居る。が併し、今夕は最早重ねてそれを繰返へすには當らぬ。否それとして若し左樣な事態が果して事實であるとした時に、其原因は畢竟何れの處に存するであらうか、これを改めしむべき所以の途は結局如何の点にあるであらうか、茲には寧ろそれを主として說いて見たい。

「無論純然たる專門的仕事師として、技術家なるものは何時でも必要である、技術上の仕事があれば是非共それを呼迎へねばならぬ。從つて其報酬として受取る金額も他の專門的職業に比べて格別劣つては居らぬ。或は若し技術家に拂はるゝ尊敬の度合が萬一其報酬によつて忖度せらるゝものだとすれば過去の技術家に比して我等は一層よりよき位置に押上げられたものだとも云へる」と。

先づ斯く皮肉に技術家の立場を揶揄し來つた末に、偖云ふらくは。

「併しながら我等技術家の社會から受取る眞の報酬が果して金錢ではないとすれば、我等は只專門の爲めに盡す自己衷心の滿足と幸福とによつてのみ退いて自己の技術家たり得し興味を感ずれば足るか。然らざれば進むで社會的大問題の解決を率ゐる原動力、施行者若くは行政者として、即ち社會の先導（リーダー）としての我等を見出すべく、これに應はして尊敬を飽迄進むで社會の前に認め得せしむべきか。稽ふべきものはそれである。

「然かも見よ今日多數の社會的事件にして其何れが技術的要素を帶びざるものである、吾人の生活せる時代は畢竟應用科學の時代ではないか、政治も法律も實業も畢竟は之等大事業の解決に向つて必要なるのではないか。然かも其間其應用科學の專門家たる我等が遙に法律家や實業家の後ろに萎縮し辟易して、甘じて其指導を受け其使役に任ずる理由は何處にある。無論技術家だからとて必ずしも法律家や實業家を指導し使役し能ふ特權は無いが、我等とても亦決して常に他の指顧の下に退嬰して強いて消極的滿足を自己に甘んずるにも當らぬではないか。

「凡そ一世の嚮導者たるに適する資格は、智

識と人格との二つである。即ち法律家なり實業家なりにして智識あり人格あらば自ら能く率先して技術家を指揮することが出來る、と同時に技術家とても亦自己に相應の修養と人格とさへあらば、敢て能く自ら進んで他を制御し號令し能ふべきではないか。

「されば若し技術家にして遺憾ながらも多く時代の指導者たり能はぬとすれば、それは只畢竟渠に修養と人格との足らざるものあるが故ではないか。それは決して不思議でも無ければ不公平でもない。而して茲に予の修養と云ひ人格と云ふは、即ち其人の品性態度、眼識、才能、精神的修養並に人に長たるの手腕を指すのである。

「無論確と斷言すべきことではないが、予は屢々高等學校の卒業生に向つて、其同級生の選べる方針を質して、何時も其級の最優者が法科若くは實業方面に趨きつゝあることを聞いた。何故渠等が工科へは來ないだらう、何故技術の方面へ向はしめ得ないだらう、其處に技術家として我等の考ふべく爲すべき事柄が存せぬだらうか。

「技術家に、技術の專門に。果して我等をして社會の指導者たらしむるに適する修養が滿足せしめられつゝあるか何うか。其處に自づと此問題が落ちねばならぬ。修養によつて啓發さるべき資格としては理解力がある、活眼がある、判斷力がある、人を率ゐる才能がある。而して技術家には一般に眞理に對する熱望があり理解力があり判斷力があると誰もが云ふが、併しそれとて他の凡ての專門に比して何れ程優れてとは何う云ひ切れやう。況や其眼識の點は如何に。技術教育が法律家又は實業家の修養よりも優れて大きく、廣く、深く事件の全相を達觀打算し能ふ所以のものだと云ひ得るだらうか。今日に於ても、又は其過去に於ても。

「學校に在つても、學校を出てからも、我等は只餘りに多くの煩瑣な零細な技術的細故に拘泥して、一般社會に關する廣汎なる問題は却てこれを理解し研究するに馴れず又は研究の興味を

すらも持たざる嫌がなからうか。學校に在る間の樣子をば予も熟知して居る。學生の誰もは只純技術の細故をのみ興がつて居る。そしてその注意を他のより廣き方面に振向けしむるが如きは頗る以て困難である。

「技術家が他の社會から適當に認められないとの不平を訴ふる代りに、予は寧ろそれには理由があると云ひたい。即ち今に於て是非技術家たる我等が御互に其理由を探討し究盡して大いに之を釐革せねばならぬ。我技術敎育の本体が如何に現代的文明に進歩に價値あり力あるかを表現し宣傳してこれに汎ねく學生の注意を振向はしめねばならぬ、來るべき時代の有爲の青年をして技術的方面に其凡ての頭腦を振向けしめねばならぬ。而してこれが爲には先づ第一に我等は今日の技術的の方針に干與して一層廣大なる人格的修養を目的とし、總ゆる基本的學課に一倍の注意を拂ふて、寧ろ技術的細故の注入に關する時間を省かねばならぬ。恐らく斯かる細故の智識はこれを學窓に於てするよりも寧ろよりよく將たより十分に實地に臨んで自得さるべきではあるまいか。

「寧ろ我等をして語學の修練に力を得せしめよ。我等技術家して辯論は更なり文章に於ても能く常に其云はんと欲する凡てを盡さしむるを得よ。我と接觸する凡ての人達をして啻に我專門を尊重せしむるのみならず、又能く如何の大問題に向つてよく適當にこれを主張し將た處理し能ふ所以の技倆に推服せしめむ。

「數學に就ては、予は多くの人と共に、技術が主として數學上の問題を取扱ふ所以のものたるを思ふ、然かも同時に又それが技術家が一般社會の理解する處とならざる不幸の主因たることをも思ふ。七面倒なる數學的手數を盡さねば何等解決すべくもあらぬ問題をのみ相手に日夜兀兀たることほど我等の見解を狹小ならしむるものがあらうか。我等が實社會に出逢ふ大問題は殆ど數學的ではない、縱し結局は數學的根抵の上に立つとしても、其データーは常に限りなく移動し變化し同時に複雜なる人的關係の加味

せざるはない。數學のみを以て問題を解くに馴らされ、又は何時も其方角に向つてゞなくては解決の途を知らざる頭腦を以てしては、如何に人世の實際問題に於て其迂濶を蔽ふを得やう。

「此故に予は是非共我技術の學生が法律、歷史課學、心理學其他の人生と交涉廣きあらゆる學文を研究して、今日の我等よりも大に其見地を開拓せんことを望まねばならぬ。將來の技術家をして社會の先導たるに適せしむる箇人的資格を充實ならしめて以て憐むべき我現實の技術界を正しく築き直さねばならぬ。之等の資格の彼等に具備するによつて、社會のリーダーシップは期せずして我等に屬することを予は確言せんと欲するのである」と。

(八) 人として覺めよ

請ふ爾が志氣を壯にせよ、爾が見地を高うせよ、爾の眉を揚げよ。胸を張れよ、踏み力を強うせよ。茲に我等が主張する凡てのものはそれである。

個人としての自覺、團体としての自覺、そして我宏大なる斯界全般の自覺、それが我等の要望する最初の者であつて同時に最後の者である。

今の技術界は其凡てに囚はれ過ぎて居る。其敎育に於て思想に於て、行動に於て。其生活にも地位にも、境遇にも、其各人にも、學會にも、團体にも、唯あり來りの一種の型を守り一味の空氣を呼吸するのみを以て安んじて居る。其一切の囚はれを打開して新たな自由な廣々とした天地に躍出す處にこそ始めて我等が技術家として眞に覺め且つ活きるのではないか。「我は技術家なり」との一句に始めて無限の權威と興味とを感じ能ふのではないか。斯界最近の思潮が海の內外となく既に澎湃として其處にある、我等が云はんと欲する凡てのものも亦實に其處にある。

記せよ「技術家」なる階級は今の社會に於て最も若い階級である。其正當なる社會上の立場は今日までにはまだ決して認められゝに至つて居ない。これからである〳〵、我等が自家の眞面目眞骨頭を發揮するのは實にこれからである。即其處に先づ退いて自己の新たなる天職と及びそ

れに對する修養と志氣と抱負との如何を檢せねばならぬ我前後左右を見廻はして悉く其安價な苟且な滿足から斯界を呼び活けなければならぬ

我等の斯界に要求する凡てのものは唯自覺である。自覺して而して何うすると、斯く問ふ者あらば、我等は只自覺したる頭と眼と力とを以て各自其好むが儘の道を雄々しく踏占めて進めと答へる。何も殊更に事業に就け、經濟を說け、又社會問題を解けよとは云はぬ。無論技術的に鍛はれたる堅實周到の頭腦を根據として、實業方面に、公共的方面に、將た社會的方面に、大なる技術を爭ひ能ふならば、それは確かに格段なる新彩を發揮し得べき所以であるが、然かも我等の行くべき道は固より千差萬別である、自己の天職は自己のみ知る。況や人には銘々の性格があり、嗜好があり、立場があり、境遇がある。即ち各自がその信じて是なりとする所のものに向つて不斷に醒めたる眼を見開けばよいのであつて之を强ゐて何の道へと限り、何の方角へと指さす程に我技術は窮屈なる學問ではない。然かもそれを是非共斯くあるべきもの、斯く行くべきもの、斯く注意し斯く滿足すべき者とのみ極めて無雜作に思ひ諦らめしめ來つた所に却て今日迄の我技術界の總ゆる窮屈な、卑怯な、無自覺無反省の態度が憫笑されねばならぬではないか。

技能の練達を期するもよい、學理の精到を圖るもよい、事業の運用もよい、發明の工風もよい、新針路の開拓も、新職業の創造も亦固よりよい。無論其あらゆる方面に於て自己の力作勞營の過程を具さに味徹し嘗盡する所にこそ、眞に生き甲斐ある生活の興味を感受するのであるが然かも其凡ての勞作に自發あり機軸あり創造あらしむるが爲めには、返すがへすも其處に覺めたる意氣と識見との備はるを求めねばならぬ。

覺めよ〳〵、世は既に春なり、日は疾く昇れり打連れて爾の蝸廬を捨てよ爾の門扉を撤せよ而して急速に爾を捨てゝ走らんとする今の世の中を見よ。さらずば則ち爾の小螺殼をして、より深く其不運なる游泥の中に、より强く他の脚下に蹂躙し滅却せしめ果つるより外があらうか。(了)



本邦森林と建築用材に就いて（五）

會員　谷民藏

◆北海道森林經營の一班

△地理概要
△林制の沿革
△木林概要
△森林統計概要
△主要木材の産地と材質及効用

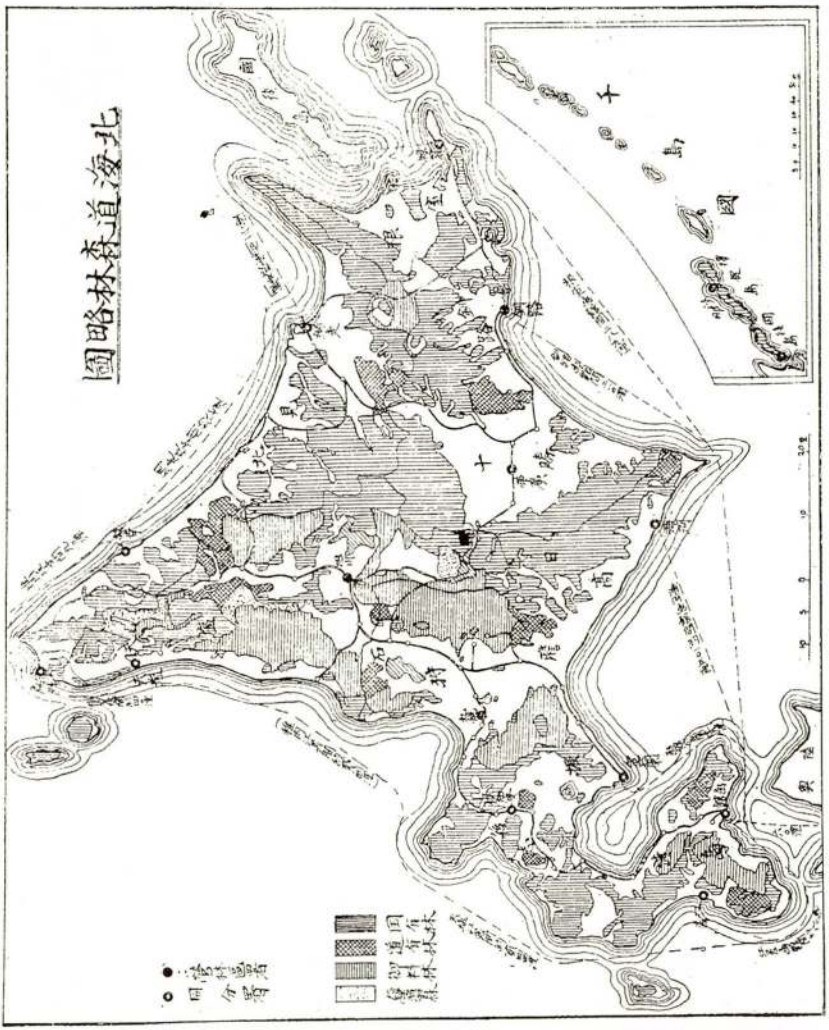
筆者は夏三伏の候に於て樺太寒圏帶の森林に就いて其一班を述べて置いたが、本號に於ては殘暑尚猛烈の砌なれば、北海の林況に就いて禿筆を驅り、秋高く馬肥ゆるの候を利して本會森林の五大林の詳述せんと考へて居る。

◆北海道森林經營の一班

△地理概要

北海道は赤鱒（アカエヒ）の如く、樺太島は鮭の如く、臺灣島は鰈（カレヒ）の如くであるとは、吾人が夙に小學時代から其名と倶に其形態を聯想するのであるが扨て之れ等の島嶼が、夫々に我國樹木の主要資源たる一大森林を抱擁してゐる事實は、更らに忘れてはならぬことである。茲に本道森林の概況を一言することゝ敢て贅言にはあらざるべき歟抑も北海道は本島及數多の島嶼から成り立つて居る。西は渡島國大島西端（東經百三十度二十分）から起り、東は千島占守島東端（東經百五十度三十五分）に終る。南は渡島國小島南端（北緯四十一度二十一分）に始まり、北は千島國「アライト」島北端（北緯五十度五十七分）に到る。

本島は東經百三十九度四十五分に起り、同百



四十五度五十分に終る、北緯四十一度二十四分より、同四十五度三十一分の間に位す。東は根室海峡を隔てゝ國後島と相望み、其間僅かに十海里、南は津輕海峡を隔てゝ陸奥國と相對し其近巨離僅かに十海里、北は宗谷海峡を以て樺太島と劃し相距るゝこと二十四海里

北海道の林況（其一）



伐木の狀況



玉切り及樹皮剝取狀況



伐出藪材の狀況



木材搬出〔馬〕の狀況



木材流し堰の狀況



流管の狀況

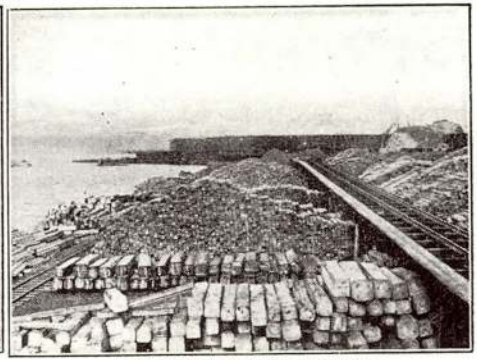
北海道の林況（其二）



柚小屋内部の狀況



柚小屋の狀況



室闌棧橋附近木材集積狀況



人工推葬發生の狀況



物資運搬の狀況



網場の狀況

程ある。其面積九百五十七萬二千二百七十六町歩、西は日本海に臨み、北は「オコック」海に面し、東南二方太平洋に瀕することは茲に述ふる迄もない。

千島は別に一列の群島を成し、太平洋と「オコック」海との間に位し、本島の東方から北東に連り大小數十、點々散布して占守島に至り、露領東察加と相對す其間僅かに七海里に過ぎない。列島の地積約百六十萬七千町歩を算す。其内大なる島嶼は色丹、國後、擇捉、得撫、新知斜子占丹、幌莚、占守の八島である。

明治二年八月始めて本道を國郡に分ち、現今十一ケ國三區八十七郡に區劃されてゐるが、總面積は丁度九州四國及臺灣を合せたるものより稍大である。

◈林制の沿革

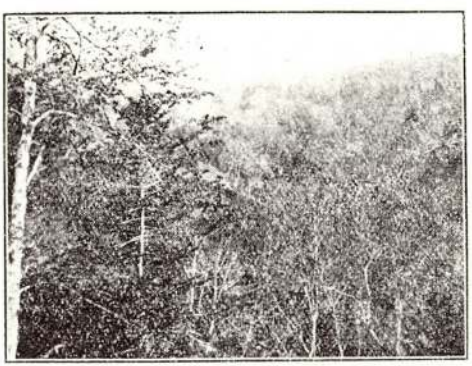
△松前藩時代

松前藩に於ては夙に推茸役、丸太役及造船役に關する稅目があつた、延寶六年（二百三十餘年前）始めて江差の檜山（「アスナロ」を俗に「ヒノキ」と稱するより檜山と云ふ）を開き山師より運上金を徵して「アスナロ」を伐採せしめ、檜山奉行を置きて之を管理して居た。其の檜山は今の檜山郡厚澤部川流域より天の川流域に至る間にして、上の國、國名、戸渡川、古櫃、豐部内、田澤、厚澤部、羽板内の七箇所を留山となし普通人民の伐採を許さず、山師の出願に對し伐採石數伐採期限及運上金を定めて之れを許可して居つた。而して檜山七箇所の外に散在する「アスナロ」は時期を限らず山師の出願に依り運上金を徵し之が採伐を許可した。之を陪山といふ今試に檜山に關する法令の二三を掲けて見ると左の如くである。

定（此札は江差に建つ）

一、林木川流の時分の「ノリ木」並ヤライ引申間敷夏冬ともに川荒申間敷事。
一、山中にて何によらず賣買仕間敷事。
一、木材ぬすみ申者有之は過料金可付申事
一、留山の木伐申間敷事。

一、番所に無斷檜皮ハギ申間敷事。
右之旨於相背は急度可申付もの也
延寶七年二月七日
定（此札は江差濱に建つ）
一、木卷場には家作り申間敷事。
一、木積場邊に火「ムザ」と焼申間敷事。
一、山師は無斷山子と相對にて諸材木致賣買申間敷事。
右之旨於相背は急度可申付もの也
延寶六年二月七日
以上の外檜山近邊にて船道具を伐取るべからざる事、松雜木共用木等なるべきものを無斷にて伐るへからざる事等を令せらる。
此の檜山は一時盛んに伐採し、之より收入する諸稅は藩の一財源であつたが、元祿八年山火の爲め檜山過半燒亡して爾後其產出を減少してゐる。
松前藩に於ては檜山の外山師の出願により時々蝦夷地に於て「トドマツ」「エゾマツ」の伐採を許可して居た、其の伐採した地は厚岸、尻別（後志國磯谷郡）石狩山等にして享保以降に係るものゝ如し、又知內山（渡島國、上磯郡）にて山師に「アスナロ」及雜木の伐採を許可したことがある。皆運上金を徵したのである。和人居住地に於ては其の始め檜山の外は隨意に伐木を許し享保年間に至りて出願を爲さしむる事となりたるものゝ如し、薪は出願せずして隨意に伐採せしめ十分一の稅を課してゐる、然かも取締り行屆かざるを以て函館松前地方海岸附近の山林は悉く荒廢してしまつた。

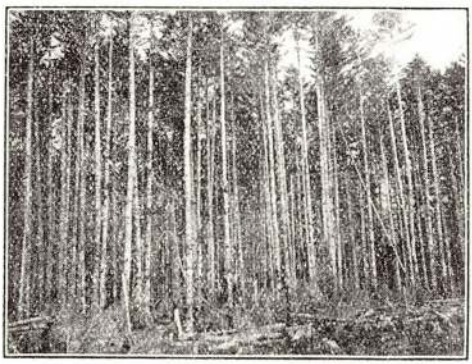


北見國路邊境界混淆針闊葉樹林の偉觀

△幕府直轄時代

幕府か寬政十一年知內以東東蝦夷地を直轄す

るや、出張の有司は、函館地方山林の荒廢を見て之を憂ひ享和元年其濫伐を禁し、又遊樂部川上（膽振國山越郡）より材木を伐採し函館に回漕して之を使用し、函館に於ける官船の製造には東部の「ゴエウマツ」を使用した。文化年間に至り民間に於ける辨財船以上の船舶製造は函館近山を除き六箇場所小安、戸井、尾札部、尻岸内、茅部、野田追の内林相檢分の上之を許可し規定の合船役の外百石に付「マツ」「スギ」「トドマツ」「ハリギリ」の類苗木百本つゝを函館山に栽植せしめ、其の代錢を以て納めんとするものに



鐵路國有林トドマツ天然林

は苗木一本に付二十文を出さしむ、此の植樹は文政以後は唯代錢を徵收するのみにして植付は之を實行しなかつた樣である。幕府は又函館近郷に苗圃を設け杉、漆等の苗木を仕立て之を栽植し且人民に諭して樹木の栽植及保護を爲さしめた。文化年間（文化元年と云ひ或は文化五年と云ふ）七重村（龜田郡七飯村の内）の民、卯之助なるもの函館山及七重に「スギ」數萬本「マツ」其他若干本を植ゑたが、其の樹の一部は殘存して今日に到り美林を成してゐる。安政二年幕府の再び本道を直轄するや、函館谷地頭に「スギ」「マツ」等の苗木を植ゑ、御用畑と名づけた。同五年七重村に藥園を開き、各種の樹苗を仕立て、又奥羽地方より「スギ」其の他の苗木を購入し、民間に配付して之を栽植せしめた、尋て函館近村の山間所々に苗木仕立所を設け、東西蝦夷地移植の法を定め、又松、杉、櫻、楓、の四種は各村の路傍に漆、桑、楮、の三種は田畑の畔竝に家屋の周圍等に栽植せしめた。當時福山

江差、地方を領せる松前藩に於ても藩の事業として福山附近數ケ所に杉を栽植し且領内の人民に植樹を勸奬したのである。

又安政六年蝦夷地に領土を賜りたる南部、仙臺等の諸藩も其の陣屋附近に樹植するものあり、當時人民の林業思想は極めて幼稚にして植樹を以て迂遠の業なりとなし進て植栽を爲すもの多からず、縱令、植栽するも其の保護に注意せず然かも當時官民の植付たる小森林は其の生育佳良にして開拓使時代に至りては往々美林を成し、遂に一般の模範となるに至つて居る。

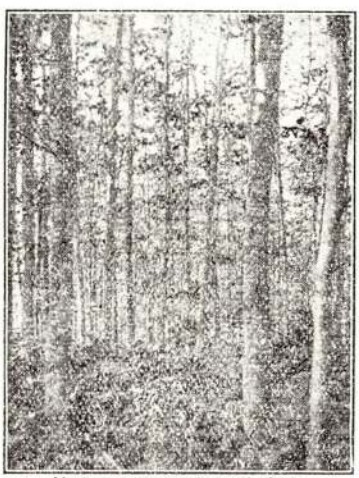
△開拓使及三縣一局時代

開拓使札幌本廳に於ては明治三年九月木材稅則を定め、四年正月「イチヰ」「ハリギリ」「エンジユ」「サクラ」「カツラ」「トドマツ」「クハ」七種の伐採を禁し、同年二月火藥用の「ハコヤナギ」伐採を禁してゐる。七年一月伐採規則を定め、八年の八月石狩川其他の大川兩岸一里以內の材木を禁ず十年二月「トドマツ」「カラマツ」「ゴエウマツ」「エゾマツ」「イチヰ」「カツラ」「ホヽノキ」「クルミ」「ハリギリ」「クリ」「エンジユ」「イタヤカヘデ」「イシナラ」「ヤマザクラ」「ヤマクハ」「ヤチダモ」十六種は家屋船車等の必要材たるを以て伐採を禁じ、十一年十月部分木仕付條例森林監護假條例竝に山林原野調査假條例を定め、十二月山林監守人規則を定めてゐる。十三年山林事務管理の爲め各郡に地理課山林係派出所を置く、其の他本支廳に於て林務に關し規定する所少なくない。明治十五年二月廢使置縣と共に山林事務を悉く農商務省の主管に移せしか、更に三縣に委託せられ、開拓使施行の規則により處分せしめらる、同年札幌縣山林派出所所轄區域を廢して更に林區竝に事務所名稱所轄區域を定め、又官林區域假心得を定め、官林と開墾地との境界を定む、山野の放火は開拓使以來屢々諭達を發して之を禁じてゐるけれども尙ほ屢々行はれて完全の取締をなすことが出來なかつた。

樹苗の養成は明治四年七重開墾場（後試驗場と改む）及札幌に諸樹の苗木を栽植せしを始めとし、後札幌に於ては札幌試驗場（後育種場と改む）に於て苗木を養成し十三年更に札幌圓山の育種園を設けてゐる。函館支廳管内に於ては十二年函館區谷地頭及松前郡福山町に種藝場を設け、十三年更に爾志郡乙部村壽都郡湯別村に種藝場に設け、七重試驗場と共に苗木を育てゝ之を官林に移植し或は民間に拂下げて居た。

△北海道廳時代

明治十九年二月廢縣置廳となり、三月農商務省に屬せし山林事務を擧げて道廳の主管に移された、而して其事務を姑く三縣の舊に依り聊か之に改正を加へしのみ、廿一年三月道廳第二部に林務課を置き全道八箇所に林務課員派出所を設く、後增減あり同年五月官林物公賣規則官林雜產物特賣規則竝に官林產物公賣規則を發布し、三縣區々の制を一定す、其の後又同規則の改正あり、是歲官林境界調查に着手して居る、二十三年官二百萬町歩を割き帝室林に編入す、二十四年林務課を廢し、森林事務を地理課に屬す、二十五年一月森林事務を郡區長に分任し、同時に本廳に林務課を置く、是歲官林境界調查事業を復興す二十七年帝室林二百萬町歩の内六十餘萬町歩を除きて其の他を官林に返還せらる、二十八年保安林調查に着手して二十九年所伐案調查手續を發布し、所伐豫算案を編成し、保續收入を圖り保安林以外の森林に對する施業案を編成して伐採面積材採材積を定め擇伐作業法に依りて所伐し、天然下種により更新することゝ定めた。今の假施業案が是である。三十年森林監守を置き全道五十三ケ



渡島水澤山毛欅人工造林

所に駐在所を置き監守を配置し郡區長（同年十一月官制改革によりて支廳長）監督の下に森林監護に從事せしむ、三十二年官林種別調査規程及同細則を定め、之が調査に著手す、其の林種別は四種に分つ第一種林を將來國有林として經營すべきもの、第二種林は將來公有林として經營すべきもの、第三種林は將來私有林として經營すべきもの、第四種林は將來農耕牧畜適地として解除すべきものである同年十月東京帝國大學に石狩國空知郡に於て二萬三千餘町歩三十四年三月東北帝國大學に石狩國西龍郡に於て三百町歩、三十五年一月天鹽國中川郡に於て二萬餘町歩を何れも大學演習林として讓與した、三十五年十一月林務課派出所を三十箇所に保護區駐在所を九十八箇所に置き、支廳長に分任せし森林事務を解く、三十六年林務課派出所を減して十五箇所とし他を分所となし林務の中賣、貸處分は支廳長に委任し、林務課派出所は森林監護及森林調査に關する事項を掌る、三十七年一月東北帝國大學に膽振國勇拂郡に於て二千餘町歩を大學演習林として讓與して居る、三十八年國有林の內十八萬八千七百三十七町歩を割きて北海道地方費有模範林を設定し、四十年北海道森林整理の大綱を立て第二十四帝國議會に於て其の豫算通過し四十一年六月より其の實行に着手し、道廳官制の一部を改正し、林務に關する支廳長の委任條件を解き、從來の林務派出所同分所を廢し五箇所の營林區署、十六箇所の營林區署を置き、其の管轄區域を百二十五の保護區に分ち、森林監守を配置す同年野幌林業試驗場を置く、四十二年北海道國有林野賣拂規則、同手續、北海道國有林野產物賣拂規則、同手續及樹苗下附規程、同取扱手續を定む、四十三年北海道國有林事業豫定案規則を定む、大正二年一月東京帝國大學に石狩國空知郡に於て四百餘町歩同年六月東北帝國大學に天鹽國天鹽郡に於て二萬二千餘町歩を大學演習林として讓與し、大正二年六月五箇所の營林區署を四箇所に十六箇所の營

林區分署を十二箇所に改廢し、其の管轄區域を變更した、大正三年六月材積計算單位を改正し、從來の尺締を石に七十立方尺、一棚を百立方尺とした。

◆木材概況

本島の森林が如何に廣汎で且如何に豐富なることも各地市場に集々する材積を見て自ら首肯せしむるものがある。然しながら該樹木も又決して無盡藏ではない、近時該地方山林に斧鉞の入ること更に驚嘆するものがある、觀よ、現今該地木材需給の範圍益擴大しつゝあるを今其二三を列記して見ると、土木建築工事以外に先づ製紙原料としての「パルプ」製板箱、茶箱、木管、燐寸、セメント樽等であるが之れ等の需要激增して昨今の伐木數量のさながら大蛇の蛙を呑の概ありとは、決して過言でない。然れども本島の樹木も之れ決して今後永く樂觀するを許さない蓋し吾人の知れるが如く木材の繁茂生長には相當の時日を要するものである、薪炭用雜木に於てこそ十年或は二十ケ年を一期として輪伐更新するも建築其他の用材には早くも六十年永きは百五十の齡級期を待たなければならない、予は先般農商務省に某博士を訪ひ、北海道木材の概況を問ふた際に大略左の如く述懷せられた、北海道は人も知る所謂森林國で而も其地積尨大にして全道面積の實に五割八分強即ち御料林に六十五萬餘町歩國有林に三百六十萬町歩其他に百十七萬町歩を算し、其大部分は今尚ほ鬱蒼たる實に千古不伐の森林を爲し「アイヌ」一種屬の外、人跡未到の深山多く人爲の及ばざる永久林其地積のみにても四百二十餘萬町、材積は千七百餘萬石の年伐材積を有する見込であると、其林木にて殊更著名なる有用樹種は椴松、蝦夷松、檜、栓等、就中檜材は聲價高く伐木は冬期雪中或は春季雪解を利用し運材を爲すべきものである。

又蝦夷松、椴松、落葉松、獨逸唐檜等を植ゑば内地の杉、檜以上に成長し更に白楊の如き

は二十餘年にて工業用材となりて頗る有益なるものがある云々。

尙ほ樹木の主産地は天鹽、北見日高の各地方より伐出し搬出港としては先づ小樽、釧路、室蘭の三港を其主なる輸出と港して各方面へ輸出する。今其輸出材として近時歐洲、米國濠洲方面へ檜材の如きは年産額三十餘萬石に上る、實に支那方面に鐵道枕木或は松材、雜木等を輸出し、我内地向には松其他檜材の製材を爲し其年産額は百餘萬石に達すといふ、三井物産會社の如きは明治三十五年石狩國空知郡砂川及び北見國常呂郡野は牛町に一大工場を企畫し、建築材料、鐵道枕木等の製材を主業なりしも明治三十七八年の頃より工場の大擴張を爲し、檜材の販路は歐米に之れを拓き米國濠洲に輸出するものゝみにても既に三十餘萬石に及ぶべしと云ふ。尙ほ此外神戸鈴木商店、名古屋淺野ベニヤー工場等箇人的經營に成るもの尠なからざる有樣である。



木材搬出(人力)の狀況

◆森林統計概要

（大正四年度調）

1. **森林面積**

森林の總面積　五百四十二萬九百九十三町歩

2. **森林伐採及收入**

總伐採額　針葉樹　四百五十八萬四千五百三十二石
　　濶葉樹　八百六萬千六百九十二石

林産總額　一千百四十三万七千二百六十圓

木炭産額　三千四十二万九千五百四貫

3. **雜**

林産物道外輸移出　三百五十二萬四千百八十二石
　　十八萬八千三百三十八挺

八萬八千三百二十二棚

河川流材石數　三百十五萬三千七百四十八石

二千九百五十七棚

工場消費木材　三百七十五萬五千二百六十三石

尙ほ參考に迄で左記追錄す

A 造林

造林用苗圃　箇所三百七十四、面積二百九十二町歩、苗木類四千七百五十萬三千三百八十八本

人工造林　面積三千百八十五町、

本數九百七十九萬二千六百五十八本

天然更新　面積六千九百七町歩

B 森林被害

風雪損	一萬二千四百三十五圓
火災	五千百八十圓
盜伐採	三萬六千三百八十九圓
誤伐採	三千百二十七圓
其他	二萬九千八百十七圓
合計	八萬六千三百四十八圓

△森林地方別（附年伐材積）表

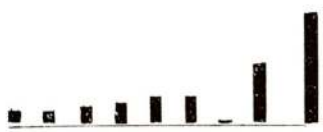
國別	御料林	國有林	大學演習林	其他官有林	公有林	社寺林有	私有林	合計
石狩	四〇七、五六〇町	二三二、八六四町	五二、六七三町	一〇、九三二町	一〇六、五四九町	四六町	六五、六一二町	八七七、二三八町
後志	一	二五二、六三八	一	三〇六	八、六八一	三三	二〇、七〇三	二八二、三六〇
渡島	九五、五六二	一〇三、〇三三	一	九六一	六〇、八九七	一八三	五一、八〇九	三一二、四三三
膽振	六八、六九四	一九一、五七二	二、三五八	九六一	三五、七五〇	九	三三、三二一	三三二、五六五
日高	三三、九八八	二七〇、四〇三	一	九、〇八三	四〇、六四九	一〇	二六、八六〇	三八〇、四一二
十勝	一	四二、八七一	一	三二、一一三	二五、二五五	一	五一、一〇七	五三、三七五
釧路	二七、六〇〇	三八、五五八	一	三四、四五五	二五、一四五	六	五、九五五	四三、六七九
根室	一	一八三、〇七一	一	一	一八六	一	三、六四六	一八六、九〇三

	千島	北見	天塩	計
伐材	—	—	四二、四〇六	五六七、八〇七
針葉樹	九八六、〇六七石	二七一、〇八八	九九、九三三	七三七、七三三
濶葉樹	八〇六、〇一三	九四、四九二	三、四八〇、四七一	一九九、九三三
計	一、八〇二、〇八〇	二七一、〇八八	四二、四〇六	五六七、八〇七
針葉樹	九八六、〇六七石	九四、四九二	三、四八〇、四七一	七三七、七三三
濶葉樹	八〇六、〇一三	一七一、〇八八	三八、三三七	一九九、九三三
計	一、八〇二、〇八〇	二六一、九八〇	四二、四〇六	五六七、八〇七
針葉樹	三、〇九一、六五四石	二、〇〇三	七	一一〇、二五八
トドマツ	一、三九九、八三六	三一	九七、三五五	九四七、三四八
其他	九二、七四一	九〇、八〇六	六一、七三三	五七九、八六三
セン	六八一、三四七	四六、二三七	四六二、七三三	四、六七九
ナラ	六四七、四二四	二八	九三五、七五八	三七四、三七三
ヤマナラシ	二〇一、八二七	二六四石	六七九、七七二石	四、九三二、八九三
ヤチダモ	一六九、一六〇	一九二	四五六	五、五〇八、〇七三
シナ	一三四、一七八	四、九三二、八九三	五七五、一八〇石	四、五八四、五三二石
カツラ	八〇、三八二	五、五〇八、〇七三	三七四、三七三	八、〇六一、六九二
濶葉樹		四、五八四、五三二石	五七九、八六三	五、四二〇、九五三
計		八、〇六一、六九二	四、六七九	一三、六四六、三三五
		五、四二〇、九五三	一一〇、二五八	
		一三、六四六、三三五	九四七、三四八	
			五七九、八六三	

附言　大正四年度に於て森林面積の著しく増加したるは從來臺帳面積を現狀精査せし結果に依る。

針葉樹とは概ね椴松蝦夷松を大部分とす

△**伐採樹種別比較表**（大正四年度）



	ヤナギ	ガンピ	クルミ	ホホ	ドロ	キハダ	其他	合計
針葉樹	七八、七三九	二九、五二三	二〇、六〇九	一四、六六二	一三、九六二	六、二四六	六、〇〇三、五三六	一三、六四六、三三五
濶葉樹	二九、五二三	二〇、六〇九	一四、六六二	一三、九六二	六、二四六			
計	一〇八、二六二	五〇、二一二	二八、六二八	二〇、九〇八	一九、一八八	六、二四六	六、〇〇三、五三六	

△**森林樹種別及其の伐採高**（大正四年度）

針葉樹	三、〇九一、六五四石
エゾマツ	一、三九九、八三六
トドマツ	九二、七四一

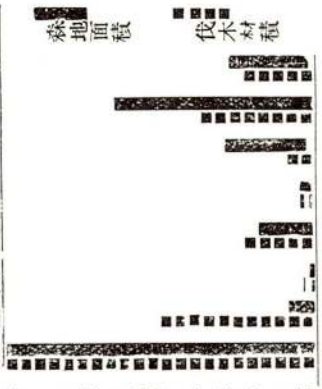
其他	九二、七四一石	ヤナギ	五八、七三九石
計	四、五八四、五三一石	ガンピ	二九、五八三石
濶葉樹		クルミ	二〇、六〇九石
セン	六八一、三四七石	ホホ	一四、六六一石
ナラ	六四七、四六四石	ドロ	一三、九六一石
ヤマナラシ	二〇一、八二七石	キハダ	六、二四六石
ヤチダモ	一六九、一六〇石	其他	六、〇〇三、五三六石
シナ	一三四、一七八石	計	八、〇六一、六九二石
カツラ	八〇、三八一石	合計	一二、六四六、二一三石

△各種林産物ト其用途別（大正四年度）

種別	角材	丸太材	電柱材	銑床材	早切	鐵道枕木	燐寸軸木用材	製紙原料材	薪炭材	其他	
エゾマツ	1 190.828 石	535.842 石	2.500 本	……	15 030 本	……	……	734.003 石	13.087 噸	197.423 ●	5.200 米石
トドマツ	1.197.957	714.133	11.769	……	182 343	……	6 000 石	892.302	13 556	143.781	10 845
ナラ	310.717	39.074	……	……	6 425	793 063	……	……	529 121	30.723	150 瓦
セン	395.973	20.013	……	……	590	35.264	……	……	40.303	78.956	12.000
ヤマナラシ	400	……	……	……	250	……	4 000	……	310	……	……
ヤチダモ	73.123	2.165	……	……	2.800	163.050	……	……	95 840	552	……
カツラ	81 466	7.870	……	……	……	16.725	……	……	19.330	10.580	……
シナ	34.542	80.094	……	……	8.700	……	136.240	……	18.858	19.456	……
ブナ	2 607	3.061	……	……	150	112.600	……	……	75.885	7 854	……

其他	合計	3 356 669	1.479.263	14.269	30.572	267.178	1 421.311	285.000	1.626 305	1.331 385	616.822	28.645	……
	ロ	1.725	27.100	……	……	1.450	……	138.260	……	130	58.538	……	……
	ヌ	2.925	1.122	……	……	1.200	2.957	……	……	2.490	145	……	……
	ル	1.135	……	……	30.572	……	……	……	……	10	……	……	……
	ヲ	3.654	2.597	……	……	500	……	……	……	1.390	536	……	……
	ワ	4.000	……	……	……	……	30.000	……	……	20.000	21.895	……	……
	カ	22.061	16.398	……	……	1.000	……	500	……	49.733	4.945	……	……
	ヨ	38.800	4.800	……	……	……	141.750	……	……	75.203	……	……	……
	タ	4.756	24.994	……	……	46.740	125.902	……	……	376.133	41.438	450	……

△森林地積と材積比較表



管理局	御料林	皇室林	官有林	公有林	社寺有林	私有林	合計
森林面積	九四四、四九町	四八四、四七町	四、三五五、五町	一、八〇五、五町	六八、四五町	三、五〇〇、五町	一三、四三六、五町
伐木材積	一八〇三〇八石	一四一、五五〇石	一一、一二〇石	三、一四〇石	四五〇石	一四、三九〇石	一三四、三五〇石

本表に依つて見るも如何に私有林が其土地に比し伐木旺盛なるかを自ら首肯せしむるであろう

△主要林産物累年比較

年次	角及丸太材 数量	角及丸太材 単価	鐵道枕木 数量	鐵道枕木 単価	製紙原料材 数量	製紙原料材 単価	製油原料材 数量	製油原料材 単価
	石	厘	石	厘	石	厘	石	厘
明治四十年度	2 962 645	833	3 419.428	354	441.947	702	39.058	690
同四十一年度	3 849.572	859	1 784113	350	275.605	600	455.000	715
同四十二年度	4.472.675	800	1.656.316	400	467.267	590	60 000	700
同四十三年度	3.320.808	871	2 885.895	405	325.405	700	591.200	705
同四十四年度	5 259,785	930	2.789379	409	307.537	712	702.233	749
大正元年度	5 720 980	861	1 968 412	375	358.670	826	378.000	710

同年	二度	5 705.953	933 1.964.200	377 226.792	750	393.559 792	
同年	三度	5 525 1101.155	2 020 567	338 421.609	1.018	585.062 969	
同年	四度	5 452 754	1.062	1 421 311	404	285.000	1.183 626 305 953

本表中明治四十年以降の主要産物即ち角、丸太鐵道枕木、製軸原料の生産額を示す。但し生産額は生産當時の調査なるを以て其後角及丸太の內更に枕木等に製材せられたるもの或は製軸製紙原料材となるものあるべし。

◆主要木材の産地と材質及効用

土木建築其他一般工業用材として斯界に貢獻する本材五十餘種の內殊に二十餘種の特殊樹木に就て其調査概要を擧げて見ると。

(1) **クロエゾマツ**、普通蝦夷松と云ふ、本木は北海道全地に繁植して居るが、本道南部に最も少なく北見、天鹽、釧路、膽振地方を鄕土とし、其蓄積頗る夥多である。樹幹は十餘丈周圍一丈餘に達するものがある。直立圓錐形を爲し美觀を呈し樹皮黑褐色にして灰白色を帶び、鱗甲を爲して剝脫する、白質にして中心淡褐色を帶ぶ、肌理稍緻密にして脂氣多し、其用途は建築、船艦、製紙、經木、箱材等主なるものである。

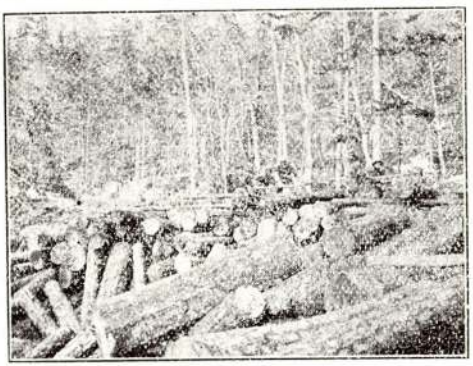
(2) **アカエゾマツ**、「シンコマツ」又は「アカエゾ」と云ふ本木は全道到る處に產出する、幹高等は「クロエゾマツ」に類似するも樹皮赤褐色鱗片薄々して褐色光澤あり材質並に効用共クロエゾマツ類似して居る。

(3) **トドマツ**、一名「トド」と云ひ全道各地に繁茂す、幹直立圓錐形をなし高さ十餘丈周圍一丈餘に達す、樹皮灰青色にして裂目をなさず、白色正理質稍粗惡にして輕し効用は建築、艦船製紙、經木、燐寸軸木、土工材等である。

(4) **シコタンマツ**、一名「グイマツ」と稱し、本木に限り概ね千島に產して居る。幹高五六丈徑三尺餘に達す樹皮赫褐色にして灰白色を帶び皺裂を爲し品質粗惡である、材赤色を帶び、肌膚平滑にして脂膩多く重硬である。効用に

は建築、土木、橋梁、電柱材等に宛つアイヌ人は此木に寄生する「トボレ」菌を以て無二の珍薬となすと云ふ。

(5)**ヒメコマツ**、一名「ゴエフマツ」は渡島、後志奥尻島に多く産出す、幹直く周圍は五六尺高さ五六丈に達す樹皮幼稚のものは灰綠色にして後黑褐色を帶び外皮は灰白色にて其鱗片固くゴエフマツに比し稍小なり、材質は白色にして心材は稍黃色を帶ぶ、其質疎なる年輪を具へ柔軟にして乾燥と同時に收縮率稍多し、用材としては鑄物木型、曲輪、建築用材として又賞揚せらる。



土場の狀況

(6)**ゴエフマツ**、は日高、十勝、渡島等に多く産出す、幹高は七八丈に又周圍六七尺に達するものあり、樹皮赭褐色の鱗片稍大にして柔軟邊材は黃白色心材黃褐色を帶び脂膩多し用途はヒメコマツに類似せり。

(7)**アスナロ**、一名「ヒバ」本木は主に渡島に多し幹高八九丈周圍六七尺もの少からず木理通直なり、白質淡黃色にして鉋削すれば光澤あり脂氣多く一見檜材に似て抵抗力強く從つて其効用は建築、土木、車輪材、器具、漆器板物並に曲物木地等に需用最も廣し。

(8)**イチイ**、「オンコ」とも云ふ本道到る處に産出す、幹高は七八丈周圍八九尺に達するものあり樹皮黑赤色にして薄く淡褐赤色にして少しく紫色を帶ぶ肌理緻密にて硬く彈力があるので、建築、器具、彫刻、鉛筆、妻楊子、箸、經木等に頗る優秀のものである。

(9)**プナノキ**、本木は渡島、後志及膽振の一部に産出す高六七丈周圍八九尺外皮綠灰色にて平滑である、材質は心材邊材の區別なく、一般に淡

赤色にして或は褐色を帶び材質緻密にて堅く硬粘力あり裂割し易く用途は概ね器具、農具把柄、薪炭木管、硝子木型等有用の木材である

(10) **クリ**、は石狩以南にのみ産！東は日高國沙流郡に盡く渡島國茅部郡膽振國山越郡方面に頗る多し、其生長を見るに幹高五六丈周圍六七尺位迄に達するものあり、特質は丹波方面の材に異ならず、用途は地工、橋梁、船艦、器具枕木等であつて皮は鞣皮用染料に供すべし防腐強質材として賞讃せらる。

(11) **オホナラ**、「マナラ」とも云ふ本島又到る處を鄕土とす、高七八丈周圍一丈餘に及ぶものあり、樹皮灰褐色粗大にして深々扁平なる裂目を有す、邊材甚だ廣く心材帶淡黃褐色なり木理緻密にして最も堅硬彈力強く、虎班狀を呈し光澤あり幽麗雅致あるものがある、建築、器具、器械、車軸、枕木、土木、樽木、船艦用等有用なるもの、近時北海道產出の木材が米國其他に多く輸出する主範材は就中本樹木を以てする前記蝦夷松、椴松材と供に所謂北海道木材の代表樹として斯界に貢献せらる。

(12) **コラナ**、一名「イシナラ」と稱し本道中部以南に產出す、幹高、周圍、材質、効用共に「オホナラ」に酷似してゐる。

(13) **ミヅナラ**、本樹木も又本道到る處に產出すべしと雖も概ね「オホナラ」材に比し北方の地を鄕土とする。大さ、材質、効用共に「オホナラ」に髣髴してゐる。

(14) **ヤチダモ**、一般に塩地(榊)と云ふ、本木も全島到る處に產出す、幹直立し高七八丈周圍一丈餘樹皮灰白色を帶び深き裂目を生じ易く、白質微黃稍暗色を呈して居る、材剛勁にして粘力あり耐久性彈力強し、建築、器具、車輛枕木、樂器、船艦、河艇船具等に賞讃せらる就中「タモ」の一種にして腰羽目其他洋式建築の屋内雜作用材として頗る妙なるものがある

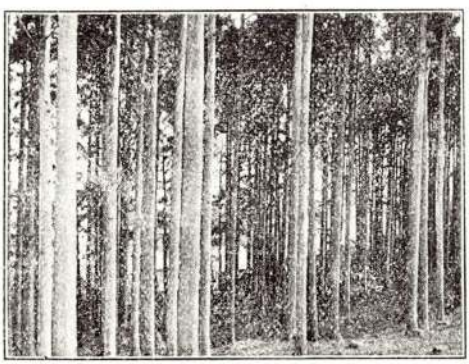
(15) **ボホノキ**、一名「ホ、」本木は全島に產す、幹端直にして高四五丈周圍四五尺に達するものあり樹皮茶褐色にして原密なり邊材狹く淡黃色にして心材は灰綠色なり、而して細緻なる

針葉狀を呈し材柔軟にて年輪細密なり、用途には其範圍頗る廣し其二三を列記せば先づ彫刻材、板、裁板、刻板、定木、下船、艦船主として船具、器具材(又物鞘機關糸枠)鉛筆材把柄、寄木、經木、鑄物木型等外皮は藥用に其用途廣汎である。

(17) **コブシ**、一名「ヒキザクラ」千島を除く外全道に產出する、幹高く太く材質効用共に「ホホノキ」に酷似してゐる。

(17) **シナノキ**、一名「ナシ」本樹木も又本島に到る處に在るけれども石狩、渡島、天塩、北見方面に多し、其幹高四五丈周圍四五尺に及ぶ外皮褐色內皮淡褐色にて剝け易く淡黃褐色を帶び、木理粗にして柔軟裂割し易し、燐寸軸木、下駄、經木眞田、板(張板類)器具材及び內皮は布に織り又は索繩として居る。

(18) **トチノキ**、一名「トチ」渡島、後志、石狩、膽振等の外國に產す、幹高八九丈周圍一丈に及ぶ樹皮初めは平滑にして灰褐色なるも茶褐色を呈し外貌灰色を帶び木栓質の裂目を有する扁平なる皮を生す、材色白く微黃色を帶び一種の光澤を有し、緻密粘强にして硬度中庸である、木理花紋を爲すものあり、用途には板器具、木象嵌(花紋あるものは賞用せらる)建築用材 主に門扉、漆器木地等に供用せらる。



園館山スギ造林

(19) **イヌエンジユ** 單に「エンジユ」とも云ふ本島到る處に產出す幹高四五丈周圍四五尺に達するものがある。樹皮淡褐色にして裂目あり邊材甚だ狹く帶黃白色心材帶黑褐色なり、質堅硬粘力あり折れ難く木理正密材片斷面平滑なり、器具、床柱、彫刻、把柄(主に手斧柄)皮は染料、三味線、月琴胴、樂器材等有用せらる。

(20) **ヤマザクラ**、之れ又本島到る處に繁茂す、幹高四五丈周圍四五尺に達す外皮暗紅褐色にして之れを剝げば薄く横剝し老樹の皮は淡褐色を帶び横に鱗剝す、邊材甚だ狹く帶黄白色心材帶黑褐色なり、質堅硬粘力あり折れ難く木理正密にして脆からず頗る光澤に富む、建築裝飾、彫刻、器具、定木、印判、樂器、硝子型、皮は袋物曲輪を縫ふに至便至良材である

(21) **ヤマモミヂ**、本木も又北海道到る處に產出する。幹高四五丈周圍五六尺迄のもの多し、外皮灰色枝條赤色にして滑力あり、材質は「イタヤカヘデ」に類似し且つ堅靱である。用途には洋家具、彫刻材、木管、建築內部の裝飾的雜作、把柄（農工具）車輛（主に轅）硝子型等なり。近時「ベニヤ」板材として各種の裝飾的是「ベルベット」の如く其班絞色彩共に幽麗なるものありて斯界に多く賞讃せらる。

(22) **カツラ**、本島到る處に產出して居るが比較的南部に少なし、幹高直立し、八九丈周圍一丈餘に達するもある、樹皮灰色を帶び淺き裂目を生ず、邊材帶淡褐色、心材帶灰褐色肌理細直堅硬ならざるも緻密にして粘力あり光澤頗る美なるものなり、用途は建築材、船艦、板（裁板、刻板、定木等）器具、樂器、枠、漆器木地、玩具等に至良材と云ふ。

以上木材中其林相は針葉樹林、濶葉樹林、針葉濶葉の混淆林の三種に大別すべく針葉樹林は西南部に少なく東北に進むに從ひ漸次增加して居る。是れ西南部は元來少なかりしと多年伐採せられたるとにより現今の美林は北見國常呂郡置戶及「オンヂユ」同國斜里郡斜里、網走郡「ポンキキン」、釧路國阿寒郡阿寒湖畔、同川上郡屈斜路湖畔、根室國根室郡「オンヂトー」日高國沙流郡沙流川上流、膽振國勇拂郡鵡川及千歲郡千歲等である。

濶葉樹林は本道森林全面積の大半を占むるも同一樹種を以て成る純林極めて稀である、然れども「ハンノキ」「カシハ」「ヤマナラシ」「ドロ」「イタヤカヘデ」「ナラ」「ブナ」等は比較的群生する場所多い。

針濶混淆林は針葉樹と濶葉樹と不規則に混淆し、天然更新の狀態は主もに老大なる濶葉樹の下に針葉樹の稚樹若くば壯樹點生又は群生するを常として居る。

（北海道一了）



都市と建築

都市研究生

三十年後の大阪（三）

（五）建築物の變遷

大阪には現在公館らしきものは指を折る程しか見當らない、先づ中之島の市公會堂、府圖書館、日本銀行支店、堂島川に面する控訴院位のもので府廳舍も假家であれば醫科大學もまだ施工にかゝつて居ない。又市廳舍は漸く基礎工事に着手したばかりのところであるから其出來上るのは大正十年頃であらふ。商品陳列館は二三年前に東横堀に面して相當の建築が出來たけれども、其位地などは都市計畫と何等緣故のない孤獨の狀態であつて其公館振りを發揮するには不利である。其他停車場及其廣場に面する公館はと尋ねて見れば、殆んど何物をも發見し得ないのである。梅田大停車場の建物の見窄らしいのは過渡時代の間に合せと見て之を看過するも、其廣場附近一帶の驚くべき亂雜不秩序の家並や醜惡極まる廣告板狀態を見ては殆んど之を批評することさへ出來ないのである。一体都市の表玄關たる停車場廣場は整齊統一を旨とし廣濶に

して堅實なる實体を示すべきであるのに、全くその正反對の現狀を暴露して居る我大阪市の現狀は、何と言つても文明都市の正体と見る譯にゆかない。

唯商業の中心地區たる今橋通り高麗橋通りなどには、其業務の性質上相當の工費をかけた堅實なる建物の並列せるを見るが、之等とても何れも統一を缺ぎ、街衢の体裁を保ち得ないのは見逃すとして、其實質が果して近代の構造學の進歩を十分に適用して居るや否や疑はしいのである。中に就て最近三四年の間に出來た建物の中には稍覺醒したものゝ見當らぬこともないが四五年前までに出來上つたものは殆んど半ば以上は時代後れのものであると言つてもよろしい

其他普通の商舖住宅に至つては現時の大阪市は殆んど之を都市の建物と見做し得ないものゝみである。火災豫防上から言つても、都市經濟の進展から見ても、又都市の体裁から見ても所詮之を東洋の一大都市として許す譯にゆかないのである。

斯かる憐むべき現狀の我大阪市が今後三十年間に、どの位進展し得るかを推定するには、先づ其經濟力の增進から打算し、次に建築が今後經濟上如何なる位地を占むるに至るやを考究せねばならぬのである。吾人は大阪の富力と其建築物の宏壯なる程度とが一致するものであると言ふような淺薄なる考を有するものではないけれども、全く其富力と無關係に建築物が發達するものと考ふるものではない。其間に密接の關係の存ずることだけは承認せねばならぬのである。詳しく言へば都市富力の增進は直接に其建築物を宏壯にするのではないけれども、建築物の堅實なる發達をなし街衢の壯觀を呈するようになる爲めには其投資力即ち富力の潛在を要するのである。

建築物に投資することは貧弱なる財政や餘裕少き國民經濟の狀況にては容易の事柄ではない我國の凡ての都市が今日まで其公舘を初め一般建築物の爲めに相當の資金を投ずるの餘裕を持たなかつたのは事實であつて、其唯一の帝都に

於てさへも重要なる公舘の大半が揃ひも揃つて假設建物であるに見ても、如何に貧弱なる財政に苦しんで來たかが想像出來る。又一般經濟力の低率なりし狀況も其商業中樞地の建築物の並列せる容子にて明かに知らるゝのである。之を帝都以外の都市に見る時は更に其程度の低きを知るのであつて、其都市の經濟力に餘裕少かりしを示して餘あると言ふも過言ではない。

乍併都市住民が今後世界的經濟の渦中に投じて大仕掛けの業務に從事するには、其根據たる建築物の堅實なる保護を受けされば其確實なる存在の基礎を有つ譯にゆかないのである。又官公廳の業務に至つては尙更ら其建築物の永久的性質を緊要とするのであつて、其性質に缺げた構造物であつた爲めに今日まで我國の官公廳が受けた損害は可なり重大なものであつた。又今後其受けんとする危險の度合は益々重大ならんとするのである。此等の危險率を局限し、努めて確實なる基礎の上に業務を營むの必要なるは今後の都市當然の要求である。故に若し投資の餘力を生ずるや其餘力は漸次其建築物の實質改善に注がれねばならぬのである。之れ經濟上必然の潮流であつて如何なる事情も之を喰ひ止める譯にゆかないのである。紐育市に於て戰前數年間は毎年其建築物に十億圓を投じたと言はれて居たのも全く經濟上自然の流れであると見ねばならぬ。

我國大都市の建築が漸次改善されて進み來り、し徑路を見て今後の發達の順序を推定することは必ずしも六ケ敷き問題とも思はれぬ、唯歐米各國の都市の既往の經過を其儘に我國に繰り返すと見るならば、そは甚しき錯誤に陷るであらふと思はれる。又歐米各國の都市にしても其建築物の改善と發展は甚だ復雜を極め現に其將來に就ての正當なる見界が學者間にも一致して居ないような有樣であるから我國の問題を强いて歐米都市の發達より考ふるの要はない。即ち我國大都市の將來の建築振りを推定するには我國特有の事情、世態及經濟關係より出發するを順序とせねばならぬのである。

大阪の現在の建物は其建坪約三百二十萬坪で東京のそれが約八百二十萬坪なるに比すれば比較的少いのである、其人口割にすれば東京にては市民一人に對し四坪に當り大阪にては一人二坪強にしか當つて居ない。其數量を以て見れば東京の方が大阪よりも經濟上大に餘裕ある如く思はれるけれども、事實は決してそうではない、一般の地積の關係と、建物の實質の精粗の事情又は建築物に對する趣味の差異より生ずる自然の結果であることは事實と認められる。之を返言すれば東京よりも大阪にては建物に關する一般の執着心が強いのであつて、更に此考を文明化すれば建築改善の大機運を促進するのである。吾人は今大阪の三十年後の建築物の容子を推定するに際し、此の機運の曙光を現在已に認め得らるゝを愉快に感ぜざるを得ないのである。

我大阪市の現在建物の三百二十萬坪は三十年後にては少くとも七百萬坪の面積に達するであろふ、又其實質の變遷に於て驚嘆すべきものがなくてはならぬのである。即ち一等二等の主要街路に面する建築は何れも絶對防火の永久的構造のものとなり、其高さも平均四階五階六階の間を保ち、見るからに宏壯雄大の感を深くすることであらふ。場所によりては七階八階の建物も出來ぬことはないが、我大阪の地質の關係上大低は五階を以て普通の最高度とするであろふと思はれる。外觀の概況は耐震耐火構造の一般的形相として、歐米の近代樣式に似寄りたるものとなるのは致方なく、殊に屋根が平板となり屋上庭園を樂むに至るは自然の順序でなくてはならぬ、殊に注意すべきは、每箇の建物が漸次大規模となり、從來煉瓦造の建物一棟の坪數六十坪に充たず、石造のそれが九十坪強なりし時代に比すれば十數倍の大さとなり、一棟の坪數平均五百坪位となるであろふ。之を五階乃至六階とすれば其建物一箇内の床面積は二千五百坪乃至三千坪となる譯である。紐育に於けるエクキテーブル生命保險會社の建物は一棟の中に五萬五千坪の床面積を有するのであるが、三十年

後の大阪市の或る一角には矢張り萬を以て其床面積を計算する建物の出現必ずしも絶無と言ふべきではない。

飛行機の漸次實用的となるに從ひ、大旅館、兵營、官衙等の建物の屋上庭園に其着陸場を必要とするは自然の徑路である。現に亞米利加にては其必要を唱へ大旅館は其屋上玄關より來客を迎ふるの設備をなすべしとさへ論ずるものがある程に、飛行機は實用方面に其翼を延ばして來たのである。今後三十年には現在自働車乘客が舊來家屋の玄關にて惱まされつゝあるように飛行機乘客が又々舊式の家屋に着陸する方法なきを嘆ぺであろふと思はれる。屋上の廣濶なる庭園は耐火構造の家屋の自然的結果に出つるのであるから、即かで此ものと飛行機の發達と相待つて家屋の空間的價値に一大變化を生せしめるかも知れぬ。更に吾人の考へ置くべきことは都市の或る小區域の間を限り其屋上を利用する交通機關の出現である、此等は架空の夢の如くに想像する人もあれど、高架鐵道や地下鐵道を盛んに利用しつゝある現代の文明は何時までも屋上庭園を利用せずには置かないであろふ。

又街衢の容子は如何なる風に變り行くやを推定するに、先づ一等道路、二等道路の商業地域にある部分に面する建築より、漸次永久的構造物に改善されることだけは、間違なき觀察であろふ。乍併建築なるものは主として市民各個の自由意志より出發する爲めに兎角亂雜に流れ、苟且主義に捉はれ、數次其家並の不揃ひと設計の不統一を暴露し、都市の美觀を害するの虞なきにあらず。各國の都市はそれぞれ建築法令を以て其統一を計りつゝあるのもその制裁を一つの目的として居るのである。我國には從來建築に關する法律は皆無であつた爲めに、現在に出來上つて居る建築は全く各個の自由意思に依つたものゝみであつて、街衢全体の美觀とか統一とかには何等貢獻して居ないのはまだしも、其實質に於ても隨分不眞面目のもの多く、都市の發達を妨げつゝあるもの比々皆然らざるはなき狀態である。此等は近時都市計畫調査會にて立

案を急ぎつゝある法律の通過に依つて、其大勢を救ふことは出來るかも知れぬ、けれども、建築各箇の企業者及設計者が都市全体の發展に關し十分の理解力を以て其建設に從事せざる以上如何なる法律も其効果を發揮し得ないことを恐るゝのである。

亞米利加都市は一般に經濟上必然の趨勢を重んじて都市の建築に大なる制裁を加へなかつた爲めに、其都市の經濟力の大なれば大なる程又都市の中に於ても其區域の經濟的價値の大なれば大なる程其部分の建築は其高さを增し、中空にまで達する高層建築を釀成したのである。反之歐洲都市は其高さの極度を制限して街衢全体の整齊統一を圖り、穩健なる環境の調和を保つを忘れなかつた。我國都市の今後の成行に關しても矢張り經濟上の發展のみに拘泥せず、歐洲都市が主として採り來りし制裁の方針を加味し經濟活動の爲めに利便を圖ると同時に適當なる整齊統一の法を布き、建築の實質の完備と共に環境調和を考慮するを要するのである。斯くして我大阪市の主要地區の建築は三十年後に於ては其体裁と整齊統一せる點に於ては伯林のそれを凌ぎ、實質の堅固にして經濟上有利の價値を發揮する點に於ては紐育のそれに優り、以て歐米都市の誇りとし來りの都市建築のあらゆる長所を併有し得るのである。

飜つて我大阪市が今後三十年間に投資すべき建築資本の概數を考ふるに先づ一等二等道路約五十哩の內其三分の一たる十七哩の兩側に櫛比する家屋の建設費を計算すれば、

家屋の奥行を平均十間と見做し、一哩の兩側の建坪一萬七千六百坪を得、之を平均五階とすれば八萬八千坪（延坪）となり、之を十七哩に適用すれば其延坪正さに百五十九萬六千坪となる。

建設費床一坪二百五十圓として四億九千九百萬圓となる。

即ち延坪約百六十萬坪工費約五億圓を投せざれば一二等道路の商業區域の建築が揃はぬ譯であり、其他の地域の建築も之に準じて改善さる

ゝものとすれば少くとも更に五億圓の投資を要するものと思はねばならぬ。して見れば大阪市民は今後三十年間に十億圓の投資を其建築改善の爲めに餘儀なくさるゝ譯であるが、之れ果して大阪市民の勝へ得るところであるかどうか、少くとも吾人の研究を要する問題である。

十億圓と言へば可なり大きな金であるから、耳を揃へて之を出すとは困難であるかも知れぬが、其利廻りより換算すれば毎年五千萬圓以上の利息を生み出すものならば投資額として十億圓は少しも不合理のものではない。巴里は普佛戰爭の敗殘の後を受けても五億圓の市區改正費を支辨した、紐育では毎年十億圓が建築に投資されて來た、又建築投資ではないけれども漢堡は其築港改善の爲めに二億圓を投じ、マンチエスター市は其運河の爲めに一億七千萬圓を費した等の事實は、凡て合理的投資は少しも苦痛を感せざる時代となつたことを物語るものである我大阪市の經濟活動力の增進に伴ひ、其家賃の爲めに一ケ年五六千萬圓以上を支拂ふことは少しも不合理ならざる時代に到着するは吾人の信じて疑はざるところである。我大阪市の富力や經濟活動力の增進に就ては他日又別に之を論ずることゝする。

（此項畢）

物價暴騰と救濟事業

共同宿泊所……簡易食堂……住宅……の市營計畫

物價暴騰殊に米價の著しき騰貴が直接の原因となり、全國各地に騷動を惹き起したる最近の我社會現象は昭代の一大不祥事には相違なきも吾人をして忌憚なく言はしむれば何等の騷動も

なく現時の物資供給不足と生活不安の狀態が鬱屈壓服され終り、表面泰平無事の裝ひをなすよりも、其形式の不穩當であつたにもせよ、爲政家や、資本家に一顧の機會を與へしは、むしろ好成績であつたと言はねばならぬ。唯一揆騷動の如き無暴の擧に出でしは返す返すも不都合千萬であつて、社會の秩序維持上少しも同情すべき點を見出し得ないから、其騷動者がそれ〴〵嚴罰に處せられるのも致方はあるまい。現代に於ては斯かる騷動の如き忌むべき形式を取らぬでも、爲政家や資本家を覺醒せしむる有効なる手段は十分と研究されて居るのであるから、今後は社會覺醒の爲めに其穩健なる手段を以て、斷へず政治家や資本家を刺撃するの必要がある之れ即はち社會の底滯を防ぎ其向上發展に稗益する所以である。

此回の暴動事件は其手段の惡かりしにもせよ、全國一齊に響に應ずるが如く蜂起せし所以のものは、其動機が社會一般の生活不安と言ふ共通にして、しかも人生々活に痛切至極の關係あるものであつたからで、之を新聞記事に唆かされた御祭り騷ぎの如く解釋した行政官は、まだ〴〵社會の苦勞が積んで居ないとでも言はねばならぬ。幸に御內帑金の恩賜あり、富豪の狼狽せる寄附金の集積するあり、爲政家の眞面目の態度も見へ、兎に角騷動は一と通り鎭靜したのではあるが、其生活不安てふ一大根原より來るべき反抗的氣分は決して根絶したのではないことだけはたしかである。乍併此度の米價の突如たる暴騰が惹起したる生活不安の感じは一般下層社會に一時急切なるものゝあつたゞけで、決して眞實に彼等に不安を招徠したと思へない事情があることを知らねばならぬ。もとより下級吏員や薄給の事務員の生活不安は甚しきものありて深く同情を寄すべきものあり、又一般細民中にも收入の甚だ振はざるもの少からぬのであるから、それ等には何等かの方法にて其生活を援助することは此際の急要事であるには相違はないけれども、一般に近時の勞働階級の收入は平時に比すれば少くとも其倍額に達し居るのは

事實であつて、米價その他一般生活費の騰貴は數字に於て彼等に急迫を感せしめるのみで、實際に於て、生活不安定の聲は彼等を脅迫する狀態に達して居るのではない。此等の事情を十分に精査して見たならば、現に官民共に狼狽を極めつゝある救濟事業の叫びは多少滑稽の響であるかも知れないのである。

救濟事業は社會の平等なる幸福を期待して出發すべきものであつて、唯一部の貧民を喜ばせて滿足する如き幼稚のものでは採るに足らぬのである。米廉價販賣の如きも此意味に於て甚だ不徹底の救濟ではないかと思はれる、騷動以來一時精米の供給杜絶したことがあつて、公共團体の力により其供給の途を採つたのは賢明なる應急手段であるが、一割や二割廉價の精米を賣與へたとて、それで生活の不安が除去されると言ふやうな細民の階級が果して幾何あるか、先づ〳〵市民の百分の一にも當るまいと思はれる兎に角米廉價販賣は救濟事業としては全く不徹底にして、しかも不經濟極まる手段であつて、其費す金額の割合に、又其骨折りの割合に效果のあるものではない。

最近に至り我大阪市の有力者は相一致して府市理事者を中心とする救濟事業後援會を組織して左の意味にて其抱負を發表し、一般の寄附金を募集することゝなつた。吾人は其精神に於て決して不賛成のものではなく、むしろ彼等先覺者が遲れ馳せながら現代の救濟事業の眞髓を會得して勇敢に之が實行に同意せる其勇氣を稱賛するものであるけれども、唯之を寄附金に待つと言ふに至つては甚だ了解し兼ねるのである。況して之を政治問題と切り離して取扱はんとするに至つては二十世紀の空氣は何處にも之を發見し得ないではないかと思はれる。救濟事業は實に社會一般の安定を招徠し其向上發展を期する一大政策である以上、唯之を仁人の寄附に待ち其惠み金を壇梅して其政策を運用せんとする如き消極姑息の手段では到底其精神を十分に發揮し得るものではない。

廣告

今ヤ米價ヲ始メトシ諸物價ノ暴騰ハ一般ノ生計ヲシテ益々窮迫ヲ嘆ゼシメ遂ニ今回ノ不祥事ヲ惹起スルニ至レリ府市當局並民間ノ有志深ク之ヲ憂ヘ刻下ノ急ヲ救フノ策トシテ全力ヲ米ノ廉賣ニ傾注セラルヽハ固ヨリ感謝ニ堪ヘザル所ナリ然リト雖モ之ヲ時難ノ眞相ニ徹スルニ斯ノ應急ノ救濟ニ努ムルト共ニ進ンデ一般生計ノ窮迫ヲ根本的ニ救濟スベキ社會的施設ヲ起シ以テ不祥ノ事端ヲ未然ニ防ギ永ク市民ノ平安ヲ圖リテ克ク其堵ニ安ゼシムルノ方策ヲ樹ツルノ更ニ緊切ナルヲ覺ユ吾人聊カ此ニ顧ミル所アリ同志相謀リテ遍ク之ヲ世ノ有志ニ訴ヘ該社會的事業ノ資金ヲ蒐集シ市當局ト協力シテ速ニ其ノ實行ヲ期セントス冀クハ此ノ微衷ノ存スル所ヲ諒シテ其ノ主意ヲ賛セラレ以テ之ガ遂行ヲ援助セラレンコトヲ

大正七年九月八日

大阪市救濟事業後援會

發企人　大阪朝日新聞社外七新聞社

池上四郎外十七名連署

而して市當局者はさし當り共同宿泊所、簡易食堂、一般細民住宅の建設を企つる方針なりとの意見を公表せる處を見れば、吾人の常に唱へ來りし『生活の基礎は住居に在り、住居の不安と不快は凡ての社會を墮落せしむ』と言ふ現代社會政策の眞髓に觸れんとするものなるを知らしめる。乍然斯かる政策を徹底的に遂行せんとして其資金を仁人の寄附に待つは猶は漁獲なきに其吸ものを馳走せんとする如きものにあらざるなきか、若し又强制的に寄附を勸誘する如きことあらば之れ一種の米騒動的脅迫に類することなきやを憂へしめる。

要するに今や大都市は其市民の活動を平均に圓滑ならしめる爲めには、徹底的に救濟事業を施設すべき時代に達して居るのであるから、市の先覺者たるものは其理解を以て之を政治家に愬へて國法の確立を促がし、又一方都市の經營として住宅政策其他の公共的施設を畫策せしむ

べきである。然るに何ぞや、寄附金を集めて其金高により僅少輕微なる施設を試みんとするが如き時代遲れの考を發表するとは。

大阪市は今や文明都市としての積極畫策を樹立すべき時期に達して居るのである、隨つて其社會的施設も亦積極的に其規模を定めて經營に從事せねばならぬのである。故に此際應急手段は兎も角、永久的畫策としては寄附金に依る如き小規模の施設は、何としても大都市の向上發展の徑路と見る譯にゆかない。先覺の士更に考一考して我社會改良の施設に付き其積極的方針を樹立すべきにはあらずや。吾人は之を歐米の社會に倣ふのではないが、英國が一八九〇年即ち今より二十七年前已に住宅公營の國法を發布して各都市共に住宅政策を斷行しつゝあるの事實や、最近に紐育市は一億圓を投じて十六萬人を收容し得る貸家と、郊外に二十五萬人に對する約六萬箇の住宅を建設しつゝある事實と相對比して、我大阪市の經營が餘りに萎縮不振の狀態なるを感せずには居られぬ。積極的救濟事業と寄附金募集とは決して並行せる相對的のものではないことに想到し、當てもなき寄附金に賴りてあたら救濟事業の施設畫策を誤らしめぬこと こそ肝要である。

江戸見物

（寢惚先生）

江戸膝元異二在鄉一　大名小路下町方
二王門共三中堂一峻　兩國橋踰二御馬一長
懸直現金正札附　小便無用板屏傍
吉原常與二品川一賑　儻是狂言三歲場



女流の住宅觀

□椽側の硝子障子は亡夫博士が創めました。

法學博士
未亡人　鳩山春子談

それは今から三十七八年の昔のお話でありますが、鳩山は私と結婚します匆々、小石川へ住宅を新築致しました。此の時の住宅は、今から考へれば極めて平凡なものでありますけれど、當時に取つてはなか〳〵新趣向とも言ふべき和洋折衷でございました。

何しろ、鳩山はほんの子供上り位な時に、政府から撰抜されて洋行したものでございます。歸朝後の六月に辯護士試驗に及第しますと、直ちに辯護士を開業致しました。それから間もなく、その十月に私と結婚することになつたのでありますが、元來獨創的の考に富んだ方で、且つ頗る餘裕のある性質でございましたから、色々の方面に趣味を持つてゐました。それ故日常の生活上につきましても、自分であれやこれやと趣向を凝らしまして、新奇なこと、又はこれまで餘り日本でやられなかつたやうなことを、色々實行したものであります。

例へば、餘計なお話でございますが結婚披露といふことも、日本では鳩山と私との結婚の時に始めて行つたのであります。それまでは結婚の際にお祝儀を行つて、親戚故舊を自宅へ招くといふやうなことは致しましたけれど、何分、昔は女の人格といふものは認められず、深窓に閉ぢ籠めてあつたもの故、夫の友人などに紹介されることもなかつたのであります。鳩山はそれをよくないことゝ思つて、夫の友人は妻の友人であり、妻の友人は私の友人であるといふ考

から、結婚後に、私共双方の知人を料理屋へ招きまして披露を致しました。さう云ふ風に、鳩山は洋行歸りの新しい頭を持つて、まだ西南戰爭の終ふて間もない、立憲政治も行はれてゐない日本に、色々と新しいことを企てました。家の改良といふこともつまりこの一つでありました。

住宅のお話の前に、辯護士事務所のお話をしなくてはなりません。この事務所（オフイス）といふものを住宅とは別に設けることも、實は鳩山の始めたことでございます。尤もその時でも、幼稚ながら日本にも會社のやうなものもありまして、そこでも事務所が設けてありましたものゝ、個人として一箇の事務所を持つてゐるといふ例は全くなかつたのであります。それを鳩山は、西洋風に事務所を別にして置くと、まことに便利であると思ひついて、辯護士になる匆々、京橋區の山城町に家を買ひまして、事務所を開いたのであります。

事務所を開くやうになつた主な理由は、仕事と遊びとを別々にするといふことでありましたごうも從來日本で、仕事の能率の餘り上らないで、兎角に怠ける習慣のあるのは、仕事なのか遊びなのか解らない、そこがはつきりして居ないのに基くことが多いと考へまして、そしてそれは重々家が不完全であるからだと思つたのであります。例へば訪問客があるとしましても、從來のやうに疊の上に坐つて、煙草を喫かしながら、天氣の挨拶から起居動作の問答、世間話と推し移つて、お茶を喫み或は酒を飲みながらその間にぽつ〳〵と用談をするといふやうな遣方や、或は仕事をしかけてゐる處へ突然來客があつて、それに妨げられて仕事が捗取らないといふやうな關係から、色々の不便を感じます

その點へ行くと、西洋のやり方は餘程進歩してゐると、斯う思ひついたので、仕事は仕事場でやる、遊びは自宅でやると分けました、訪問客の如きでも、用談に關することは事務所に於て、椅子に腰をかけて、さつさと濟まして行くその代り親しい友人などで、打ち寛いで物語る

といふやうな人は自宅へ來ていたゞいて、ゆつくり樂しむといふ風に別けたのであります。

鳩山は斯ういふ目的から率先して辯護士事務所を開きましたが、その時はまだそこまで世間が進んで居ませんでしたから、鳩山は妙なことをする、妾宅とも見ねぬのに家を二つ持つてるなどゝ、變な噂をする人もある位でした。どころがどうでせう、今日では辯護士でもお醫者さんでも、仕事場と住宅とか別々になつてゐるのが當然のやうになつたではありませんか、變れば變る世の中だと、私はつく〴〵さう思つて居ます。

所で私共はさういふ關係から別に住宅が必要となりました故、鳩山と二人で適當地を搜した結果、只今の江戸川端の、牛込區西五軒町に新しく家を建てることゝ致しました。西洋館にしようか日本館がよからうかと、色々相談致しましたが、住宅として日本風がよからう、周圍との調和もその方がよいし、住み馴れた心地も、矢張り日本人には日本風がよからうといふことになつて、構造は大体に於いて日本在來の風に致しました。しかし、衛生上の設備や、便宜上のことなどは、在來の家では缺點がなか〳〵多いのであります。そこで從來のやうに家相がどうとかいふやうなことは餘りやかましく言はない代りに、向きをよくしまして、光線が充分に射し込めば、出入の便もよいやうにと心を用ひまして、餘り大きくはなかつたけれど、工夫を凝らして建てたのであります。

その工夫の中で最も著しかつたことは、そしてそれが今日まで重寶がられて、普通の建築には必らずさうしなくてはならないものゝやうになつて仕舞ひましたのは、あの緣側の外へ硝子障子を建てることでございます。勿論、日本には昔は建物に硝子を用ひたことはありませんから障子を硝子にすることさへなかつたのであります。まして、昔の建築法では椽は拭ひ緣にするか、又は薄椽を敷いて置いて庇を深く出して置くのでありました。無論雨戸は建てますけれど硝子戸は用ひたことはありませぬ。

それを鳩山は考案しまして、椽の内側を障子にし、外側を硝子にして置くと、明るくもあれば埃も吹き込まないし、冬の時などは、これを閉めて中の障子をあけて置けばほか〳〵と日光が射し込んで氣持もよければ衛生上からもよいといふので、すつかりそれを用ひることに致しました。私共でこれを實行しますと、その他にもいろ〳〵利益な點がありまして、幼兒などは椽から外へ落ちる心配がないし、又たそこは子供の遊び場にもなるし、これまで使はなかつた場所を使ふわけになつて甚だ都合のよいことが解りました。兎に角これは鳩山の大手柄として今日でも多くの住宅がその利益を受けて居られることであります。

鳩山はその外にも、細かい部分に色々と新案を致しました。玄關の沓脫とか帽子掛とか、床と疊との間に殺蟲劑を振りかけるとか、或は子供のために特別な一室を造つてやるとかいふやうなことに、皆考へ及んで居たのであります、しかし、住宅改良で硝子障子を新工夫しましたのは、建築史上に記して置いてもよい程のことゝ思ひます。

□お臺所中心の私の家庭

醫學博士 入澤常子夫人 談

毎日住んでゐる家のことですから、決して無考へである譯ではありませんが、從來ある家にはいくら不滿足であつても、そう〳〵家は建て替へられるものでもありませんし、間取を工夫しますれば、これでも我慢が出來ることですから、特に斯んな家を建てゝ見やうなどゝ、細かしく案を立てたこともございませんが、他家さまへまゐりますと、小さくてもまことに住み心地のよささうな、「小ぢんまり」とでも言ふのでせう、本當に住んで見たく思はれるやうな家に

出くはすこともありますれば、大きくても廣くても、何だか陰氣臭いとか或は締りがないとかしまして、もう少しどうにかしたらばと思はれるやうな家もあります。これは余程、家を建てる人の考へ方が關係することゝ思ひます。家屋となりますと、衣服などゝは違ひまして、數萬圓數十萬圓も費すものであります、中流以下の詰らぬ家でも數千圓かけねば出來ないことでありますから、余程の建築道樂でゝもなければ、自分の住む家を幾度も建て替へるといふやうなことは出來るものではありません。それ故、家を新築する場合には、後々までものこと、數十年後になつても、左まで不都合を感じない程度の家を建てゝ置くことを忘れてはならないと思ひます、しかし私共では建てゝまだそう日も經ちませんし、今のところ新築についての考案などは少しもありません。

それよりも、私は、一家の中で最も大切な場所はお臺所であると思ひまして、こゝへは可成りの考へを費してゐるのであります。しかしこれも既に幾度もお話したことでお珍らしくもありません。たゞ、世間には、何故私があんなお臺所のことをやかましく言ふかとお思ひの方もありませうから私のお臺所に關する意見といふことでもありませんが、二つ三つお話致しませう。

人間に一番大切なものは衣食住であることは申すまでもありません。そしてそれ等三つは、當然家庭の仕事でありまして、主婦が中心になつて考へなくてはならないのでありますが、しかし住宅は大きいことであるだけに主婦の力では及ばぬことが多いのです。建築の圖案だの裝飾だのは言ふまでもないことですが、細々(こまごま)したことでも、主婦と住居とは余りこれまでは關係がなかつたものであります。しかしこれは甚だ面白くないことで、せめても、主婦と最も密接な關係のあるお臺所だけは、主婦がまう少し頭を用ひねばならないものと思ふのであります。そこで私共でも、新築する際には、可なりお臺所について私が喙(くちばし)を容れました。又さうするの

が主婦の責任であると思ひます。大工任せ、或は主人任せにして置いては、自分が城のやうに思つて立て籠つて、朝から晩まで働かなくてはならないお臺所の建築はいけないと思ひます。

それでは私共のお臺所はどんな工合になつてゐると申しますと、先づ床下を全部コンクリートで固めました。それも世間にあるコンクリートのお臺所は、コンクリートの儘になつて居まするので、その上へ陶器などを取り落しますと、皆破壊するばかりでなく、働く者も滑つたりなどして甚だ危險であります。それ故私共では上へ一面に厚い板を張りました。これも一部分コンクリートにして、一部分板張りになさるのもありますが、一帶に張つた方が便利でありますそして、地下のコンクリートと、板張との間はなるべく高くして置くことに心懸けました。私共のは四尺位もありませう。そして、その大部分は冷藏庫代用に使つてあります。酒類の如き光線を避けて、毎も同じ温度を保たせる必要のあるものから、野菜、魚類、肉類、生卵その他腐敗の虞のあるやうなものは皆部類分けにしてこゝに仕舞つてあります。地下室に冷藏庫の兼用と申してよろしいのでせう。無論その一部分には氷詰めにされる所も出來てゐます。

それからお流しは、最初は端の方へ置かうかと思ひましたが、手頃の高さにして、中央に置いた方が都合もよし、清潔を保つことも出來ると思ひまして、わざ〳〵中央に持つて行きました。そして料理臺をそれに接近させまして便利を圖つてあります。用水は凡て水道でありまして、普通のホースの外、長い護謨ホースを附けて、可なり遠いところへも達するやうにしてあります。

食器棚は、お臺所の隣の一室に設けまして、一々硝子戸の立つた棚にしてあります。それへ西洋風に立てかけて食器を入れてあります。日本風の棚は整理もしにくいし、清潔を保つ上にも都合が悪いし、感心されませんので一切用ひてありません。尙ほ私共のお臺所のやうに十坪以上もありますと、一所で凡ての用を辨じるや

うなことにはまゐりませんが、それは極めて必要なことであります。嘗て私が家庭博覽會に出品しました、一坪半のお臺所の雛形には、特に此の點に注意しまして、お流しの前に立つて居て、お竈の下へも、配膳棚へも、何から何まで手を達することの出來るやうに工夫して見ました。これからの忙しい、普通の家庭では、これならば殊更に考へて置かなくてはなりますまいそれから私共では、食堂が可なり大きくて、四十人以上のお客をするやうになつてゐますからお臺所と食堂との間に配膳室の設備がしてあります。一体日本のお臺所は、可なり大きく取つてあつても、この配膳室が別に設けてないところが多うございます。今後は家庭にも多くのお客をする場合には、これが必要になることゝ存じます。尚は言ひ洩らしましたが、臺所で最も大切なることは光線が上から明るく取れて居ることであります。俎や食器についてゐる微塵でも見逃さないやうに、明るくして置けば、甚だよろしいことゝ存じます。兎に角、一家の中で主婦に取つて最も責任のあるところはこのお臺所であると、各家庭でお心づきになられることを希望致します。

□西洋風にしかけた住宅の失敗

青山學院教授夫人　左近まつ子談

良人（たく）は二十餘年の間米國に居ましたし、私も三年許り米國（あちら）に居て、先年歸朝致しましたが、日本へ歸つて見るとやはり日本がなつかしく、日本でなくてはない美しい人情とか風俗とか、或は習慣と言つたやうなものがありますから、住むべき土地として、決して私は今まで日本を呪つたことなどはないのであります。

しかし、それと同時に、何人方（どなた）でも御感じに

なります通り、外國から日本へ歸つた當座は何んだか勝手が違ひまして、數年間暮しつゝけて來た外國風の生活をしたいやうな氣のするものであります。殊に私共は、生活上のこと、即ち衣食住などに關しては、どうも日本のは今日の世界の時勢に適せないところがあるやうに思はれましたので、全体ではありませんが、西洋風が進歩してゐるとか、或は便利だとかいふやうな點は、これを日本へ歸つたら採用しようと思つて居たのであります。

實は良人（たく）なり私なりは、その邊に可なりの大きい期待をして日本へ歸つてまゐりました。しかし歸つてこれを實行しようとなると、なか〳〵空想して居たやうには行くものでありません。例へば住居の如きでも、海の彼方で考へて居たことを、實際に行つて見ると、色々の障害がありまして、最初の計畫はどこへやら、今日ではまるで臺なしになつて、殆ど純粹の日本風の生活をするやうになつてしまひました。

即ち歸朝して間もなく、私共は現在の住宅、即ち青山の長者丸に家を建てました。何しろ費用の關係がありますから、到底立派な石材や煉瓦を用ひるとか、近頃流行の鐵筋コンクリートを應用するといふ風にして住宅の建築は出來ません。矢張り日本式に全部木材で、田舍の小學校を見るやうな、燐寸箱式の住居を拵へたわけであります。

さういふ假初の、安普請ではありますものゝ間取りやら、構造やら、調度の配置やらには、出來るだけコンフアタブルな、米國風を加味して行かうとの抱負は持つて居ました。殊に、從來の日本家屋の疊敷を全部廢しまして、居室も書齋も應接室も寢室も凡て床板張にして、その上へ安い絨氈などを敷き詰めたのであります。米國から歸つた當座は、どうにか斯うにかそれで間に合せてゐました。無論私共はそこで西洋風に麵麭を食べて、洋服を着ることを實行しようとしたのであります。

ところがそれは、殆ど全く失敗に終りました申すまでもなく、吾々は最初の抱負があります

から、多少の不便や苦痛を忍んでも、それをやり遂げやうと思つたのでありますが、一方の端から一つ崩れ二つ崩れ、二三年經つ間に、西洋風の生活の大半はどこへやら吹きとばされてしまつたのであります。もう歸朝後十年も經つ今日では、殆ど跡方もない有樣で、洋服も着れば和服も着るといふ始末になつてしまつたのであります。

第一に崩れ立つた著しい例は、食物であります。私共は麵麭主食主義を立てようとしましたが、情けないことには日本には米國のやうな上等の麵麭がありません。麥粉に變りはないのでせうが、どうも焼き方がうまくないのでせう、東京市内一流の麵麭屋のといふやうなのでも、どうも米國で食べた半分の味も致しません。その上になか〳〵お安くないのです。と言つて自分で毎日焼く譯にもまゐりません。どう〳〵、食物は日本風になつてしまひましたが、それでも私共は今に普通の日本食は食べてゐません。私共ではもう數年前から玄米飯を常食してゐますが、これはなか〳〵よろしうございます。言はゞ、和洋の折衷といふことになるのでございませう。

それと同じやうに、純粋の西洋風の住居は、日本の道路が惡くて靴穿きで居られないことから崩れました。例へば應接室を靴で上れるやうにして置きましても、あのぬかるみのひどい道路を、雨降りの中などでお出でになつたお客樣に土足——靴の儘で上られて御覽なさい、室内はめちや〳〵になるではありませんか。私共では今に良人も子供達も、お天氣の惡い時には洋服に靴穿きで電車通りを平氣で歩いてゐますが日本の道路に靴は絶對に禁物です、それ故靴がはけないとすると、室内に疊を敷かないで置くことは無意味にあるわけであります。

それから又、寢室の如きも最初は普通の寢臺にして置きましたけれど、空氣や天候の關係から、それも餘り面白くありません。それでも私共夫妻は、今に折疊式のベツドを用ひて居ますけれど、子供達にはすつかり日本風の布團に寢

かせることにさせてしまひました。これでもう應接室と寢室と、最も西洋臭くしてもよささうなところが崩れて、今は共に疊になつてしまひました。次に食堂でありますがこれも西洋流にナイフとスプーンで食べるならテーブルも調和致しますが、お茶碗やお箸をテーブルの上に並べるのは、餘り調和するものでないばかりでなく、實際上の不便も少なくありませんので、これ等も只今では全然日本式の食堂になりました

こんな次第で、現在では建物の恰好とが、硝子の扉とか、さういふ所に僅に當初の俤を殘してゐるばかりで、十年前のハイカラの意氣込みはすつかり失せてしまつたのであります。これは一方から見ると私共の理想が失敗したことになりませうが、一方から言へば、日本は氣候風土習慣等もこれに適しませねば、周圍の狀態がこれに伴はないからであると思はれます。

しかし、慥に西洋風にやつた方が、凡ての點で進歩してゐるといふ考は今もありまして、經濟上の事情も許し、周圍も進んで來ましたらば全然米國その他の西洋風とは行かないまでも、簡易生活を主とした、もつと違つた生活の形式を取りたいと思つてゐます。しかし今日のところでは、何だか譯の分らない、簡易生活をしてゐるに止まります。

□唐人の繪□

和人の畫ける唐人の繪は、能く似るといへども、それ〳〵の裝束を取り拂ひ見るに、終に和人なり。唐人の畫ける唐人の繪は裸にし見れども、正しくもとの唐人なり。人の貴賤虛實を見るに、昔かくありやせんと、恥かしき事に侍るなり。

（それ〳〵草）



亞米利加の田園住宅（續）

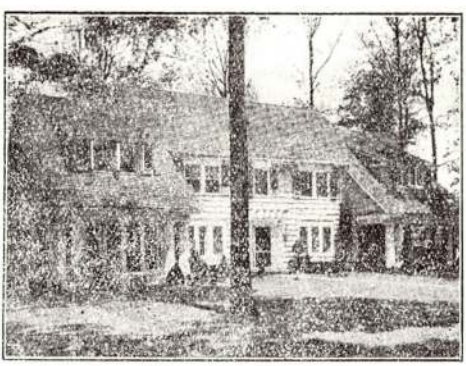
〔アーキテクチユラルレコード（十月號）エー、デー、ハミン氏記載（所載）〕

會員　谷本多喜治　譯

三

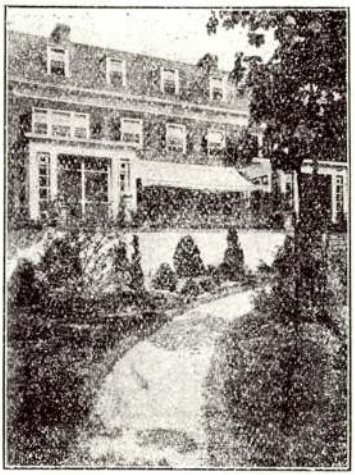
樣式の問題は、私の此の粗雜な田園住宅の論文でさへも、まだ餘地が充分ある、吾々の田園建築に現はれた樣式の歷史的發達の徑路は既に簡單に述べておいた。歷史の上に於て又吾國民との色々の關係に於て、歐風の影響は此種建築にも明瞭に現はれてゐる、そして多くは英國から其源を發して居るのを見る、伊太利風の田莊は亦頗る多くの代表的住宅がある、殊に太平洋岸には氣候や風土などが（特に南部カリフォルニヤ地方の如きは）、伊太利と甚だ似て居るから、茲に擧げたものゝ中にも、一寸驚かされるのがある、然しながら此等の大きな邸宅や庭園がたとへ伊太利風を喜んで用ひられて居ても、全く卑屈な模法を敢にてしたものゝない事は明である。

コロニアル式のものは、亞米利加田園住宅のうちで、他のものより一番國民的樣式に近い。最近に流行された此式は大型の住宅に發達をして居るが、よくある十八世紀時代のものより建築的に餘程立効を遂げてゐる。エイマー、エンブリー氏は「現時の亞米利加田園住宅」の最新の面白い年輯に於て現時のコロニアル式建築が總体に舊時のものより善いといふ意見を發表されてゐる。これは本當に相違ないと思ふ・蓋し總ての點について近頃の設計者は十八世期時代の人より、多大なる便宜を得て道具、書籍或は材



第一圖

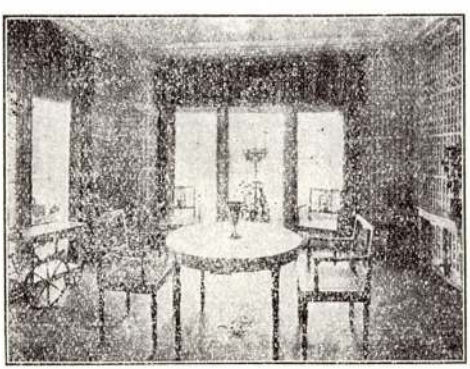
料に於て不自由がないのである。然るに近代の仕事は常に必ず古代のものより間違なく優れて居るだろうか。此の疑問の答は各樣式の根本則ち一つの自覺的復活に在るといふ點迄到らねばならない、十八世紀のコロニアル式は當時の趣味、觀念及傳說の自然的で自發的表現である。從つて眞實に他の活氣ある樣式と同樣に發達を遂げてゐる。同し問題は幾度も幾度も同じ樣な方法で繰り返された。同し繰形や腰羽目や、螺狀の高欄などは



第二圖

形を變へないで幾度も用ひられた。其結果の單純さには又何ともいへぬ妙所が多いが、又當時の生活と趣味の素撲さを回想せしめるのである。書物は少なかつたためでもあろうが同じ樣な紋樣は可なりに廣い範圍と長い期間に行れて居た。

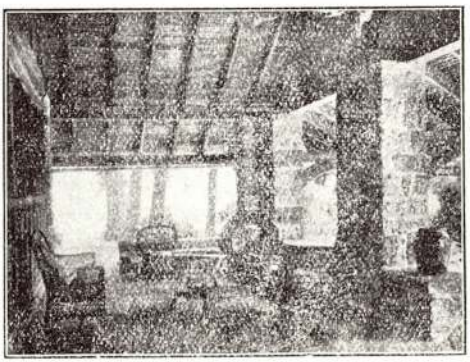
最近の復活派の人々は彼等に對比すると又異なつた且つ尙困難な事情に在る。先づ第一に此樣式を敎はらなければならない幾多の圖書や實測に依らなければならない。此等の人々はコロニアル式住宅の大工と同樣に其家で生れたのでもなければ、又育てられたのでもない。それに新しい人々は最近の諸問題を應酬しなければならぬしかもそれは十八世紀時代よりも一層復雜になつて居る。且つ應用といふことが實行上最も困難である。兎も角其昔の精神と味とを失はないで、應用の型も遠い範圍も廣い近代の事情に適應せしめんとするには、最も高級な技能と、最も高尙な趣味とが必要である。誰しも圖書によつて古い例の詳細圖を模倣することは出來るが結局乾燥無味な結果に陷つてしまふのである。之に反して一つの住宅を設計するにしても古い型に多少の變化を與へて、しかも十八世紀時代の妙所を失はぬ樣でなければならない。「型は壞れても、精神を失はぬ」といふ事は彫刻に於ける眞理であつて建築に於ても同樣である。是れ常識と技能の大切な所以であつて、一九一六年の本誌十月號の「時事評論」に載せてある或新進建築家の一文を想起する



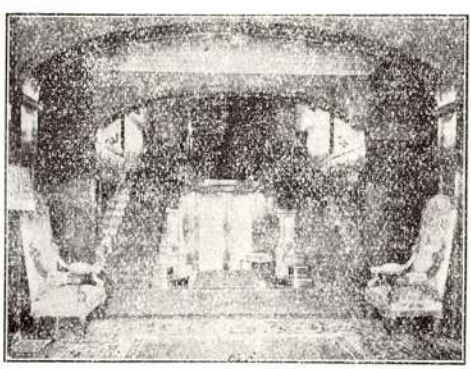
第三圖

を禁ずることが出來ない。

「過去と現在との間に常に微妙なる働をなす技能」は茲に土臺として据ゑられるが、中々成効しないのみならず二十年前よりも振はない樣である。設計の單純と素直とそれから古を溫ねて新を知る底の同情を保つ意匠は說明圖中の最良な作品に發見さるゝであろう。恐らく建築家に與へられる最も困難な仕事は、大きな田園住宅の設計に此のコロニアル式の簡素を保存せんとするに在ると思ふ大さと價格の增大するに連れて稍もすると威嚴と壯嚴とが付き纏つて來る。從つて眞のコロニアル式の妙味が消散するの厭がある。斯樣な問題からして羅馬復古式に近い「ショウジアン」式の後期の作品に倣ふか又全く伊太利風にしてしまふ方が得策である。畢竟種々の樣式の選擇や、古式に則るいふ事よりより設計の要旨は善い住宅を得るの秘法を發見するに在る例べに良い詩を作るに、あれこれと古格に則らんとするよりも。正確な韻律なりや否やを吟味するが同樣である。如何なる樣式をやるにしても、豐富な想像と善良な趣味に據るの外はなく、又據らなければなるまい。簡素と味い割合とが何うしても根本である。が中々易くは成就し難い。乍然此の見地から仔細に觀れば吾住宅建築は最近十年間に於て東西共に進歩を遂げてゐる。其進歩はサー・トーマス・ジャクソン氏の樣な英國批評家が本誌の實例を見て充分に稱贊し注意したのを見ても了解出來る。然し、缺點を擧げて見れば一八九一—一八九二年期の住宅設計家が、雅致と獨創とを得んとして陷つた無駄な努力が如何にも惜しいと思ふ。此短所は又樣式は如何にもせよ、本誌本號に掲げた總ての良住宅の持長にも明かに認められる。そしてそれは總ての若い建築家には大なる刺擊を與ふべき馴練の一であるからして、例の多い程却つて一々拘束を與へるよりも、効果が擧る譯である、最近の住宅設計の二三特種の型は記載に値

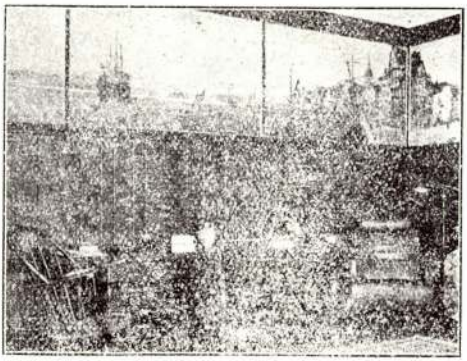


第四圖



第五圖

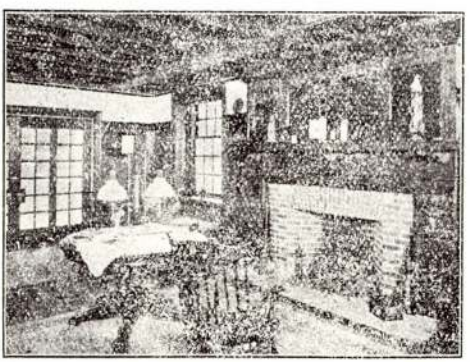
する、これは小窶と呼ばれてゐる樣であるが、又木舘の軸と直角方面に張出して居るのもある。スキンカー氏宅（前々號第七圖參照）や、リツピンコツト氏宅（第一圖）や、ワイダー氏邸（第二圖）等がそれである。此等の突出部は主に客間だの光室（サンルーム）其他の實用上の目的と又寸法と外觀の美的要素を整へる爲に設けられる。又窓のない壁の部分もコロニアル式や雅味のある型には屢々重要視ざるゝことに注意しなければならぬ、此の例は中央西部や太平洋岸には少ない樣である。（一九一五年の十月號を見るべし）。又古流の出樑に打開いたテレースや、庇の深いサンルームを設けた例については前に一寸說べておいた。挿圖の第三圖第四圖等には此等の多少變つた例を擧げておいた、近年外部裝飾として用ひられた、窓の格子（トレリス）は室内へも應用する樣になつた、第三圖の光室（サンルーム）の如きは其好例で此種の打開いた朝食室は第三圖の樣に室内として適當に取扱はれたものであらう。



第六圖

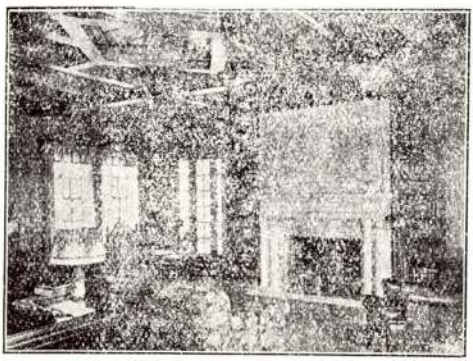
窓についても一言をしておかればならぬものがある、窓は單に其形や數ばかりでなく、其硝子や格子の割り方によつて外觀に重要な影響を與へるものである。南北戰爭時代の腰折屋根の住宅には、出來る丈大きなプレート、グラスを用ひて此上もなく美しいものとした。しかし、コロニアル式の家の窓樟子は小割の面白味を語つて居る、或場合には海陸の風光の關係から、大きな板の方がよろしい例へば第十二圖のラーチモントの居間の如きが夫れである。佛國式の窓（出入口兼用）は出樑や段階に打開く場合に稀に用ひられてゐる又英國式の格窓はあまり用ひられてない。其主な理由は雨や風の吹き込み易いからと又調子の狂つたとき開けにくいのと今一つは窓の上下を通風のために開けておく樣なことが出來ない爲である。

四



第七圖

近時の田園住宅の内部意匠は出來る丈變化のあることを要求されてゐる。私は興味ある階段室廣間の寫眞を大分に集めた、躍場のあるもの又ないもの色々掲けておいた、コロニアル式の多くは殆んど廣々として風通しよく應接にも都合よく出來てゐる、此の廣間の亞米利加にての要求は廣いのと風通しのよい事を特に好んでゐることは明かである吾々は客の接待を家族と同樣にする風がある。「茲は吾々の家の日常の居間であるから出來る丈廣い方がよい」寒い日には各扉を閉ぢ込むが、夏季は田園生活の季節（シーズン）である、從つて充分風通しよくして悠々起居することを望んでゐる。



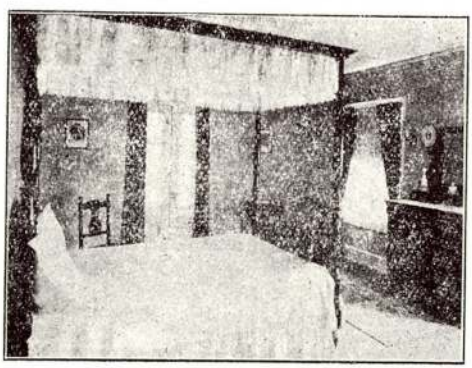
第八圖

內部意匠に木材を適當に使用した例は插圖（第五圖―第八圖）に擧げておいた、木材は私は前述した樣に我國の最も特有の建築材料であつて、効果に大に變化を與へるものである。其自然の色或は塗料を用ひて、室內を派手に、又暖か味も保たしめて又休息を與へることが出來る。第六圖の例は簡單に妙味を示してゐるし、第八圖はチユードル式の裝飾で頗る華麗になつてゐる、コロニアル式のものは、單純に白く塗つてゐるが、古を偲ふ壯重の感と素樸の妙味を發揮してゐる。

タイルや大理石を階段室や玄關や光室（サンルーム）、朝食堂、段級（デレース）に用ふることが大分に流行して來た、これは室や廣間に涼しい感じを與へる。そして此等の耐力は床材として少くとも木材を凌ぐ第一の利益を保つて居る殊に家に在つて床の最も損づる部分に於て有効な結果を齎らして居る

五

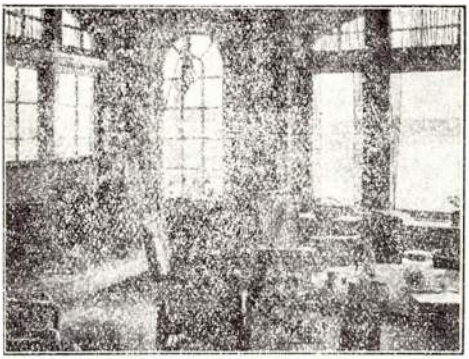
吾々の田園住宅の庭園も亦進歩の跡が見られる、それは主として折衷主義の行き方である。英國や佛國や伊太利及日本風等の庭園の暗示を受けて、吾國の園藝家は住宅と同じ樣に盛んに各國の風を取り入れて居るし又融合を計つたものもある、今日では老熟家によつて意匠され庭園並びに周圍の調和を考へんで



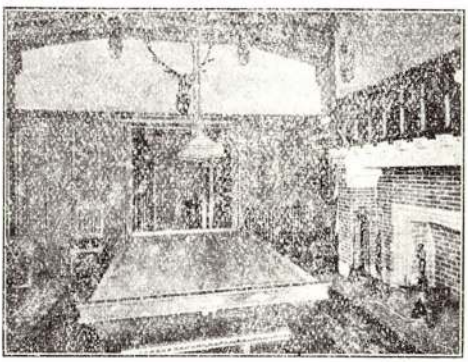
第九圖

建てられた住宅は一つもない。此の發達は各國に於けると同樣で吾國にて最近の事である。本文の最初に述べたフランシス・ベーコン氏の言に立返つて見ると、彼の論文には斯うある。

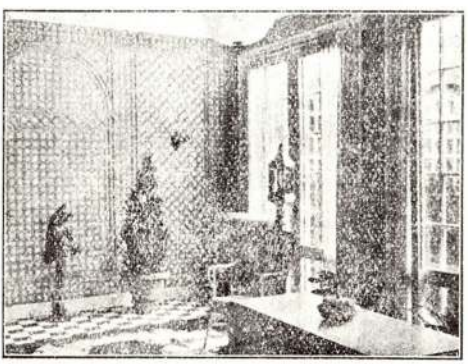
「庭園に關しては、誰しも氣の付く事であるが、文明の進んで來た各國民は最初は庭園を美麗にするよりは、むしろ壯麗にしたがるものである」（私は記憶によつて書いたので正確ではない）然し庭園に在つても、室内に在つても、又は外部の形型の變化にあつても、色々の原因から發達しつゝあると私は信じて居る。尚又各住宅の建築にして徹底的なる獨創的なる亞米利加人の造つたものは、其外裝が何うあつても全般を通じて國民性を發揮し、美的妙味を發揚しつゝあるものと信じてゐる。此數年來本誌の田園住宅號を通覽してゐる人々は誰しも其美と其建築の適切なる點に眞實なる點に大なる印象を與へられぬものはあるまい。富が普遍的分布せられつゝあるのみならず趣味の着實なる向上に失敗して居らない。だが兎に角も吾國の田園住宅が世界に於て最も容易（コンフォテーブル）で最も便利（コンビニエンス）であることを否定する方々のある筈はないと思ふ。（完）



第十圖



第十一圖



第十二圖

× × × × ×



建築の職業と其技術に就て

會員　日高胖抄譯

此一編は「トーマス、ピー、パーチット」氏が米國「セントルイス」の美術協會に於て口演せられたるものにして現今我建築界多忙の秋に當り大に參考ともなり警鐘ともなるべきにより此所に譯して登載する事とせり。

現今に於ては總てのものを其商賣的價値のみに依て判斷する傾向がある現時の世界大戰も其源を商賣即交易に發すると云ふ說をなす者もある位であるが之は勿論人類の自由社會博愛主義の追行のためにせられつゝある事は明白である。

社會に建築家の存在が必要なるものと假定し又世人が何時か一度は經濟上又は技術上の立場より建築に關係する必要起るものと假定すれば建築の職業に就て論ずることは强ち不必要のことでもないと思ふ加之此の問題に付ては世人は必ず個人として想像以上の興味を持たるゝことゝ信ずる。

若しも建築の設計並に施工に對してより以上の注意が拂はれたものとすれば市の外觀は勿論其繁榮愚安の點に於て現在より以上の效果を納め得られたことは確實である。

古代建築物の現存するものより考へても吾人は歷史家に依て記載せられたるより以上に當代人種の性質及生活狀態を窺ひ知ることが出來る「エジプト」「ギリシャ」及「ローマ」の歷史は其當時の建造物にして現存するものにより吾人に傳へられ又は探古家の古代藝術に付ての研究により明白となりたるものに外ならない然らば吾人が後世に殘す作物は一國の歷史を形成するに如

斯必要なる一つの要素であることを思へば建築術なるものは一層深くして廣汎なる研究の必要あるものと信ず。

現代米國に於る建築は藝術的に進歩の跡を認め得るや否や大に疑を存せざるを得ない何となれば近來築造せらるゝ種々の建造物は建築家に依て設計せられたものゝみではなく多數は投機者の手により營利的に築造せられた者である是等の寄生者が法律上の制裁なく反つて社會の安寧秩序を傷害するとは遺憾の至である是全く米國人一般の金錢に對する欲望の急なるが爲で其不道徳なる有樣を遺憾なく曝露するものである若此まゝに經過すれば吾人の自由を根本的に轉覆するの結果を透導するやも計られないと思ふ。

斯の如き技巧と安寧の何れをも欠ける愚劣な建造物の連鎖は現代の愚昧にして野卑なることを表明するもので子孫に對して其表白を避るの道がないと思ふ是は吾國は多數の異りたる種族の集合であつて目下は其融和進歩の過渡期にあるが爲かとも考ふ。

以上の如く建築事業の大半が他の者に依て侵害せられつゝある事を思へば吾人は少くとも其惡弊を正す義務がある而して此目的を達する近路は法律を制定して或種の試驗に及第したるものにあらざる限り建築家たることを得ざらしむるのである然る時は有爲の建築家の數を增大する道を開き進で一般に社會の安寧秩序を保つ事が出來ると思ふ目下「イリノイス」洲の建築學會は此種の問題に付大改良を施し尚進で一般建築界の保護並に社會の秩序恢復に付熱心に研究中である。

或る種の誤解者には建築家は寶物の如く考へられて居る然し實際は社會の用務の爲に存在し必要にして欠く可からざる事は言をまたなふいのである。

建築家を使用し注文者と建築家とは同心一体となつて工事に從事すれば必其工事は經濟的並に技術的の方面に對して成功を納め得ることゝ信ずる此注文者と建築家との親密なる關係が即偉大なる結果を獲得し得る所で注文者は此場合に

は或る意味に於て協同建築家たるのである。相當の建築家の事務所には普通の場合構造、美術、裝飾、衛生、機械及經濟的各方面並に工事實施監督の方面等あらゆる必要なる機關を網羅しあるを以て建築上起る各種問題の解決に付ては世人は科學的並に各種專門的の智識により裨益せらるること頗る多いのである如斯機關の利用は社會に大なる利益を與ふるものと自分は確信するが諸君は如何に考へらるゝか。

數年前より單に營利を目的とする會社が澤山に出來て眞の建築業者に危害を加へ返て多くの豺狼の如き投機者集合の建築會社を有名にせし事は諸君も承知せらるゝ事と思ふ是等建築會社の株主は實業家と自稱し利益として總經費の一割を定限して居れども如斯會社は注文者に對して決して利益を與へたことはない是等の會社の首腦者は建築に關する智識あるものは殆どなく其目的は單に金錢上の利益のみにあるのであつて會社の支配人とも稱すべき者は其數に於て二三十名の多きに達する場合もある故に此の多くの不生產的株主に利益を分配するには餘程多くの利益を得なければ存立し得られぬ譯で從て注文者に不利なることは明白である。

近時「セントルイス」の或工事の入札に於て上述の如き會社の請負金額は他の單獨の請負人見積に比し五割も高價なりしことがある故に建築に對する投資家は建築費の競爭入札の場合には其範圍を廣くし且營利的の問題にのみ制限せられて居らぬ建築的援助を得ること最も賢きやり方であると思ふ尤是は極めて小數の場合にのみ其目的を達し得るのである。

勿論建築家は現場實施の場合にも最大權利者であつて彼の腦と腕とに依て建築が完成するのである而して其建物の平面圖を始めとして現場施工上必要なる事項は總て建築家の事務所より供給を受けなければならない故に建物信托會社等にて建築を實施せしむる場合は會社の利益上の關係から建築家が是に關與することを好まぬ。若投資家が先見の明あり且其見界が大なれば建築家は必ず大なる保助を投資家に與ふるもので

ある彼は必要にして利益のある場合には建築をなすことを勸めるが不利益と考ふる場合には其進行を中止せしむる場合もある近視的投機者と雖ども上述の如き輔助により利益を現實にし得る腦力を建築家が有することを知つたならば建築家を使用することは商賣上利益あることを始めて氣付くことゝ思ふ。

今此所に一例を擧げれば或投機會社の設計に依る建物の平面圖の調査を或る建築家の事務所に依頼したことである其時建築家は詳細に取調べたる結果室の配置を少しく變更すれば便利にもなり光線も以前より餘程多く入る樣にもなり建坪も減少し建物の立方積は二割五歩以上小となり從て經費を節約し從て同一の利益を得ることが出來たと云ふ語を變へて言へば建築材料の節約により得たる代價を以て建築家の手數料を數倍多く拂ふ共尚且剩餘を生ずることとなり便利衛生的にして外觀の好きものが得らるゝ譯となる・のである又最近に建築せられたる一大旅館の室の配置惡きと土地の利用法惡きため一年に五萬弗の損失を生じつゝありと云ふ是等は敏腕なる建築家の必要を認めらるべき一二の例である。

世人の多數は早晩自身の住宅其他に付て建築に關係する場合必ず起るものである故に世人は建築家のする仕事の價値を知り置く必要があると思ふ夫故に建築術の智識の大要を習得せしむる爲には中學程度の學校に於て相當の科目を設ける必要が起ると思ふ或は反對者もあるかも知れぬが自分は市中に軒を併ぶる多くの建築物の半數以上は技術的並に經濟的價値に欠たるのを見るは全く一般市民が建築に對する眞の智識を有せざる爲であることを疑はないのである。

良き建築の眞髓は構造物を裝飾するのであつて裝飾物を構造するのではない平凡を理想化すること實用的物件を形、色、其他の設計の美に依て着衣せしむる事が即技術其物が目を樂ましめ腦を滿足せしめ想像を現實せしむる以所であつて周圍の美に依て感ずる愉快は想像の及ぶ所ではない。

建築の美的方面を主題として考ふるに「グリー

ス」及「ローマ」は其美術あるが爲に其征服者の名の忘れられたる今日迄吾人の記憶に存じて居るのである彼等人民は多年の戰爭により殺生狼藉を極めた後恰も先天的であるかの如く人類の最も劣等な本質の恐怖から免れん爲に飜然として美の新なる紀元を創造する爲方面を變へたのである「アルハンブラ」の大殿堂は「スペイン」の戰勝後に「ムーア」人に依り建造せられ「ローマ」の各種大建築は其戰勝の戰士が猶出征中に建造せられたのである「グリース」では其美術的發達の黄金時代には國民全部が其批評家であつた歐洲では美術的智識は殆平等と云ふも差支なき程度に一般に發達し富者賢者のみに限らず下賤なる農民に至る迄相當の智識を持て居たのである「イタリー」湖畔の漁家配景の美は美術の寶庫である「ヴイラシャーロット」の美に何等の遜色なくも「チープルス」の捻曲くりたる市街も其高みよりの展望も又は「ポンペイ」の發堀により發見せられたる驚くべき遺物も總て伊太利人が美に對する先天的嗜好及物の適應に對して直覺的智識を有する証據であつて伊太利人に取ては吾人が恰も空氣を呼吸するが如く最も自然的なのである如斯性行は人民の生活狀態に大なる影響を及し彼等は働きながら愉快に歌を歌ひ得るのであつて米國人の如く幸福を得るは蓄財にありと云ふが如き不愉快なる觀念より全然免れたのである。

國民の偉大なる事は其美術家を尊重する程度即美の創造者に對する尊敬の念の大小により判斷する事が出來る。

なぜ米國が美術的思想に於て退歩したかは説明に苦む所である而して勿論我國の建築家並に人民の古き作物に依て批判するとも出來ない此國の祖先が「プリマウス」に上陸し「メイン」及「マサチューセット」州に植民した當時には其生活の勇猛にして剛健なる美性を表現する簡單なる嗜好を以て住宅學校集會所等を建築した是等の建築物中には技術上全く無趣味のもの多けれども其率直にして男性的なる點は大に賞賛せざるを得ないのである。

「ニユーヨーク」州の「ヲランダ」の植民地「マサチユーセツト」州「サーレム」の有名なる古代の家屋就中「サークリストフアーレン」の設計に成るもの「ニユーヨーク」舊市廳舍並に「ワシントン」の議事堂及「ホワイトハウス」並に「バージニア」州「ニユーオルリエンス」の植民時代の作物（是等の内には佛國式の極端なる細部の手法の感得を見出す）と現代の米國内建築物とを比較すれば米國の美術的思想はどうなつたかを驚かざるを得ない尤も現代の建築物中總ての方面より見て優秀であると考へらるべきものは其數可なり多きも劣等なるもの丶數に比較すれば極て少數である此欠点は第一に建築家のみの罪に歸することは出來ない如何となれば建築家は注文者の爲に不適當なる材料其他を餘儀なく使用せしめらるゝ場合もあり又は注文者が建築家の利用法を誤た場合もある例へば彼が手數料を得る爲めには不適當と知りつゝも練鐵の代りに鑄鐵を使用することを餘儀なくせられ又は最大限百呎の正面を有する雜草の繁茂する平地を與へられ何等の背景もなく庭園となすべき適當の場所もなき所に「ホーム」を作ることを命せられ或又は一方に「ゴート」式他方に「ビザンテイン」式建築物ある中間に「ルネツサンス」式の殿堂を建ることを命せらるゝ場合もある仮令其殿堂は如何に美なるも様式の混合は威嚴と安泰とを欠き寧ろ四五十年前の長家建築にして技術上何等の考慮を廻らさゞりし建物の方技術上の見地より見れば遙に勝れることは明白である。

大体我國の建築様式の種々雜多なるは我國民は數種の人種の集合であるに起因するものと考ふ故に此の様式の亂雜を防ぐ爲には「ロシヤ」人は或區域に「トルコ」人は又他の區域と云ふが如く人種により區劃を定め其住居を定限せば其亂雜を防ぐ一法となるかと思ふ。

建築の職業に付て其改良法に有望なる發案があればある程設計上の問題に於ては猶一層其改良に付て熱心なる努力の必要がある。

近時東方に於ける製造工業的商事會社は有力なる建築家に依頼して其工場全部の設計のみなら

す其周圍の市街の設計をも同時に計劃せしむることとした而して其各種建物は總て同一の手法を以て設計せられ余は其成功の曉には結果は總ての点に於て良好なることを疑はない又各都市の市區改正の事業も近來最も眞面目に研究せられ各所の大學の建築物等も其配置其他に付て最初より考究せられつゝあるのは大に賀すべきことである吾人は直に千福年を現出することは出來ず其多少に不關總てをよりよき狀態に導くことが熱心に唱導せらるのは感謝の至である。

現時の建築家の作物の多數は建築家が只其一部を進行することを許さるゝにより其全体を毀損せらるゝ場合が多い此事實は殊に住宅建築の場合に多いので注文者は建築家が其外廓を構造せば內部の裝飾等は建築家を勞せずして裝飾師に依賴する方便利と考ふるに依る爲である是は其建築の特色を減殺し注文者と建築家との共同意見により始めて成功すべき愉快なる特徵を消滅するものである而して其結果たるや良好なる嗜好と注文者の金錢とを犧牲とし過剩なる裝飾を施し室內をして雜貨店の店頭化せしむるのである一般に建築物は其注文者と其設計者との性格を表現するものである余は「セントルイス」の郊外にある住宅で注文者と建築家が共同して理想の現實に努力せし一例を知る此建築物は敷地內より集收せられたる石材を以て構成し且其基礎に使用せるものも敷地內より切出されたる石材である建物が完成の後其結果は注文者と設計者との理想通り住宅として少も欠点なきものが出來上た而して其外觀は實によく其周圍の配景に調和し全く其地盤より生へ出でたるかの如き觀を呈した。

建築家は技術上の價値を世人に認めしめんと欲せば研究と勉強とにより建築上の總ての問題を誤なく解決し得る能力を持たなければならぬ「ペルッチ」「ミケールエンジエロー」「レオナルド、ダ、ビンチ」「ラフアエール」等の復興式時代の有名なる建築家は同時に彫刻家でもあり畫家でもあり又場合により詩人であり音樂家であつたのである彼等の美術的敎育は總合的で智識を

圓熱し其判斷をして過誤なからしむる爲には上述の總てを使用したのである。

古代より色彩は建築の最必要なる一部とせられた故に建築家は色彩の處法にも充分の智識を有せざれば現代の優秀なる建築物を成工せしむることは出來ない且又現代の建築上の問題に付ても古代の技術的手法を參考とする必要も起るにより此方面に付ての研究も大なる努力を要することは明瞭である。

現今我國の優秀なる建築物の多くは建築家諸君が歐洲を旅行し彼地の著名なる建築物を研究し其長所を採て是を應用したるに負ふ所極めて大である伊太利に於ては「ボツテイセリー」「バラディオ」又は「ポールヴエロニース」の作佛國にては「フランソア」一世「ルイ」十四、十五世等の樣式は吾人の採て參考となし得らるべきもので殊に後者は我國現代の室內建築裝飾の手法の基礎なるにより其研究は多大の價値あるもので我國技術の進歩の上には大なる感化を與ふるものと思ふ。

以上述べたる事實等より考ふれば藝術の黃金時代を再生せしむることは決して不可能ではない吾人は其目的の遂行の爲には出來得る限り大なる努力をなす必要あると思ふ而して吾人の作物中には幾分なり共吾人の夢想を植附しめよ如何となれば世界の中に最も永遠に殘存し得るものは藝術である。（完）

▲學校裝飾協會▼

近頃北米諸邦に於ては「學校裝飾協會」なるもの組織せられて來た。其目的とする處は學校の庭園に花樹を寄贈したり教室を美裝すべき敎化的繪畵を募るにある。市俄古に在る同協會では現に小學校に貸與すべき二十九種の名畵を有し。クリブランドの協會には學校兒童に對して一莖半片の花種十二萬莖を賣り盡したいふことである。そして此等の協會が庶民社會に貢獻せん爲めに起つた主な原因はラスキンの理想に胚胎してゐるのである（井上氏著救濟制度要義）



京都古建築觀 (一)

特別賛助員　伊藤清造

第一章　緒論
第二章　各論
(一)平等院　(二)宇治上神社　(三)法界寺　(四)醍醐寺　(五)三寶院　(六)海住山寺　(七)淨瑠璃寺　(八)寶塔寺　(九)東福寺
(一〇)萬福寺　(一一)蓮華王院　(一二)豐國神社　(一三)六波羅密寺　(一四)法觀寺　(一五)高臺寺　(一六)愛宕念佛寺　(一七)知恩院　(一八)
西本願寺　(一九)教王護國寺　(二〇)廣隆寺　(二一)大德寺　(二二)鹿苑寺　(二三)南禪寺　(二四)吉田神社　(二五)往生極樂院
第三章　結論

緒言

(一)

仰いでは紫に霞むと謳はれた方々の峰頭を眺め、伏しては玉を流したと讃へられた加茂の清流を見つめ、朝に暾光の輝きたるを拜し、夕に落暈の沈々たるを望む京都に、千古に美の令名を擅にした具象美の數々を殘したのは決して偶然の數ではない。

その昔、風光眺媚の希臘の土地にイクチノスやフイデイアスの生れたのと何等選ぶ所がないではないか、自然の風光に寧ろ親しみ馴れて居た美鄕の人達が人爲美觀に層一層の力を致したことは東西の史乘に昭々乎として傳へられて居る。

茨薄茫々として孤聲寂しき宇陀の郊原も、一度四神相應の地となされては、終ひに桓武帝の御代奈良の絢爛した模倣藝術は移植されて、漸

く獨特の精神に同化し始めたのであつた。

支那の直寫といふことに可成り忠實であり、且つ可成り盛んであつた奈良朝思想の反動は、こゝにはからずも國學の勃興となり、和魂漢材の主張は終ひに遣唐使の廢止となり、平安朝四百年を通じて空前の沈靜な優美な時代を釀成したのであつた、加ふるに平安朝初期に唐から輸入せられた密敎は、その一種の哲學的神秘觀を思想の上に影響させて、益々消極的な時代を作つたのであつた、かくて藤原期の藝術は物優しき女性的な氣分の中に峻嚴な表現を以て人に迫るのである。

然しこういふ狀態は歷史の當然の歸結として永く存在を許さるべきではない、終ひに藤末の文化は糜爛し、人心は飽和し平氏の全盛さへも落ちつかぬものとなつて、こゝに新らしい或物を渴仰したのである。

賴朝が一度旗を石橋山邊に揚ぐるや、天下の人心期せずしてこれに集注し、一擧海內を掌中に收めたのは彼の非凡の力に依るとはいへ時代の歸趨すべき當然の結果であつて、かくて政治の中心は一度京都を去つて鎌倉に移つたとは言へ、尙文化の中心は依然として動かなかつた、如何に殺伐たる氣分が關東に漲つてをつたとて可成り古い歷史を保つた京都の文物が、急にその武斷的傾向に入るものではない、京畿に殘された鎌倉期の遺物は此の間の消息をよく語つてゐる。

源氏亡び北條氏起るに及んで。天下は漸く混亂の巷と化し、主上を離島に移し奉つて不忠となさず、子は親を殺して不孝となさず、南北朝の亂闘は次ぎの足利戰國の世と共に、天下を擾亂の上に擾亂した、而し是か非か美術は兎も角も、この埒外に超然として所謂東山美術となり豐公の天下を掌握するや、彼の成金的急造藝術を大成して、德川期の墮落の因をなしたのである。

嗚呼、世々代々、榮ねては亡び、亡びては、榮ねて、幾百年前の小川も後の山も、榮枯盛衰の活きたる形見である、宇治の平等院に藤代の

榮華を稱へ、去つて橋畔にさすらへば當年高綱先陣の跡を偲ばざるを得ない、人は去り年は移りタイムの流れは刻々として再來することはないが、世々人事の跡を語る千年の具象美は、最も雄辯に最も有効に彼等の歷史を語つてゐるではないか。

これを遺物本位物的本位としては、一卷の美術史となり、これを思想本位心的本位としては一編の文明史たる京都千年の具象美の種々を、吾人は最も詩的に、最も美的に、羅列して彼等忠臣孝子さては奸雄佞臣の跡を弔つて見よう。

（二）

建築物批判といふことに關する標準となり軌範となる處のものは種々あらう、美學に通常說く所の形式、材料、內容の三方面からも見られよう、眞善美の方面からも見られよう、又外から觀た感じ內から觀た感じさては何々何々と、美學者や批判家は種々なる見方を論じてゐる、吾人は勿論是等の標準に依つて、我が京都の古建築を觀て行く心算ではあるが、此に吾人の立脚地に關して一言闡明しなければならない事項がある。

一体美學の體系には、その方法論上の見地から主觀主義と、客觀主義の二つが重きをなして居る、美學といつた漠然たる概念でなくて、こゝには特に藝術學といふべきが、至當かも知れないが、その學問に於いて論議せられて居る所謂主觀論は、極端に言へば唯心論的懷疑說であるといふ誹りを、到底免れることは出來ないと同樣に、客觀論が說明するところの藝術は唯物論的であることは、爭ふことが出來ない、今暫く客觀論者の說く所を聞いて見ると、彼等は的確な科學の見地から生理作用の一科として、美を感得する作用を說明しようとしてゐる、そして趣味の客觀性といつたようなことを、しきりに力說してゐる、要する客觀主義は實驗的に、時間的過程を研究しようとする、美學方法論上の一主義であつてデツソア等はこの方面の開拓者であるといはれて居る、客觀論者が主張する方法論上の見地は、その研究の對照は、直接藝

術そのものであつて、これを客觀的に研究して歸納しようとするものである、現今美學に於ける勢力ある体系は、この客觀主義にあるけれ共吾人は吾人の考へとしては、是れのみに多く賛意を呈することが出來ない。

翻つて、主觀論者が所謂方法論上の問題は、心理學的に研究しようとする所にあるのである即ち強い主觀的研究方法である故に、極端にしては懐疑的である、然し已に氣分に動かされて生れた藝術を、批判し研究しようとするに於いて、多少の懐疑的は決して妨げないのである。

敎育や、境遇や、所や、時や、性等に依つて異つてくる審美思想を、特定の除外例としてまで、總べてを客觀化せしめようとする、客觀主義の方法論よりは、そこに強い個性の閃きを持つた唯心論的方法論が、吾人には遙かに信じ易い樣に思はれるのである、作者の殺那の衝動に依つて生れた藝術を、作者の心持ちとなつて、解釋し批判して行くのに、冷たき客觀的標範で律して行こうとする客觀主義は、吾人は妥當な方法論としては、到底肯定することが出來ないのである、然して美學研究の方法論の原理としては、此の兩主義が互に行はれて完全なる研究が成立すべきことは議論の多くを要しない。

今特定せられた建築藝術の上に於いて、方法論としての主觀主義を論ずるならば、建築物全般に就いて、その作家自身の心理と、融和して批判しようとするのは、即ちそれである、吾人は一つの建築物にしても一瞥しただけで、深大な美に觸れることが出來ないことは明であつて長い間熟視してゐる間に、自ら美の大なるものに觸れるのであるが、然し月明き夕、氣淡き朝、雨にかすめる春も、霜に枯れた冬も、常に同じ美觀を感得しようとするのは、決して可能なことではない、又主觀論の原理論としても決して合理的の事ではない。

崇高な一義の建築藝術に對して、その作家の心理に融和しようとするに當つて、その根本の思想に自個の強い個性の干渉のあることは、明かな事實であつて、そこにはこの對者の殺那の

氣分といふことが、深大な意義を有して來るのである、吾人が常に—春も夏も朝も夕も—同じ樣な氣分であることが出來、又吾人の周圍の客觀的存在が常に常態であるならば、或は吾人は主觀を通した客觀的存在に對して、一定の美意識を働かすことも可能であろうし、又吾人の氣分や周圍の客觀的存在が常に常態であるならば或は吾人は主觀を通した客觀的存在に對して、一定の美意識を働かすことも可能であろうけれ共、吾人の氣分や周圍の客觀的存在は、爾く一定不變のものではない、然らば吾人の對藝術的心理は極めてデリケートな点に關して、刹那々々の展開を認めることが、最も妥當な考へであろうと思はれる、此の見地からするならば、一つの藝術的存在に對して朝の清らかな空氣を通して觀た清美と、夕の小暗き闇に聳えた怪美と何れも正しい美的の判斷と言はねばならない、又白晝明るい光線に依つて、可成り細かい部分の線形までも見ることが出來て、美くしいと思つた存在に對して、暗を通じてその輪廓のみを見つめた時、決して美くしいものでないことがあろう、此れは最も當然の事である、更らに細かに論ずるならば、又同時に吾人に極めてデリケートな感情があるならば、理論として時間的觀念からは、一秒一秒にに於いて、空間的觀念からは、位置や形態の寸分に於いて、生理的狀況からは、主觀者の健康の刹那々々に於いて其他天候地勢の其瞬時に於いて、一つとして同樣の感じを得ることは不可能である、此等の特定の條件の下にあつてその感ずる所の美的効果は、當然一軌のものではない譯である、即ち何月何日の何時何分に、何處に於いて如何なる生理的の狀況で、何々を觀た感じといふものは、再び會することは理論の原則として絶對にありべきではない、而し實際の場合に以上論じたるが如きことは、何等の意義も何等の交涉も以つて來ないことが多い、そこには美の存在の客觀性や、或は主觀の客觀妥當性や、或は美の再現性や、種々な特定の條件があるが、此れと同時に吾人の美意識が、それを認識すべく、爾く發

達してゐない理由も、決して少くはない、此處に於いて美學に認識哲學上の說明も、必要となつて來るのであるが、他日の研究としたい。

かくの如くにして美學は、純理論として到底主觀論のみを以つてして、完全なる說明をすることは出來ないのである、次ぎに客觀論が建築藝術の上に如何なる干涉をなして居るのであろうかと云ふことに就いて、少しく考へる必要があろうと思ふ。

心なく畵いた屋蓋がパラボリック、カーブに一致し又は無造作に作つた線形がエリプテックカーブに類似してゐるといふ事實は吾人の美意識に何等の干涉を有するものではないが、一度藝術作家の製作的見地に立つならば、決して無要の研究でないことが多い、三次曲線に類似の曲線形たるが故に、この存在は美くしいといふが如き强要せられた美意識は、何等の價値も生命もないものではあるが、然しこの曲線形は三次の曲線の類似より出來てゐるかと云ふ客觀論的研究の結果は、吾人の輕々に肯定すべきものではないとはしない、此れを要するに客觀的研究は、その形式に重きをなし主觀的研究は、その內容に重きをなして居る、吾人は藝術論をするに當つて、形式論を爾く輕視することの出來ないのは、やがて客觀主義をその研究の方法論上に肯定する所以に他ならないのである、形式論として主觀を通じた客觀的存在を論ずるのは今日多く客觀主義に立脚されて居る吾人は、こうした方法論を稱して、平面的であるといふのに少しの妨げを持たない。

建築裝飾の細部に就いて考へてみても、一つの墓股や、八双金物の美を論ずるに於いても、その論廓だけを論じて、內容の毛彫や彩色も、少くも目に入らないといふ見方もあろう、沒骨描法は一面からはこの種の見方である、又建築物全般に就いてもスカイ、ラインのみに重きをなして、その線形を論ずることも出來る、こうした見方は暗を通じた壯美の概念に於いて、又は怪美の概念に於いて、吾人は屢々體驗するのである、此等の場合に於いてはその見方は、明

かに平面的であるといへよう、又こうして感得した美は、決して虚僞のものであるとはいへないだろうと思ふ、然し此等は勿論純理論上の問題であつて、事實に於いて、墓股や八双金物に墨を塗つてその線形のみを見る様なことは、絶無といつてよいが、かくの如くした考へは、美の客觀性に一層の強味を與へるものとして、實際論上からも、強ち馬鹿氣た仕事ではない、かくの如くして歸納して來た、種々なる美の條件は、客觀主義の結論として、客觀性を認識するのである、例へば美學に於けるレペチションの方則は、生理學上又は解剖學上から主觀論の結論の多數と、一致した說明を與へてゐる、實際に此のレペチションの方則は、吾人は左右繰返しの時は無限の長さを想像し上下繰返しの時は無限の高さを感じ、四方繰返しに對しては無限大の面積を感ずると云ふ事實は、客觀的に生理學上又は解剖學上立派な說明が與へられて居る即ち同じものを幾つも並べたものを見ると、眼球に同じ象を幾つも結ぶことは、眼球の解剖學的構造上、確かなことである、これに依つて刺戟された視神經も、同じ感覺より得ることが出來ないのであつて、從つて吾人は「又か」「又か」といふ考へを生せずには、止まない譯である、即ち美の材料としての視覺に、常に同一の刺戟を與へる結果は、終ひに吾人に無限といふ概念を懷かしめることは、容易に說明されて得るのである、これが左右であれば無限の長さを聯想することも亦明である、又主觀論上よりいはれる所のレペチションの方則の吾人に惓怠を生ずるといふ事實は、客觀的としては同樣に同じ刺戟を視覺に與へた結果、神經に疲勞を感じた結果であると說明してゐる、又此の他にもオルタチチーブ、レペチションやシリース、レペチション等も同樣に說明されて居る、かくの如くして主觀論よりする殆んど總べての事實は客觀的研究から始めて明確な說明が與へられて居る。美學又は一般藝術學の歸趨すべき目的が、やがて藝術の將來に暗示を與へ、社會的美的趣味に敎導を與へるものとするならば、この方法論上に

唱へらるゝ客觀主義は到底輕々に看過すべきものではない、如何となれば前にも述へた通りに主觀論上の事實も的確に說明するものは、客觀主義の研究に待つからである、然し藝術批判の根本に於いては、その方法論上又は原理論上、當然主觀主義を以て本となすべきことは、吾人の信ずる所である。

吾人は此處に京都の古建築を觀るに當つて、特に吾人の美學上の立脚地を明かにする必要を感ずるのは、吾人が方法論上原理論上主觀主義を以てその本末の主義となし、客觀主義を以て是れが出來る程度の說明を、試みようとするものである、美學が客觀主義を標榜しては說明科學の上に立ち、主觀主義を標榜しては批判科學の上に立つてゐるのもこの爲めであろうと思はれる。（緒言了）

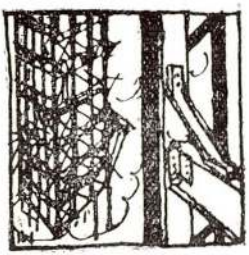
附記　本文は實に伊藤君が本年三月京都工藝學校の業を終へらるゝ際卒業論文として提出せられたものである、君は序文中に「予はともかく予としての一個の古美術觀を築き上げたと信じてゐる、予に美學があり、又それが假りに存在を許されるならば、それは皆この古美術觀の歸納であると言へよう」と述べられてゐる。學程三年の餘暇を利して如何に研究し編著せられたかは本文が遺憾なく說明して居ると思ふ。

▲祇園會▼

祇園會の七日の鉾、十四日の山、綾より錦より見ものなるは、萩野、いがらし、松尾、まつむら、素袍に太刀はきて、四條高倉の辻に、床几を据うれば、下の雜式同じさまにて、紅のふさざげたる鐵棒かいこみ、かちんの上下着たる男等、黑漆の棒手に手に持て粧ひをつくろひ非常を戒しむ、かれて定められたる一二の園を改めかへす、威儀嚴重なる中に、階子と曰と車につみて町ごとにひくは何の用にか侍りけむ。

たて曰もともに踊るや祇園の會

（裝遊稿）



東大寺建築史（五）

會員　須藤眞金

艸創篇

四　當時の造佛狀態

大佛の鑄造記を書く前に先づ當時の造佛の沿革狀況を述べて置く必要があると思ふ。

佛は印度の Buddha である、それを支那では浮屠と音譯した。それがまた朝鮮ではブトケとなつて遂に日本に來てホトケと成つたのである日本へ來て初めて成佛したと云ふ譯である。所がありきたりの坊主に云はせるとホトケはホドケルで解脫の意味だとか又ホトホリケ即ち熱病と云ふ古語の轉訛で渡來當時の熱病騷ぎから來た言葉だと說明する。

この佛像は佛敎の急先鋒として先づ第一に日本へやつて來た。其紀元を尋ねるに繼體天皇十六年（五二二）司馬達止が之を携へて渡來したと云ふ事になつてゐる。然し之は『扶桑略記』の記事で廣く一般にそう信ぜられて居た所だが近頃の研究では達止の來朝は應神天皇二十年（二八九）らしくなつて來た。司馬氏を名乘る支那人の子孫は繼體天皇以前から日本に來て居たので、漢の滅亡した時、漢の靈帝の後の阿知使臣が其の一族臣從を率ゐて朝鮮に避難し、それから應神天皇の朝に日本に移住したのであつたが、達止は怎うやら其の亡命客の一員らしいのである。それで達止が佛像を携へて來たとなると日本に佛像が渡來した紀元は隨分古い事になるのである。

然し日本で佛像を造つた初めは其れから二百六十餘年後の欽明天皇十四年（五五四）の事であつた。即ち百濟王が公式に我が朝廷へ佛像、幡蓋、經文を献じた翌年で、蘇我稻目がそれを乞ひ請けて向原寺に安置したのを、物部尾輿が因緣をつけて其の金銅の釋迦像を難波の堀江へ抛り込んで間も無い事であつた。茅渟の海中に異樣の響きが轟いて粲い光りが輝き初めた。その事を聞し召された天皇は溝邊直を遣して見せしめ給ふた所が夫れは大きな樟木が海に浮んで漂ひ來るのであつた。直はその樟木を取て献上すると天皇は早速畫工（えたくみ）に命じて佛像二軀を刻よせられたのであつた。それが吉野の比蘇寺へ納められた放光の丈六阿彌陀佛である。海の裡から音が聞ゑたり、光りを放つたりしたと云ふ奇怪事は放光彌陀と云ふ名稱から附會した物で取り合ふべき事ではないが、此時即ち欽明天皇十四年夏五月、二軀の佛像が日本人の手で造られたと云ふ事は信用していゝのである。それは丈六の木像で、材料は外來の樟木、作者は宮廷の畫工であつたのだ。記錄の上では是が日本最初の造佛事業になつてゐるが、此頃はもう尼間、殊に歸化人の間には盛んに佛敎は行はれて難波あたりには寺も大分あつた樣だから、此以前に和製の佛像が無いとも限らない。だけども造佛工と云ふ者が未だなくつて畫工が佛像を造つたと云ふ處を見るとそう氣兼をする必要もないと思ふ。それで先づは之れを以て造佛の日本紀元として置かう。

本職の造寺工を招聘したのは敏達天皇六年（五七七）の冬であつた。之れは稻目の子の蘇我馬子が密かに百濟王に要求して律師、禪師、比丘尼、咒禁師、造寺工等と一緒に朝貢させたのであつた。然し此頃は未だ崇佛派と排佛派との黨爭最中で疫病が流行るたんびに今度は神樣の怒りだ、今度は佛樣の祟りだと云つて、お寺を燒いたり建て直したりしてる混亂時代だつたので、その造佛工の仕事も遂に世に殘らなかつた。

敏達帝が崩御になつた時未だ皇太子が定まつて居なかつた。それは政權を爭ふ者の付け込み

時であつた。崇佛派の蘇我馬子は大兄皇子を立て様とすると、排佛派の物部守屋は穴穂部皇子を立て様として茲に皇位繼承の大爭闘がオッ初まつた。その結果穴穂部皇子は殺され給ひ、守屋も滅ぼされて大兄皇子が位に即き給ふ事になつた。之れが用明天皇である。天皇の御腹は蘇我氏の女、堅鹽媛で、皇后はその妹の小姉君の御腹である。即ち入内前に向原道場で佛敎の感化を受けた蘇我氏の二嬪の御腹に出でゝ乳漿から佛敎を吸入して生育し給ふた皇子皇女が、今や帝たり后たるに至つたのである。百濟聖明王の佛像貢献以來三十四年、茲に初めて崇佛派は完全に勝利を獲得し、保證し得たのであつた。

用明天皇は今迄堰きに堰かれてゐた佛敎を洪水の氾濫する様に日本全土に擴め様と云ふ旺んな計畫を立てられたが御在位僅かに二年で熱病の爲めに可惜壯志を御胸に秘められた儘御他界あらせられた。司馬達止の子の多須那は悲しみの餘りに出家して御冥福の爲めに丈六の挾侍菩薩の佛像を造つたのであつた、之れは多分前記の百濟から渡來した造佛工の作だろうと思ふが殊によると多須那自身の作かも知れない。本來司馬氏は馬鞍製作を家業とする家柄だからして佛像位は熱心な信仰心に助けられて造つたかも知れないし、且又多須那の子止利は有名な佛師となつたのであるから此の坂母寺の多須那作六丈佛は、本統の多須那作だつたかも知れないのである。

守屋征討の軍後に從はれた厩戸皇子は白膠木で四天王像を刻まれた、と云ふ様な事もあつて木像は大分出來たが金佛は一寸日本人の手にはおへなかつた様であつた。

推古天皇十三年（六〇五）夏四月、鞍作止利に命じて銅繡丈六の佛像各一軀を造らせられたのが日本の鑄佛の初めであつた。此の工藝技術の發展を視て高麗國の大興王は黃金三百兩を貢上して來た。翌年その銅繡像は共に完成して銅像の方を元興寺の金堂へ安置しようとした。所がその像は金堂の扉より大きくなつて裡へ這入らなかつた。それで大騒ぎになつて戸を毀して

入れ様とした所を止利は巧に工夫を廻して戸を毀さずに納める事が出來たと云ふ話がある。隨分呑氣な話である。之れに用ゐた銅二萬三千斤金七百五十九兩だつたと云ふ。そして止利は此の戸を破らずに佛像を堂内に安置した功績に依つて近江國坂田郡に水田廿町を給された。

その裡に中大兄皇子の入鹿誅戮となつて蘇我氏は滅び、大化革新の偉業に藤原氏の世となつたが、それは佛敎興隆に何の故障をも生じなかつた。その昔物部氏と共に頑固に排佛を主張した、神道の本家中臣氏の後裔である、藤原氏は今では却つて熱烈な佛敎鼓吹者に豹變してゐたので造寺造佛の事業は相も變らず盛んに行はれた。然しその佛像は多くは木像であつて鑄佛の技術は餘り發達の風が見へなかつた。尤も丈六の銅像などゝ云ふと仲々の大仕事で二萬斤から三萬斤と云ふ莫大な銅が要るのだから、鑛業も鑄造も至極幼稚な太古時代には大体無理な話なのであつた。もつとも北魏の大祖は丈五尺の釋迦立像を造つたと云ふ故事もあるが、それは縮像で金佛と云へばもう其長丈六尺にして黄金色と云ふのが定尺になつてゐる。

それで此丈六佛は其後大寶元年（七〇一）秋七月に大安寺と藥師寺との造塔、丈六二官を置かれる迄の一百年間に一つの記錄も殘つてゐない。然し大寶の律令が成り諸國の産業が發達するに及んで銅の産出が豐かになり、鑄錢司を始め金屬を取扱ふ工業が非常に發達して漸く鑄佛事業の曙光も見へて來た。やがて都は平城に遷されて遂に鑄佛技術の大發展の機運に逢着した。

聖武天皇は諸國の財政及工業の狀態が此の丈六佛の鑄造に耐へ得る物と見定め給ふて、天平十三年（七四一）三月二十四日竟に普く天下に、釋迦牟尼佛尊金像高一丈六尺各一鋪の鑄造を命じ給ふた。それは兼ねて諸國に造營を令してある國分寺の本尊なのであつた。

そうして之れに次いで造られたのが、それに十倍する東大寺の金銅盧舍那佛像なのであつたつまり此東大寺大佛は忽如として進歩を遂げた鑄佛事業の潮流に調子に乘つて帆を擧げた大胃

險であつたのである。國庫の豊滿、鑛工業の發達、工藝美術の進歩、時代精神の旺溢、國民思想の煥發、そうした確信は充分では有つたろうが此大事業の前に一つの試作もなかつた。丈六の佛像は實長五丈三尺五寸の大像の試錬としては餘りにアッケな過ぎる。東大寺大佛鑄造の企ては血氣の勇に逸つた暴擧であつた。然し旺溢して抑へる事の出來ない文化のポテンシアルエナージーは怎うしても此の位の壯擧をやつつけなくつては納まらなかつたのである。

次に當時の建築狀態を述べて、それから愈々艸創本記に入る事にする。

（當時の造佛狀態、完）

附記

括弧内の年號は西暦。

三笠山の嵐の音も、恨むる樣にぞ聞ゆける。焔の中にて燒け死ぬる人數をかぞへたれば、大佛殿の二階の上には一千七百餘人、山階寺には八百餘人、或御堂には五百餘人、或御堂には三百餘人、具に記したりければ、三千五百餘人なり。戰場にして討たるゝ大衆千餘人、少々は般若寺の門に切りかけさせ、少々は首共持ちて都へ上られけり。

平家物語「奈良炎上の事」の一節



演劇と建築（上）

會員　波江悌夫

私は茲に「演劇と建築」といふ題を掲げて聊か自分の考へついた事を申述べたいと思ひます固より充分研究致しました結果を御報告申上げる譯ではありませんのであつて、未熟な部分或は間違つた點については諸君の御批正を願いたいと思ひます。

殊に演劇に關する私の智識は至つて淺薄のものでありますのみならず、建築の意義なり、建築の定義なりに就いても、私の如き淺薄の徒の喙を容るゝ限りではないのでありますが、三才の兒童も淺瀬を知るといふ場合もなきに非ずであつて、多少なりとも諸君の御參考になり得る處がありますものならば、是に越した仕合はなゝ事と思ひます。

扨て私等が今日迄に諸先輩に敎へられました智識から考へますと「演劇」と「建築」とは共に人生の一大藝術でありまして、其任務とする處も其目的とする處も大に似よりました點が多いのであります。

今美學上の分類法に依りますと、藝術を二大別して時間藝術と空間藝術とに分つて居ります時間藝術の內には詩文、音樂並びに舞踊、演劇等が含まるゝ譯でありますが、舞踊や演劇は實際上種々の羈絆を受けるのみならず、又空間の藝術でもあり得る處からして、普通特別に時間藝術の埒外に置かれて綜合藝術と別稱されてあります。つまり時間藝術として純正であり自由なる藝術としては詩文、音樂の二者が擧げられ

て居ります。

空間藝術に屬するものには繪畫彫刻建築並に圖案、器具、染織等でありますが、繪畫彫刻建築の三者は他の空間藝術に比較して、頗る自由な性質を持つて居るが爲めに之を純正美術と稱し、他の空間藝術は實際上の羈絆を免れ得ないといふ意味からして、之を應用美術といふて居りますし、又工藝美術とも名づけて居ります。

茲に美術といふ言葉は英語のファイン、アートを譯したのであるさうでありますが、一般に空間藝術の作品を指して居る樣であります。藝術則ち廣い意味のアートを直譯したものであつて、抽象名詞である樣でありますが、工藝の名は文藝に對して用ひられるもの〻如く、工藝美術と申しますと應用美術に更に念を入れた名詞である樣に思はれます。乍然此等の名詞は頗る混亂して用ひられて居るので、學者により又目的によつては色々に使用して居る樣であります。

美學上の分類法も、元より絶對のものではなく、研究上の便宜から、美學上に出來上つた一般の約束でありますが、これも議論の分る〻處から學者によつては、其見界の都合によつて色々に區分せられて居る譯であります。

扨て藝術の中で實際上の拘束を受けないもの〻みを擧げて見まするとと、次の樣になります。

自由藝術 { 詩文 / 音樂 } 時間藝術
　　繪畫 / 彫刻 / 建築 } 空間藝術
文藝

此の內繪畫彫刻建築は空間藝術に屬して且つ自由藝術である處から純正美術又は自由美術と名づけられたのでありますが、此の五者を總稱して純正美術と一括するのは名詞の混亂であつて純正藝術と名づくべきであると思ひます。

以上五者の性質特長は、美學上に於ては今日迄に色々と比較研究されて居りまして建築が繪畫彫刻と一所に取扱はれて居るのは、一般の認むる處でありますが、建築の特質は實際に於て可なりの拘束を受け社會の羈絆を脫することの

出來ぬ内容を持つて居るが爲めに、之を自由藝術の純正美術に屬せしむるの可否については、大に疑問の存する處でありますが、從來建築を一個の立派なる藝術と考へる立場から觀て自由美術の性質が多いものと解釋されまして純正美術の一門へ祭り込まれてあります、これは建築を美術とする譯にも行かず、其性質は寧ろ繪畫彫刻の自由美術に類似して居ると見られ、いはゞ無理に純正美術に押し込んだ嫌があるのでありまして、殊更に區劃を立てたがる美學上の分類法に累せられて一種不可思議な取扱を受けたものと考へなければなりますまい。

何となれば建築を純正美術に押込んだ結果、特に種々の說明を與へなければならぬ破目にも陷つて、學者に依つては純正美術に屬せしめながら特別扱にして居る傾があるのを見ても解ります。殊に建築は自由分子の量の少ないが爲めに自由藝術の第五位に置かれて居るかと思ふと又建築は『凡ての藝術の母』であると尊稱を奉られて聊か燻つたい氣持にもなつて居ります。

尤も建築の作品の中に大きな彫刻とも見做し得べき其外形の美をのみ發揮する記念碑の如きは頗る自由なる分子の勝つて居るものであつて、之を純正藝術と認むることに異議のないものもありますから無理もない次第ではありますが、建築の大部分は之を純正美術とするにはあまりに實用の拘束を受け過ぎる結果、一方に於ては『建築は技術なり』との定義を眞向から蒙る次第であります。

建築は之を美術とすべきや、はた又之を技術とすべきやといふ問題も隨分久しい懸案でありますす。そして數多の學者と數多の專門家とか夫々に頭を惱まし議論を戰はした擧句、建築は『美術にして且技術なり』といふ最も都合のよい又餘義ない定義に落付く迄の經過は亦頗る興味ある歷史である樣であります。

乍然建築業者から觀ますれば此等の分類なり定義なりから色々の取扱を受け又は種々の色眼鏡から窺はれても『建築』は結局『建築』であつて美術なるが爲めの建築でもなければ又技術なる

が爲めの建築でもなく或は純正の美術だと尊稱を受け樣が、實用的藝術だと皮肉られ樣が、建築の絶對價値は何處迄も人生に一個の天地を開拓しつゝある處に存ずるのであると思ひます。

近時吾國の建築界では—特に吾國の建築界では—「建築は技術なり」との定義を無理にも下さんとするの傾向がある樣でありますが、これは一種の方便であり又一種の解譯であつて建築業自身は何等の痛痒を感じては居りますまいが方便とか解釋といふ一種の色眼鏡は兎角觀る者をして其眞相を窺はしめぬといふ結果に陷つてあまり面白くない現象であると思ひます。

それはそれとして置いて、要するに「建築」といふ一つの美術は其內容が頗る廣汎であつて之を簡單に取扱ふことの出來ぬ性質を持つて居る爲めに時代々々の解釋なり定義なりが種々に變化せざるを得ぬ結果を齎したものであると觀ますと益々「建築」を學び建築を研究し建築に携はる吾々は非常なる任務を有すると同時に非常なる趣味を感じない譯には行きません。

扱て前に立もどりまして建築が一個の藝術であるといふ立場から觀察して茲に聊か愚見を開陳いたしますると、建築を純正美術の中に無理に押込んで、更に種々の說明を加へる方法も惡くはないでせうが建築の性質なり其の特性を明かにするが爲に甚だ餘計な申出ではありますけれども、思ひ切つて純正美術から切り離して之を演劇と一所に綜合藝術といふ別棟に置て見るの至當でありはせぬかと思ふのであります、殊に演劇との比較研究を致して見まするに大に似通つた點のある事に注意を致したいと思ひます

演劇は立派な藝術でありますが、其內容あまりに復雜であるが爲めに、初めから特別扱を受けて居ります。若し建築が『藝術の母』であるならば、演劇は『藝術の父』であるかの如く見わます。文學となく音樂となく、繪畫にしても彫刻にしても或は建築迄も取り容れて少しも痛痒を感しないのみならず、立派に此等の時間、及空間の美術を綜合融和して偉大なる藝術を建立して居ります、時に亦劇の本体は姿を變へて

文學に入り、音樂に境を開き、繪畫彫刻に題目を與へ、或は建築に花を添へます。

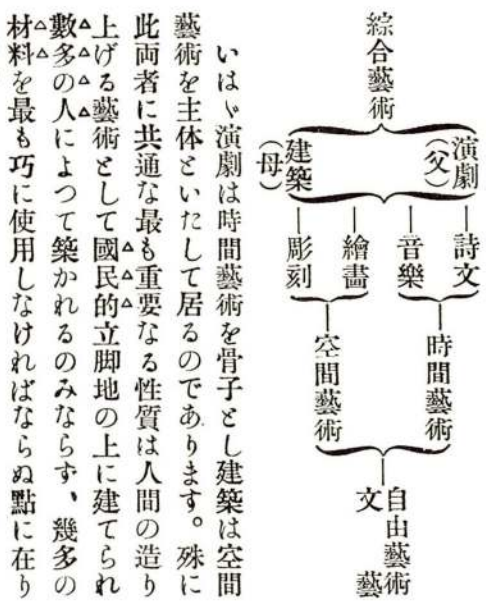
其領域の宏大無邊なる其變化の縱橫無礙なる特性あるが爲めに之を綜合藝術と特稱して時間空間の藝術から區別するが至當であると思ひます、然るに又頗る社會的實際的拘束を受けて飽くまで實世界の羈絆を脫することの出來ぬ性質あるが爲めに之を羈絆藝術の一と見て差支はない、蓋し其內容頗る復雜にして其統一融合の最も困難なる藝術として認められゝ所以でありまして、文化大に進み、開明有爲の國民でなければ保つことの出來ぬ藝術の一つであります。

建築が『藝術の母』として常に時代の最後に現はるゝ特性を有するが如く、演劇が『藝術の父』としての價値は亦時代の最後に打建てられて居る樣であります。蓋し演劇は數多の藝術を融合統一して始めて其眞價を發揮するの性質の然らしむる處であつて、文明開化の國民の領有する藝術の最大なるものゝ一である樣であります。

今演劇の內容を分解するの大膽なる行動は之を愼みまして、建築が演劇に共鳴するの內容を解剖して建築を綜合藝術と觀ることの至當である點を擧げて見たいと思ひます。

建築は從來空間藝術の優なるものとされて居りますが、又時間藝術をも融合咀嚼し得るの性質を保有して居るものと見ることが出來ます、フアガツソン先生も建築に關する哲學的解釋に特に此點の說明を致されて居りますし、美學上に於ても其特性を明に說明して居ります、されば建築が藝術の母としての偉大なる性質には時間の觀念は特に打込まれて居るべきであり、詩文的並びに音樂的含蓄は必ず保有されて居る事は既に〳〵數多の學者の認めて居る處でありまず、唯演劇の如く顯著なる效果を直接に發揮し得られない爲めに、單に空間藝術のみの母であるかの如く觀られて居るのであると思ひます

今此の關係を表に改めて見ますると次の樣になります。



いはゆる演劇は時間藝術を骨子とし建築は空間藝術を主体といたして居るのであります。殊に此両者に共通な最も重要なる性質は人間の造り上げる藝術として國民的立脚地の上に建てられ數多の人によつて築かれるのみならず、幾多の材料を最も巧に使用しなければならぬ點に在ります。

固より私の茲に論ずる迄もなく世界の美術史を繙けば凡ての藝術が夫々團結ある國民によつて其特種の國土の懐に統一ある時代の波の上に陸離たる光彩を放つものであることは直ちに理解することが出來ますが、この純正美術のうちに擧げられたる詩文とか音樂とか繪畫にしろ彫刻にしろ、其價値ある作品が大なる國民的後援によつて築かれるにしろ、多くは單なる一個の有爲なる人によつて成就される場合が多く、しかも終始其偉大なる個人の力によつて自由に大膽に打建てられる所に自由美術の眞價が認められるのであります。場合によつては個人の力といふよりは數多の人によつて目的を達することも皆無ではありませんが、先づ以て個性の成就といふことが骨子となつて居ります。從つて純正美術の内容には必ず偉大なる個性といふことが最も強く高唱されるのであります、亦屢々時代の高調期に際して偉大なる個性が數多の國民を心醉謳歌せしめまして燦然たる光を放つ事實を觀るのでありますが、私の所謂綜合美術に屬する演劇や建築にあつては、其光彩を發揮成就するには幾多の人の有機的努力に待つものがある丈に頗る簡單に成就し得られない特性を保つて居ると思ひます、殊に演劇に在つては幾多の役者の活動が其主体をなして居ります。しかも此役者を中心にした周圍にはこれも幾多の人の力が或種の統一を保て連關活動して居る事實は多くの人が直ちに首肯し得る處でありますが

建築に在つては同樣に數多の工人を中心にして其周圍內外にも連關活躍する數多の人の力が存在して居ること恰も演劇と大差ない位であるといふとには、あまり世人の理解がないのみならず美學者批評家歷史家等ですら、うつかり氣が付かずに居る樣であります。これが從來建築を純正美術の中に押込んだ理由であり、建築にも個性といふことの高唱される所謂であると思ひます。建築家自身も藝術家といふ看板を高く掲げて個性といふ盾を大切に左手に握り直感といふ矛を右手に振ふて個人の藝術を打建んと力んで居る樣でありますが、これは事實に於てそういふ譯にいかず、個性の盾のやり場に困り、直感の矛の思ふ樣に振れぬことを慨して眞の矛盾の苦闘に陷つて居る樣であります。畢竟、建築といふ藝術の性質の研究が未だ充分ならず、建築家といふ境涯の徹底せる理解がない爲ではありますまいか。或は柄にもない盾を授けられ、怪しげな矛を與へられて血迷ふた擧句の混惑ではありますまいか。

建築は一つの有機体であるといふことはよく耳にすることでありますが、有機体であるといふ簡單な文句のなかに如何に多くの組織的連絡の必要であるかと說明して居ります、幾多の人の力を組織的に組立つて更らに之れに大きなる團体的個性と團体的感情の繩張をして掛からなければならぬことを素直に語つて居る樣でありまず、換言すれば有機体と見られる建築は全く純正美術の特長を失つて居るのであつて、此の偉大なる三ディメンションの藝術が其根本に於て平面的取扱の出來ぬ重大なる理由が現實に存在して居ることを特に注意したいと思ひます。

三ディメンションと申す言葉は解釋の仕樣によつては色々の意味を含んで居ります、空間といふことは即ち三ディメンションから成り立つて居ります、併しながら有機体と見做し得る建築の三ディメンションは一に建築家、二に請負者、三に工人と擧ることも出來ますし、一に設計、二に豫算、三に施工といふ三部に分類しても差支ない樣に思はれます、或は一に計畫、二

に經濟、三に實行といふことにもなります、從つて建築は之を有機体と見做す場合には立派な一つの事業であつて曾て直木博士の唱破された如く「技術則事業」であるが爲めに、此の意味から見ても純正美術の同輩とはとても同一に考へる譯には行かなくなります、殊に此三ディメンションの各部は夫々に大切な領域を持つて居て之れが融合統一の困難は一通り二通りの説明では盡せない話であります。之に反して繪畫彫刻或は文學の方面にあつては、此三段の順序はあるにしても、格別明瞭なる區劃なり、又統一上の困難はなくして單に計畫は實行を説明し實行は即ち計畫を成就するに在つて丁度、建築でいふ設計といふ部門に屬する丈のディメンションがない樣に考へられます、或は計畫及實行の二ディメンションに過ぎない樣に思はれます然るに建築に在つては「經濟」の部分に於て大なる障壁が立てられつゝあるのであつて、此の障壁の中には注文主といふむづかしい主人公が扣へて居るのであります。純正美術の藝術家は此の障壁の束薄を受くること甚だ少なく、殊に注文主といふ御主人公に痛棒を喰はし得る位の見識を確立してゐるのみならず、場合によつたならば世間からも無視して差支ない位の免許を得て居ります。乍然建築に在つては此の一大障壁を無視して其事業は完成することが出來ないのみならず、其藝術を打立てることも不可能であります。

計畫の完成と經濟の理解とが出來ても更らに實行の困難が伴ひます、此處に至つては數多の工人の統一融合を謀らねばならず、數多の經驗と多大の時日とを要します、此等の關係按配は建築は劇と全く其性質を同しうして居ります。演劇の一興行に作家と興行主と役者との三幅對が三ツ巴の關係に苦心慘憺の經營をやることは世間にはあまり知られて居りませんが、全く同樣の關係であります、建築で經濟を無視することが出來ない樣に、劇の興行に資本と收益との實際問題を予グレクトする譯には行きませぬ、若し工人と役者との立場を同一のものとの解譯に

間違がないものとするなれば、作者が役者と興行主との間に立て板挟みの苦衷は遇々以て建築家の仕事の困難と一致して居ります。若し劇が藝術といふ看板と共に、興行といふ羈絆を逃るゝことが出來ぬものならば、建築に在つても藝術であると共に事業であることに異議のありやうはない譯であります。（未了）

◆世の中◆

世の中は名に倒るゝ人あれば、容に倒るゝ人もあり。あるは辯口に倒るゝ人あれば、分別に倒るゝ人もあり、或は丁子頭の相に倒るゝ人あれば、夢に倒ふるゝ人もあり。牛は角に倒ふれて浮鼻づらを貫かれて、蛙は口ゆゐ終に蛇の爲に呑まるゝとなり。

（それ〳〵草）



老建築師の思ひ出

——建築史ローマンス——

會員　まがれ

倫敦郊外のハムプトン、コートから馬車を驅つてセント、ポールの建築を眺めに來るのが老後のクリストファー、レンの唯一の慰めであつた。一六六六年の大火を機會に倫敦の街を殆んど一人で改造した彼の事業は輝々しかつたが、彼れの生活は常に淋しかつた。彼れは三十五年の心血を注いだセント、ポール寺院が完成すると同時に建築界から身を退いて、今は心靜かに哲學と聖書の研究に清い餘生を送つてゐる。

久方ぶりで倫敦へ出掛けて來た老建築師は先づバンクサイドに馬車を停めて、どす黒いテームスの水に影を映すセントポール寺院の姿を打ち仰いだ。赤煉瓦の家屋が並んだ上に灰色のポートランド石の圓頂蓋（ドーム）が鉅然として聳へて居る。彼れの思ひ出は直ぐに、一週間に何度となく籠に載つてその三重構造の圓頂蓋の上へ上つた頃を過つた。彼れは工事監督のいとまには三百六十呎の圓頂蓋の上から遙かにテームスの河岸を見おろしては疲れた心を慰めたのであつた。今はその岸邊から反對（あべこべ）に圓頂蓋を見上げて泌み泌みと工事の頃をなつかしむのであつた。

恁うやつて八十余歳の老軀を一日馬車に乘せてセント、ポール寺院を眺めに來るのが、今ではレンのたつた一つの樂しみなんではあるが、此寺院とても決して彼れの會心の作ではなかつた。むしろ彼れの凌辱の記念碑であつたのだ。彼れは改築の目的を以つて舊セント、ポール寺院を實測してゐた。そして改築に取りかゝらうと云ふ時に偶々大火の爲めに其舊寺は烏有に歸したのであつた。それで大火後彼れの手に成つた改新築五十余箇の寺院の裡でも、此のセントポールは一番やり好い建築であつた。

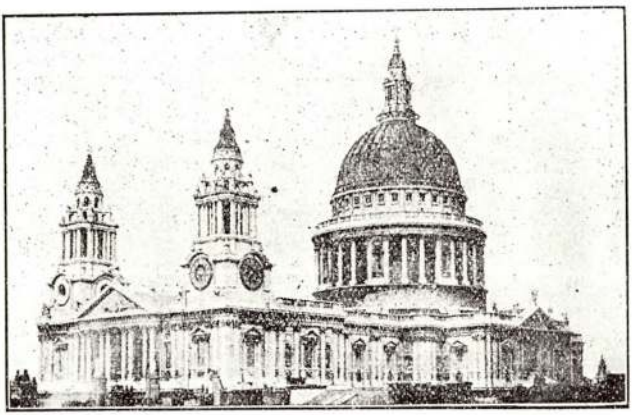
彼れは早速に新教の禮拜に適する樣な希臘十字の平面圖を作製した。其姿圖は羅馬のセント、ピーター寺院を其儘摸寫した樣な、コリント範の大柱を二階ブツ通しに建て列れた頗る雄大な設計であつた。それは全くレンの心血を傾け盡した最上の傑作であつた。彼れは滿足の微笑を老の頬に湛へてその會心の設計をチヤーレス二世の乙夜の覽に供へた。

處がその苦心の設計は僧侶の反對に會つた、僧侶達は舊教の寺院の樣に Chapel を澤山取つて慾しいと要求するのであつた。そうすると平面圖は羅甸十字形にな

つて内外共に甚だ荘観を滅殺されるのであつた。僧侶の辨舌の方が皇帝の耳には尤もらしく感ぜられたのでチャーレス二世はレンに設計の變更を命じたのであつた。

大英國の光榮の爲めにと畢世の心血を傾倒した藝術作品を只一言の素人の干渉に譯もなく蹂躙された時、レンは人目も憚らず涙を流して嘆歎したのであつた然し君命だから是非もないので、僧侶が云ふが儘に心にもない設計變更に精力を盡した。今度の平面では羅馬のセント、ピーター寺院の様に柱をアッ通す譯には行かないので正面を二層に取扱つた。そして一階はコリント範、二階はコンポジット範を各二本宛並べ立てた、左右に鐘樓中央に大破風、そして少し奥まつて堅牢な柱廊を廻らして、その上に倫敦には物珍らしい圓頂蓋が空を破ふて聳へ立つた甚だ纖麗の技巧的な物になつたが前案の雄大荘嚴な感じは悉皆ㇼ消滅して了つたレンは其案が施工される事を甚だ恐れたが、愚圖々々はして居られないので其設計を皇帝に提出した。

建築思想の乏しい僧侶達は「それ見た事か」と云つた拍子で第二案を擇び取つた。それでチャーレス二世も優秀な第一



倫敦セントポールー寺

の設計を捨てゝ、劣等な第二の設計を好い物として採用する様に詔はれたのであつた。

そんな不愉快だつた思ひ出が一寸老建築家の胸を曇らせたが、濁つた倫敦の空に夢の様に浮き出してる灰色の圓頂蓋をヂッと眺めてある裡にはそんな妄念は忽ち消へ散つて、此の上もない滿足の心が一杯になつて了ふのであつた。そして又馬車を走らせてフラックフレーヤ橋を渡りニューブリッヂ街をその追憶の建物の表へと急がせたのであつた。

セント、ポール寺院は周圍が大變狹くて建づまつて居るので、傍へ寄つて見る建物ではないのだ。遠望すべき建築である。だがそれを建立した建築師の身にとつてはテームス河畔から遠望した丈けでは何日も氣が濟まないのであつた。それでレンは Great Paul を見上げる様な位置に再び立つた。費用の節約と云ふ事に不斷の努力を拂つてゐた彼れが、此建築に擇んだポートランド石は倫敦の煤煙に燻されて何とも云へない重味を帶びて來た。そしてその色は大變此都市特有の不透明な空氣とよく調和した。

「おゝ此寺を建てた石炭が、また此寺に威嚴をも添へて行くのだ」

レンは思はず怎う呟いた。此寺院を建立する財源は倫敦港に這入る石炭の輸入稅であつたのだ。彼れは其處考へを起した刹那「アッ失敗つた」と心の裡で悔んだ。彼れは此寺の前へ來て金錢問題を考へる事を大變怖れてゐたのだ。彼れの此工事中の年俸は二百磅だつたが、初めに意匠を打ち壞はした僧侶達はまた更にレンは年俸を貪る爲めに工事を永びかせてゐるんだと云つて迫害を加へ出して、遂に途中から百磅に減らせて了つたのであつた。けれども彼れは孜々兀々と老軀を提げて平然その天職を樂しみ、遂に三十五年の星霜を經てこの大事業を完成したのであつた。

やがて老建築師クリストファー、レンはいと滿足げに微笑を湛へて最後の大作を後に馬車をハムプトン、コートの佗の住居へと驅つて歸つた。

此の淋しい老建築家は、只時々怎うやつて自分の作品を訪れて來ては、甘い思ひ出に耽つて歸るのが、たつた一つの樂しみであつた。そしてそれが彼れの偉大な仕事に對する報酬の凡てゝあつたのだ淋しい老建築師の幸福は彼れが眼を瞑つた後に始めて彼れを訪れた。彼れの屍は數多の英國偉人の靈と一緒に國家の功勞者として、彼れが畢世の事業たるセント、ポール寺院に葬られた。然かも彼れの石碑には怎う云ふ文字が刻まれた、

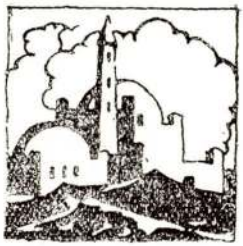
Lector, si monumentum requiris, circumspice.

(讀者よ、彼れの記念碑を見んとならば希くば、汝の立たれたる圍りを見られよ)

(完)

◉オペラ◉

伯林には帝室附屬のオペラを始め各種の劇場があり又いろ〳〵の寄席もある、ことに獨逸は音樂が盛であるから各所にこれが催される。「オペラ」は何うしても巴里が第一で、維納が第二、伯林はそれに比すると遙かに落ちて居たそうであつた。今では戰雲漠々歐洲の大舞臺を掩ふて、本當の慘劇が實演されてゐるのだから、此等の「オペラ」は傷病兵の愁歎劇で塡められてゐる。しかし伯林の「オペラ」が其優なるものに違ひない。



建堂閑話

會員　望蜀生

一）五十年

人生五十といふが、人間も五十といふ聲がかゝるともう老境だと自分でも知り人からも思はれるが、それと同時に今迄に經驗しない新しい境地に到達することが出來るものぢや、孔子樣も天命を知ると宣ふた。あれは孔子さんの悟りであるが、聖人ぢやとて人間に相違ないで年齡てふ爭はれぬ自然の定則には順はれたのぢや、俺は元より凡人だが、凡人なりに亦妙な心境に達して來たなと思ふよ、何故つて人間一通の事を行つて來たからなそれにしても今の建築界も、もうかれこれ五十の聲がかゝるからには、そろ〳〵異つた天地が開かれさうなものぢやがな日日維新なりといふ意味から觀ればまだ〳〵前途遠き遠くで、忙しさうに（又實際忙しいのだらうが）盲動してるな、いやこれは俺が惡かつた盲動といふと語弊がある、つまり日日進歩活動してる樣ぢやが、さてこれから先の日本の建築界の舞臺は何うなる歟といふ問題には誰も滿足な答が出來まいがな、そこぢや俺にはちあんと解つて來たよ。

二）若い內

若い內は之を戒むるは色に在りといふが、要するに感情の潑溂たる活動が稍もすると、情に囚はれる恐があるのぢや、血氣正に剛なり之を戒むるは鬪に在りといふのも同し事で、感情の奔放に驅られて前後不覺となるからぢや、だが何事も若い內の事、凡ての事業にしろ、凡ての技藝にしろ、若い花々しい元氣があつて始めて革新も出來妙技も演ぜられるのぢや、年寄といふものは兎角因循となつて姑息に陷るの弊がある、つまり情が衰へて理性が發達するからな、しかし茲ぢや老人にも短所があると同時に、若い人にも戒むべきことが多い、若し此の兩者の長所のみを利用して事を謀つたらそれこそ鬼に金棒ぢや今の建築界も若い奴と老輩連とが其長所を各發揮したらば一層の効果が出來ると思ふがな。

處が今の若い連中は一体に元氣がないよ、そりあ時世の力もあるに相違ないが此頃の靑年に學校の門內で精力を消盡してしまつたり、生活難に苦しめられたりしては元氣もなくなるだらう、其所が修業ぢや、何に！老人の跋扈？、そりや大なる

誤解ぢや、そんな事をいふてゐるのが元氣のない証據ぢや、なぜ新たな方面に前途を開托せんかな、今の老人連の開托し得た天地が是れからの若奴等の働く處か？今の老人連がやつと築き上げた舞臺を鼻歌唱ふて占領しやうといふのか、そんな肝玉の小さい事でどうなる。

そりや、老人連も惡い所があろうよ、だがそりああながちに老人連を罵る譯には行くまい、老人連の今日迄の苦心を思ひやる丈の餘裕がなければなるまい。早い話が今の若い奴等に老人連の昔丈の元氣があるまいがな、又今の若い奴等が老人となつた時を考へて見い同じ事ぢや、老人は世話を焼きたがるのはこれあ自然の傾向で、そこに老人の老人たる處かある譯ぢあから若し老人の意見だの、忠告だの又は老人の行ることを一々惡い事としてしまつたなら、畢竟老人を殺す樣なものぢや、進歩の段階にはそれも必要ぢやろう。たが若い奴等が動かぬ心と溢る、活氣を失ほすに大局を達觀することが出來たらば、老人連の跋扈なんどてふ問題は起らんよ、老人といふものは、いはゞ本卦返りの小供ぢあからな、煽て立てゝ何處迄も奉れば喜んでホク〳〵するものぢや、老人の働く方面も考へんで、若い者が老人の折角築き上げた城廓を奪うといふのはちと虫がよすぎるよ。またあんまりケチな考ぢあないか、俺は元より老人の部類に入つたが、まだ〳〵若い積りぢや、だが俺は俺のこれから働く方面を考へてゐるよ、若い奴等と同じ穴で馬鹿らしい喧嘩はせん積ぢや。

だから俺は思つとる、今の若い奴等が今日の不平をよく心に銘して他日江戸の敵を長崎でうたぬ丈の覚悟があるならば大にやれ、だが氣の抜けたビールの樣にアヲばかり申譯に吹いて居る今の若い奴等に何が出來るか、しかしな將來の建築界はともかく若い連中の努力に待たなければならないのぢや、道はいくらもある世界は廣いぢあないか、人間到る處青山在りといふではないか、なぜ別天地を開托するに努力せんかな。

（三）竹林の賢者

世の中が面白くなくなると人間は其處に住むのがいやになる。そうなると何處か別天地を造ろうとする、さればといふて此の世を捨てゝは總てか無ぢやそこで元氣のある奴は面白くない世の中を改造しやうとする、つまり革命ぢや、革命は危險千萬なものだ破壞をやるのぢやからな、處が破壞をやるとしても無謀な破壞は破壞のために破壞をやるから、決局露西亞の革命のやうに何等の建設が出來なくなる。そりや建設のための手段として破壞するのだと理屈はいくらも付けられやうが結局何等の建設が出來得なかつたらそれは畢竟建設なしの破壞ぢやこりあ考へればならぬ事になる。

處が破壞といふても破壞の實力がなければ出來るものでない、又破壞の時期を考へんと成功をするものでない、何邊も破壞をやつて何邊も失敗をしてゐる中に其目的を達する機運が到來する場合もあるが實力のない破壞は幾度かの失敗で氣が拔けて却つて目的を失つてしまい破壞に飽いて來て、今度は破壞もいやだ、建設かなんだ、といふ風になつて來る。すると世の中を面白御可笑しく暮らさうぢ

あないかといふ手合が出來て來る、世の中に望を絶つて仙人の生活が初まる、それもよいが仙中の俗とでもいふか俗中の仙とでもいふか、つまり俗界は離れられぬし又仙人にはなりたくないといふ連中ぢや、此の手合は世の中を茶にして暮さうといふのだ、老人の際遇とは違ふて、若い奴の血の循の悪い連中ぢやから、到底緑なことは出來はせん、いはゞ竹林の賢者ぢや建築界に此賢者が近頃大分增へて來たやうだ、いや決して偽りでない本當の話だ、若い身空で此種の賢者になつたら氣の毒なものである。

（四）別天地

竹林の賢者は其別天地を竹林に開いた迄ぢや、今の建築界賢者の別天地は何處ぢやと思ふ、解るまい、俺にはちやんと解つてる、總体元氣のない連中ぢあから別天地といふ處で知れたものである、殊に此頃の世の中だから實際の竹籔は都會の眞中にはなくなつたが、都會といふ奴は大きい丈に二十世紀の竹林が到る處に在るからな、其處此處に在るだろうぜ在るとするさ、いや實際在るに相違ない。其處に集まつた連中の話を俺は夢に聞いたことがある。

宜しいか一人の男が口を切る

「おい、面白い話はないか」

すると今一人が直ぐに答へる

「何處も同し秋の暮だ」

「秋高くして馬肥ゆたりか」

「いや、秋風颯々たり、我思や悠々」

「偽をいへ、諸共に懐寒し秋の暮だろう」

今度は一人の男が眞面目な顔をして

「僕はもう建築家を止めやうと思ふ」

「何故だい」

「いやになつた」

「何うして」

「別に理由はないさ」

「理由のないことはあるまい、大に語るべし、皆で謹聽するよ、又批評もしやう」

「まあ止めこう」

「止めんでもよいぢやないか、鬱勃たる胸中の不平を開陳すべし」

此時今一人の男が喋り出した、「それはさうと此間の非藝術論の續をやろうぢあないか」

「よかろう、だがKが居らんから物にならぬ、此の間の晩は面白かつたな、あの時のKの顔が今に眼に殘つて居るよ」

「實に考へて見るとK君の論鋒は中々堂々たるものだつたぜ、それを皆で茶かしてしまつちつたんだもの、口角泡を飛ばして、すさまじい勢になつたのは無理もれへ。先生後で大分怒つて居たやうだ」

「あれで妻君には頭が上らないのは不思議だれ」

「おやKはもう落城したのか、さうか、それ知らなかつた」

此等の連中は必ずしも竹林の賢者たらんが爲めに集まつたではあるまいがな、颯々乎として羽化して登仙するかもしれない、しかし何處へ登仙するにしても、世の中の眞の味を甜めて見なければ、仙人になる資格がないよ、夢ぢやどんな計畫でも立てられるからな、俺は俗人ぢや俗界を超越するには一度俗界を通つて來ての後の話よ、本當の仙人は俗界の眞只中にちやんと修業をやつて居るものぢやが俺は仙人には成りたくない。



府立大阪工業試驗所の火災に就いて

第四部委員會

△序言
△都市公舘としての建物
△原因の不明と建物の抵抗力
△消防隊の努力と都市の要路
△損害の程度
△結論

△序言

大正七年六月十日午後四時十分、堂島濱通四丁目に在る府立大阪工業試驗所構內東北隅木造洋舘二階建（百二十坪）の西北角階上電氣室の床下より發火、同六時同建物を全燒せるのみにて鎭火せしむることを得たり。

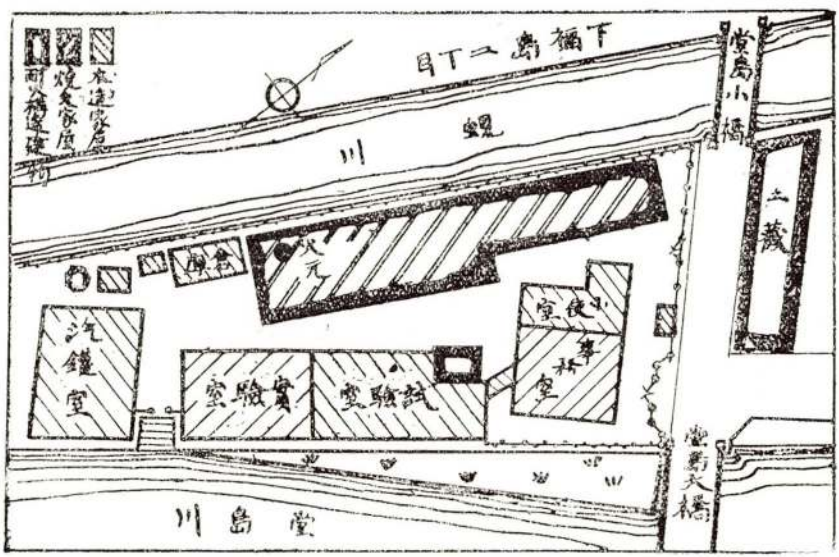
幸にして當日は西南の微風なりしと、日中の事とて各消防隊の活動に大なる便宜を與へたるも、一時黑烟天に漲り、警鐘の響音市民の耳朶を打ち殊に附近所在に重要なる耐火構造物なきが爲めに多少疑虞の念に襲はれたり、殊に連る晴天の氣候の際會にして乾燥し切れる木骨建築の事とて火の手早く、同舘を一時に猛火の狂奔

に委するの止むを得ざりし有様にて消防隊も一時手の付け様なかりしが、地所堂島の西端に位して、水利の便大によろしく僅かに同館の焼失に止まり、工業試驗所の全滅を見ることなかりしは不幸中の幸とすべし。

此回の火災は特に報告すべき重要なる材料なしとするも都市問題に關連して多少の參考とすべき事項なきに非ず、依つて調査報告を掲げたる所以なり。

△都市公館としての建物

府立大阪工業試驗所は明治二十三年堂島濱通貳丁目に大阪商品陳列所設置の際同建物内に附して之を設け、明治三十六年屬獨立して其面目を更めたるが、同四十二年北區大火の砌、全部類焼の不幸に遭遇し、一時元堂島女學校跡の一小建物内に事務を執りたりしが、同四十五年新たに堂島西端の一角を整理して敷地壹千貳百六十餘坪を得新築費約六萬圓を投じて現在建物七百餘坪を建設し得たり、乍然經費豫算額の都合により殆んど全部木造「モルタル」塗瓦葺にして



二階建二棟、平屋建數棟を新築したりと雖、爾來內部の設備は漸を追ふて之を整頓し、殊に最近諸工業の勃興に伴ひ、各方面の要求に應酬して、化學工業諸材料の研究試驗に從事し、重要なる報告機關の一として關西に於ける重大なる任務を遂行しつゝありき。されば分析機械、電氣機械試驗機械器具等の價格評價は四十八萬六千餘圓に上り、本年八月一日よりは國立工業試驗所に引繼く迄の規模を有せしものなり。

現在敷地は堂島濱通四丁目の一角に在りて南に堂島大橋を控へて堂島川に沿み、北に堂島小橋を架して蜆川に接し、其主要なる任務の事業地として好箇の地の利を占め得つゝあるものなり、只慨むらくは將來の大工業都市に對する重要機關たるべき所在地としては敷地廣域何等の擴張を許さゞる點に在り、更らに此種重要機關の建築が一朝其一部を自火燒失して內外共に一大打擊を蒙りたるは如何にも遺憾至極にして聊か識者の一考を煩はさゞるを得ざるものあり。

△原因の不明と建物の抵抗力

出火の場所は北側二階建木骨「モルタル」塗西北部なりとせらるゝも其原因は遂に不明なるが如し、或は漏電とせらる、近時此種木骨「モルタル」塗建物の自火爲有に歸するものは殆んど出火原因の不明に歸するは甚だ遺憾にして建築電氣兩界に於ける重要なる研究問題の一とすべきものなることなるべし。蓋し此種可燃性建物の自滅力早く、原形を殘すことなく、灰燼に歸し何等の証據を殘さゞるが爲めに其眞相の常に不明に葬らるゝは、止むを得ぬ事情なるべしと雖、又屢これあるがために罪を漏電に歸するは遺憾至極とすべし。

唯此種構造物の特長として注意すべきは、外裝の不燃性なるが爲めに類燒に際しては一時的の抵抗力を有し、自火の際に當りては外部へ與ふべき損害を稍低減せしむるの利あることなりとす。而して一朝自家出火の際には火の廻り頗る早く猛火忽ち全部を包むの不利ある點なりとす。

今回の火災に見るも其二階床下より發火せる

が爲めに内部は忽ち猛火の狂亂に任せ一時手の付けられぬ有樣となりたるは幾多の前例と其軌を一にす、往年回生病院の自火燒失せる、最近三越呉服店舊舘の自燼灰滅せる際の如き恰も符節を合せる如し、而して消防隊の努力活動により其外圍の壁体が注水のために一種の防火壁となり半壞のまゝ外方民家への燃燒を遮斷し得たるも同樣にして今回の場合もよく消防隊の巧みなる防火手段を窺知し得らるゝは自然數多の實驗研究によつて得たる結果と認め得らるべき也。

乍然此種建築物が一朝强風に襲はれて猛火の狂奔頗る猛烈なる場合に在りては、消防隊の努力も其甲斐なく、漸を追ふて倒壞類燒して如何ともすべからざるに至るものなり、蓋し其准耐火性を援助して注水を充分ならしむること不可能なる場合に於ては、却つて倒壞剝裂して被害を他へ及ぼすべき本性を發揮するが爲めに、瞬時にして數棟を燒失したる大阪府立病院の建物の如く、一種の危險構造物たるなり。

されば府立工業試驗所が今回の火災に於て僅かに其北半の建物を烏有に歸したりと雖此種の都市に於ける重要建築物が斯くの如き可燃性建物なることは根本に於て頗る不得策なる不安心なることゝいふべし、況んや内部設備の完成を期するために各種重要高價なる器械類を購入配備し、各種の貴重且危險なる藥品を保有する工業試驗所が其任務を遂行する上に於て、其使命を國家工業の進歩發展の前途に囑する事實に於て一日も早く、耐火耐震構造の建設物とすることの府市に執りても國家に執りても焦眉の急たることを言を待たず。若し夫れ此等重要なる調査機關にして一朝閉塞消滅せんか、國家の損害、工業上の打撃は蓋し甚大なるものあらん、世上識者の覺醒努力に待つもの頗る多しとなす。

△消防隊の努力と都市の要路

近時頻々たる火災の報道は都市に於て殊に甚しく殆んど寧日なからんとす、蓋し木造家屋の櫛比雜聚の現狀に在りては止むを得ざる現象に

して、都市政策の一日も忽にすべからざる反面の事實を、日日夜々痛切に默示せるものと解釋するを至當とすべからずや。

されど現狀の改善救濟は到底短時日の善くする處に非ず、市府當局者が苦心經營は之を長き將來に待たざるべからざると同時に現時に順應すべき方策は一日も怠るを許さゞるものあり、而して頻々たる災害が殆んど大事に到らずして消鎭せらるゝは實に當局者の努力と各消防隊の活動とが善く其効を奏せるものと感謝措く能はざるものあり。

今回罹災の工業試驗所は地域に於て頗る水利の便ありしと共に交通要路の連絡亦宜しかりしに依ると雖も當局者がいち早く堂島大橋南詰に非常線を張り東方は堂島四丁目河岸を遮斷し、北方亦臨機の所置を執り、各消防隊亦急擧奔馳して活動し、午後五時前後に於て堂島南岸に六臺の蒸氣唧筒隊整列するあり堂島大橋北半に一臺、同南詰沿岸に更に三臺の消防隊其配備に就ける如きは會以て其意氣火勢を壓するの慨ありといふべし。

されど中之島北岸の要路は堂島大橋の考朽頽齡せるが爲に南詰の參集せる數隊は遂に其努力を遂ぐるの機會を失し、堂島濱通の主要路は道幅甚だ狹隘にして不便尠なからざるに加へて蜆川沿岸の要路は到底是等防火隊の活動を許ざるゝ事實は都市現狀の頗る不整頓なる極めて亂雜なるを明確に示したるものといふべし。幸にして猛火は先着三四隊の努力によつて其勢を挫かれて大事なかりしと雖、不幸にして猛風一陣の大火と一變せしとせんか、此等消防隊の勇氣も其進退應戰の要路に窮して如何ともすべからざるものありしなるべし。

△損害の程度

今回燒失せる建物は北方蜆川沿岸に臨みたる木造二階建「モルタル」塗家屋にして實驗室として使用せられたるもの階上は電氣化學室に當てられ階下は研究室分析室に分劃せられたる由なるが、自火の災害が此一屋の燒失に止まりたる

は不幸中の幸とすべし。

されど階上化學室の機械類は之を灰燼中に葬り終り現時に於て貴重なる器品の燒失は遺憾至極といふべし、殊に其影響する處は現時の化學工業界の活動に一大打撃を與ふる結果を齎したるは大なる損害といふべし、階下に在りたる器機類は幸にして日中退廳前なりしため所員の搬出努力に負ふ所多かりし如く結局損害高の全額は約十萬圓位なりといへば事業回復の途なきに非ざるべし。

尙ほ保險は神戸、海上、明治、共同、日本、豐國、千代田、横濱の七火災保險會社に合計三十萬六千四百三十四圓の契約あり、內機械器具二十四萬千八百八十六圓にして殘部は建築物全部に對するものなる由なり。

△結　論

今回燒失せる府立大阪工業試驗所の火災は其構內の一部建物を燒失せるに止まり、建築物の火災としてまさで重要視すべき性質のものに非ざるも、之を都市公舘としての重要機關の一たる建築物として觀察するときは其影響する處頗る廣く、識者の注目すべき一災害たるを失はず又都市の計畫經營の見地より推して此一火災の現出せる一事實は、遇々戰慄すべき亂雜なる現狀を表示せる一事件と見做すことを得べし、これ本委員會が特に報告書を作成して誌上に特記する所以にして他日の參考資料の一たるべきを信ず。





故名譽賛助員
安永義章氏

大正七年七月六日、本會名譽賛助員工學博士安永義章氏逝く。嗚呼哀い哉。氏が本會の目的と期待とに多大の賛同を與へられ、好く名譽賛助員の推選を承諾せられたるは、實に本年二月の事なりとす。爾來本會の事業施設は漸く其緒に著くに過ぎずして、今後の劃策經營につき該博なる氏の高見を聽くの暇なかりしは誠に痛恨の至ならずや。今や氏既に白玉樓上の客となる嗚呼悲い哉・謹んで哀悼の意を表す。



會報

會誌

一、本會雜誌第一輯第拾號は七月廿五日之を刊行し、各府縣知名有力者、各學會、協會及各新聞社、並に建築に關係ある各學校に寄贈配布したり。

交換雜誌

建築雜誌（建築學會）
建築世界（建築世界社）
住宅（住宅改良會）
鐵道協會雜誌（鐵道協會）
工業之友（工手學校）
內外土木建築時報（內外土木建築時報社）

寄贈圖書雜誌及新聞紙

內外土木建築時報
通俗衛生
木材新聞
ペイント商報
日本美術協會報告第二輯
早瀨塗料商報

新入會員

左の諸氏は今回本會普通贊助員たらんことを申込まれたるより、理事會の決議により承諾せり。

影山丈夫　船越安太郎

會合

△理事會

日時　大正七年八月六日
會場　大阪倶樂部
出席　片岡、日高、池田、瀨戸、波江、
記事

一、納涼親睦會開催準備の打合をなし、終身贊助員招待狀會員への通知狀發送することを決定したり。

一、會誌拾壹月號編輯に關し打合する處ありたり。

一、未入會員は一時特別贊助員として入會を承諾することに決せり。

△臨時理事會

日　時　大正七年八月十四日午後一時より三時
會　場　本會事務所
出　席　池田、日高、瀬戸、野村、波江。
記　事
一、近時米價問題勃發と伴ひ、各市騷動突發せるを以て、宴會を延期する必要ありとし、夫々通知狀を發送したり。

△臨時理事會

日　時　大正七年八月廿一日午後五時
會　場　本會事務所
出　席　池田、日高、瀬戸、波江、片岡、
記　事
一、來廿六日大濱に於て納涼睦親會を開催することに決し之が準備につき打合をなせり。

△納涼親睦會

日　時　大正七年八月廿六日午後六時—十時
會　場　堺大濱一力樓
出　席　會員計二十四名
池田(實)、今林、伊藤(正)、新海、大林、大倉、小寺、小川、片岡、葛野、吉木、吉井、谷本、谷、波江、浦、小林、荒川、佐藤(四)、橋本、平井、日高、瀬戸、波江、
特別賛助員、計七名
馬野君、村井君、古賀君、田中(豊)君、田中(綱)君、中村(鎭)君、松田(義)君
終身賛助員計二十一名。
松村氏(松村組)　熊取谷氏　大原氏(大倉組)
中川氏　須賀氏　竹中氏(竹中組)
濕山氏　鴻池氏(鴻池組)　木村氏(秋山小林店)
松尾氏　木村氏(木村組)　多田氏(淺野セメント店)
井上氏　德政氏(清水組)　東松氏
辰巳氏　小倉氏(大林組)
大高氏　橋本氏(橋本組)
駒井氏　錢高氏(錢高組)

記事

一、午後七時開宴、片岡理事長會員の總代として挨拶あり竹中組主人來賓を代表して答辭あり。
一、當夜餘興として、米粒調べの懸賞あり、當票の結果左の如し。
實數千三百五十個(葡萄酒用カップに盛れり)
第一等　小寺　(一、三五〇)
第二等　吉木　(一、三五〇)
第三等　新海　(一、三四四)
第四等　大倉　(一、三二〇)
第五等　田中綱　(一、二九〇)
一、涼風徐ろに來つて、清宴正に酣なりし頃、涙花節「神崎東下り」の一節に續いて、新狂言「建築」の餘興あり
一、散會せるは午後十時なりき。

◘編輯だより◘

秋風颯々の候と相成申候、燈火是より親しむべく、本誌の將來も更らに活躍を期申候

直木工學博士の力說せらるゝ技術家の覺醒は漸を追ふて斯界に到來致すべく、氏の所論に共鳴せらるゝの諸彥は、同氏著「技術生活より」を御一讀あらんことを不堪希望候

「議院建築意匠設計募集規程」一封議院建築局より本會宛到來仕候間、特に本號附錄として揭載仕候。從つて紙面の都合上各國建築條例の續稿は次號に引續き揭載可仕候

本誌へ御投稿御希望の諸彥は、御申越次第本誌原稿用紙發送仕るべく候間、奮つて御投稿あらんことを希望仕候

本誌購讀御希望の諸彥は、本會事務所宛、御申越相成度、又購讀料金御發送相成被成下候節は、振替口座「大阪三九九七五番」宛御拂込相成度此段申添候。

役員及職員

理事長	片岡安（寅）（主計）
理事	池田一郎（編輯）
	野村文吾（編輯）
	瀬戸肝（編輯）
	高波日出夫（主記）
	江梯松喬
編輯補	本田四郎
	佐藤正文
	伊藤禹象
書記	岡部顯則
	小谷信藏

會員	一一一	會員（地方）	二三
名譽賛助員	一七	終身賛助員	三〇
特別賛助員	一四	普通賛助員	二〇九

本誌及廣告料定價表

本誌	冊數	定價	郵稅
	一冊	金參拾錢	貳錢
	十二冊	參圓六拾錢	貳拾四錢

廣告料	種別	金額
	半頁	八圓
	一頁	拾五圓
	特別頁	貳拾圓
	裏表紙表	貳拾五圓

大正七年九月二十日印刷
大正七年九月廿五日發行　（每月壹回　廿五日發行）

大阪市北區相生町一三四
電話（東一八八三番）

發行兼編輯人
兼印刷人　伊藤幸太郎

大阪市東區內淡路町一丁目三十一番地

印刷所　大阪活版所

大阪市東區今橋一丁目十一番地

發行所　關西建築協會

電話本局二二四一番
振替口座大阪三九、九七五

議院建築意匠設計懸賞募集規程

議院建築意匠設計懸賞募集規程

第一條　臨時議院建築局ハ本規程ニ依リ議院本館ノ建築竝敷地内一般配置ニ關スル意匠設計ヲ募集ス

第二條　應募者ハ帝國臣民ニ限ル

第三條　募集ヲ第一次及第二次ニ分ツ

第一次當選者ニ非サレハ第二次募集ニ應スルコトヲ得ス

第四條　應募設計ノ提出期限左ノ如シ

第一次　大正八年二月十五日正午迄

第二次　大正八年九月十五日正午迄

前項ノ期限迄ニ到達セサルモノハ事由ノ如何ニ拘ラス之ヲ受理セス

第五條　應募設計ハ臨時議院建築局ニ（大藏省構内）提出スヘシ

第六條　設計ニ關スル條件左ノ如シ

一、建築敷地ハ東京市麹町區永田町一丁目二丁目ニ於ケル附屬第一號圖面朱線區域トス但シ著名ノ部分ヲ以テ其ノ區域ト爲スヲ妨ケス

一、本館ハ三層トシ建坪ハ三千六百坪内外トス但シ坪數ハ壁眞ヲ以テ計算ス

一、建物ハ東方ヲ正面トス

一、建築ノ樣式ハ應募者ノ隨意ナリト雖議院トシテ相當ノ威容ヲ保タシムルコトヲ要ス

一、建物ハ耐震耐火及耐久構造トシ建築材料ハ己ムヲ得サルモノノ外本邦産ヲ用フヘシ

一、本館ノ建築總工費ハ五百萬圓（大正二年ヨリ同六年ニ至ル五箇年平均ノ物價及勞銀ニ依ル）以内トス但シ裝飾（構造的以外ノモノ）、煖房、通風、電燈、假設備、造庭其ノ他附屬設備費及事務費ハ之ヲ包含セス

一、本館内ニ配置スヘキ房室ハ附屬所要室數及坪數表ニ依リ其ノ排列ハ尙將來多少ノ增築ヲモ豫想シ附屬第五號間取略圖ヲ參考ト

シテ適當ナル考案ヲ爲スヘシ

一、貴衆兩院ノ位置ハ附屬第五號圖取略圖ノ通リ建物ノ左翼ヲ貴族院右翼ヲ衆議院トシ中央部ニハ皇室用其ノ他兩院共通ノ室ヲ配置スヘシ

一、門ハ中央正門一箇所貴衆兩院正門各一箇所ノ外適當ト認ムル位置ニ通用門ヲ設クヘシ

第七條　提出スヘキ圖面及書類左ノ如シ

第一次

一、敷地內一般ノ配置圖　縮尺八百分ノ一
一、各階平面圖　縮尺四百分ノ一
一、立面圖正面、背面及一側面　縮尺二百分ノ一
一、斷面圖議場及中央廣間等ヲ含ム縱斷面　縮尺二百分ノ一
一、略說明書

第二次

一、敷地內一般ノ配置圖　縮尺六百分ノ一
一、各階平面圖　縮尺二百分ノ一
一、立面圖正面、背面及一側面　縮尺百分ノ一
一、斷面圖議場及中央廣間等ノ重要室ヲ含ム縱橫斷面二面以上　縮尺百分ノ一
一、中央正面主要部詳細圖一箇所　縮尺二十分ノ一「ワットマン・ダブルエレファント」全紙大
一、透視圖
一、略說明書

第八條　圖面及書類ハ次ニ定ムル所ニ從ヒ之ヲ作成スヘシ

一、圖面ハ總テ良好ナル製圖紙ヲ用キ墨ヲ以テ製圖シ寸法ハ日本尺ヲ用フヘシ

一、文字ハ總テ楷書ヲ用フヘシ已ムヲ得ス外國語ヲ用フル場合ニハ片假名ヲ以テ記載スヘシ

寸尺ヲ示ス數字ニ限リ西洋數字ヲ用フヘシ

一、圖面ハ透視圖ノ外一切著色スヘカラス

一、配置圖ニ於ケル建物ノ平面ハ單ニ外廓線ノミトシ本館、附屬建物其ノ他門、庭園及道路等ヲ現スヲ要ス

一、平面圖ニ於ケル柱壁等ノ斷面ハ濃墨ヲ以テ塗抹シ造付ノ座席家具ハ之レヲ記入スヘシ

一、圖面ニ記入スヘキ各室ノ名稱及坪數等ハ

番號符號等ヲ用キス直接其ノ位置ニ記入スヘシ

一、立面圖及詳細圖ハ各部ノ意匠ヲ明瞭ナラシムル爲角度四十五度ノ光線ヲ以テ投影及陰影ヲ淡墨ニテ現スヘシ

一、斷面圖ニ於ケル壁、床、天井等ノ斷面ハ其ノ輪郭ヲ太キ墨線ニテ描キ淡墨ニテ塗抹シ其ノ內部ノ構造ヲ示スニ及ハス

一、透視圖ハ單色ヲ以テ仕上ケ其ノ畫面ハ本館ノ東北隅ト一致シ且建物ノ東正面ト三十度ノ角度ヲ保タシメ其ノ視點(駐立點)ハ建物ノ同一隅ヨリ三百尺ノ距離ニシテ其ノ水平線ハ第二階(主階)ノ床上端ト一致セシムヘシ

一、略說明書ハ主トシテ設計ノ說明ニ止メ其ノ意匠ノ要旨材料及構造ノ概略ヲ簡明ニ記載スヘシ仕樣書類似ノ明細ナルモノハ之ヲ要セス

第九條　圖面及書類ニハ總テ署名ニ代フルニ暗號ヲ記載シ別ニ暗號ノミヲ表記セル封筒內ニ當選ノ通知ヲ受ケ又ハ圖書類ノ還付ヲ受クヘキ者ノ住所氏名ヲ明記シタル紙片ヲ封入シテ之レニ添附スヘシ尙該封筒內ニハ別封トシテ應募者ノ住所、職業氏名及暗號ヲ明記シタル紙片ヲ封入シ其ノ表面ニハ當該暗號ノミヲ記載スヘシ第一次應募者ニシテ當選セサル場合ニハ此ノ別封ハ開封セス圖書類ト共ニ之ヲ還付スヘシ

第一次ニ用キタル暗號ハ之ヲ第二次ニ用フヘカラス

第十條　圖面及書類ハ一括シテ堅牢ナル容器ニ納メ嚴封ヲ施シ表面ニハ宛名、應募者ノ暗號及應募設計タルコトヲ表示スル文字ノ外記載スヘカラス

第十一條　設計其ノ他應募ニ要スル一切ノ費用ハ應募者ノ負擔トス

第十二條　應募設計ハ審査ノ上當選者ヲ定メ左ノ賞金ヲ交付ス

第一次當選

二十個　各金壹千圓

第二次當選

一等賞　金壹萬圓

二等賞　金六千圓

三等賞　各金參千圓

賞金ハ第二次當選者決定ノ後ニ交付ス

第一次當選者ニシテ第二次募集ニ應セサルトキハ賞金ヲ交付セス但シ本人ノ死亡其ノ他特別ノ事由アリト認ムルモノハ此限リニ在ラス

第二次賞選者ニハ第一次當選ノ賞金ヲ交付セス

第十三條　左ノ各號ノ一ニ當ルモノハ之ヲ無效トス

一、他人ノ意匠ヲ剽竊シ若ハ摸寫セリト認メタルモノ

一、不正ノ手段方法ニ依ル設計ナリト認メタルモノ

一、其ノ他本規程ノ重要ナル事項ニ違反セリト認メタルモノ

第十四條　審査員ハ募集ニ加ハリ若ハ應募者ニ幇助ヲ與フルコトヲ得ス

第十五條　審査ニ對シテハ說明ヲ求メ又ハ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得ス

第十六條　審査ノ結果ハ第一次ハ大正八年四月十五日迄第二次ハ大正八年十二月十五日迄ニ官報ヲ以テ之ヲ發表スヘシ

第十七條　賞金ハ之ヲ本人ニ交付ス若シ本人死亡シタルトキハ之ヲ相續人ニ交付ス

第十八條　賞金ハ大正八年十二月十六日ヨリ大正九年三月三十一日迄ニ臨時議院建築局ニ之ヲ請求スヘシ

第十九條　當選設計ノ圖書及其ノ意匠ハ臨時議院建築局ノ所有ニ歸スルモノトス

第二十條　當選者ノ意匠設計ト雖實行ノ場合ニ於テハ之ヲ取捨變更スルコトアルヘシ

第廿一條　當選セサル設計圖書ハ臨時議院建築局ノ費用ヲ以テ之ヲ還付スヘシ

第廿二條　臨時議院建築局ハ應募設計圖書ノ保管及還付ニ關シ充分ノ注意ヲ爲スト雖萬一損害ヲ生シタル場合ニハ總テ其ノ責ニ任セス

第廿三條　第一次當選及第二次應募ノ圖面竝書

類ノ全部若ハ一部ハ第二次當選者決定ノ後ニ於テ之ヲ公表スルコトアルヘシ

第廿四條　附屬圖面及書類左ノ如シ

一、第一號　敷地測量圖　一葉
一、第二號　敷地附近市街圖　一葉
一、第三號　敷地高低測量圖　二葉
一、第四號　敷地地質調査及耐壓試驗成績圖　一葉
一、第五號　間取略圖　三葉
一、所要室數及坪數表
一、應募者心得書

（圖面ハ次號ニ掲載スヘシ）

審査長及審査員

一、審査長ハ臨時議院建築局長官ヲ以テ之ニ充ツ
一、審査員左ノ如シ

臨時議院建築局參與官　柳田國男
臨時議院建築局參與官　寺田榮
臨時議院建築局常務顧問工學博士　塚本靖
臨時議院建築局常務顧問工學博士　丹羽鋤彥
臨時議院建築局常務顧問　山下啓次郎
臨時議院建築局常務顧問工學博士　辰野金吾
臨時議院建築局常務顧問工學博士　横河民輔
臨時議院建築局顧問工學博士　古市公威
臨時議院建築局顧問工學博士　中村達太郎
臨時議院建築局顧問　正木直彥
臨時議院建築局顧問工學博士　曾禰達藏
臨時議院建築部技師　矢橋賢吉

所要室數及坪數表

貴族院ノ部

二階（主階）

室名	室數	坪數	摘要
議場	一	二一〇	議席四百五十席ヲ演壇ヲ中心トシテ孤狀階段形ニ排列シ通路共一席當坪數四合六勺以上トス議席ハ六席迄ヲ連續セシムルコトヲ得
玉座	一	七	議場正面議長席後方中央ニ設ク但シ此坪數ハ議場坪數中ニ包含セス
議長席		一席	議場正面中央ニ設ク
書記官長席		一席	議長席ノ右側ニ設ク
書記官席		六席	書記官長席ニ接近シテ設ク
演壇		一席	議場正面議長席ノ前方ニ設ク

速記者席		四席	演壇ノ前方ニ二席宛向ヒ合セニ設ケ速記者ハ一階ノ控室ヨリ坑道ニ由リ直チニ其ノ席ニ出入スルモノトス
國務大臣及政府委員席		右左各約二〇席	議長席ノ左右ニ列ニ設ケ尚其ノ後方ニ相當ノ空所ヲ存スルヲ要ス
議長室	一	三五	議場ニ接近シ之ト往復至便ナル位置ニ設ク
應接室	一	一七	議長室ニ接近シテ設ク
副議長室	一	一七	議長室附近ニ設ク
應接室	一	一六	副議長室ニ隣接シテ設ク
書記官長室	一	一七	議長室ニ隣接シテ設ク
書記官室	一	一八	書記官長室ニ隣接シ若ハ其ノ附近ニ設ク
議事課	一	三五	議場及書記官長室附近ニ設ク
應接室	一	一六	書記官室附近ニ設ク
議員脱帽室	適宜	適宜	議場及部屋ノ附近ニテ本館出入ニ當リ至便ナル位置ニ設ケ一人當坪數一合三勺以上トス但シ一部分ヲ一階ニ設クルヲ妨ケス
部室	九	各三〇	議員ノ控室ニ充ツ議場附近ニ設ケ各室ノ大サ略同一トシ且各所ニ散在セシメサルヲ要ス但シ部室間ノ間仕切ハ將來移動スルコトアルヘキヲ以テ成ルヘク簡易ナル構造トスルモノトス
豫備室	二	各三〇	將來部屋トシテ使用スル見込ノモノ

議員應接室	一	一七	部室及外部トノ連絡至便ノ位置ニ設ク
議員便所及洗面所	一	一二	議場及部室ノ附近ニ設ク
化粧室	一	五	議院洗面所及整衣所トシ議場ノ附近ニ設ク
內談室	一	一五	部室ノ附近ニ設ク
議員食堂	一	九〇	議場ニ近ク一階炊事場ト連絡至便ナル位置ニ設ク別ニ小食堂一室ヲ一階ニ設クルモノトス
配膳室	一	一〇	食堂ニ隣接シ食料品昇降器ヲ以テ厨房配膳室ト連絡セシム
喫茶室	一	一〇	食堂附近ニ設ク
醫務室	一	五	議場附近ニ設ク
階段室	適宜	適宜	

三階

室名	室數	坪數	摘要
傍聽席			議場上部ノ周圍ニ於テ所要ノ座席ヲ設クルニ足ルヘキモノトシ已ムヲ得サル場合ニハ二層トスルヲ妨ケス但シ御座所上及議長席後方ニハ之ヲ設ケサルコト
御座所	一	一六	議長席ノ向正面中央ニ設ク
皇族席	一	七	議長席ノ向正面ニ設ク

室名	室数	坪数	摘要
傍聽席		計七二五席	外交官（約三十五席）議員（約四十五席）官吏（約四十五席）公衆（約五百席）及新聞記者（約百席）用トス
新聞記者席			各造付卓子ヲ備フルモノトス新聞記者席ニハ一席當坪數三合以上トシ其他ハ同二合以上トス
傍聽人控室	適宜	計一〇〇	傍聽席後方ニ設ケ專用階段ニ由リ傍聽人入口ニ連絡セシム但シ他ノ交通ヲ成ルヘク遮斷スルコトナカラシムヘシ
洗面所便所	一	一二	傍聽人用トシテ傍聽席附近ニ設ク
内談室	二	各一五	委員室附近ニ設ク
新聞記者控室	一	二〇	新聞記者傍聽席ニ連絡至便ニシテ且新聞記者事務室ト連絡便利ナル位置ニ設ク
委員室	一	九〇	豫算委員室トシテ使用ス
	二	各四〇	委員室ノ間仕切ハ將來改廢スルコトアルヘキヲ以テ成ルヘク簡單ナル構造トスルモノトス
	六	各三〇	
	六	各一五坪乃至二坪	
洗面所便所	一	一二	各委員室ニ對シ略中央ニ設ク
喫茶室	一	一〇	豫算委員室附近ニ設ク
委員課	一	四五	委員室附近ニテ階下事務室トノ連絡便利ナル位置ニ設ク

一階

室名	室数	坪数	摘要
應接室	一	一五	
電話室	一	一〇	議員及事務員用トシテ便利ナル位置ニ設ク
書庫	一	四五	室内ヲ二層ニ分チ書架ヲ排列ス但シ本室ハ圖書閲覧室ト共ニ將來之ヲ館外ニ移シ其跡ハ委員室其他ニ使用スルモノナレバ假書庫トシテ適當ノ位置ニ設クルモノトス
圖書閲覧室	一	二〇	書庫ニ隣接シテ設ク
階段室	適宜	適宜	
速記課	一	七〇	議場ト連絡至便ナル位置ニ設ク但シ速記者ハ坑道ニ由リ速記者席ヘ直接出入スルモノトス
庶務課	四	計一一五	成ルヘク大ナル室トシ館外トノ交通便利ナル位置ニ置キ會計掛仕拂所ヲ設ケ又傍聽券交付室ニ隣接シテ支室ヲ設ク
謄寫室	二	一〇	庶務課附近ニ設ク
守衛室	一	二五	守衛掛及同宿直室トシテ議員用正面昇降口附近ニ設ク
守衛詰所	一	各七	公衆出入ノ取締ニ適當ナル要所ニ設ク
宿直室	一	七	守衛詰所ニ隣接シ館外トノ交通便利ナル位置ニ設ク

警察官詰所	一	警察官幹部詰所及同宿直室ニシテ議員用正面昇降口附近ニ設ク
	二五	
傍聽券交付室	一	傍聽人ハ通用門ヨリ入リ傍聽券交付室ヲ經テ便利ナル位置ニ設ケラレタル昇降口ヨリ館内ニ入ルヘキヲ以テ之ニ適當ナル位置ニ設クルモノトス
	七	
傍聽人昇降口	一	適宜
	一〇	傍聽人昇降口附近ニ設ク
下足及携帶品置場	一	傍聽人昇降口脇ニ設ク
	三〇	
傍聽人脱帽室	適宜	傍聽人昇降口竝下足及携帶品置場附近ニ設ケ一人當坪數六勺以上トス
事務員應接室	一	各課ニ便利ナル位置ニ設ク
	一五	
事務員食堂	一	
	一七	
事務員宿直室	一	
	一〇	
事務員洗面所便所	二	
	一〇	
化粧室	一	
	五	
議員小食堂	一	炊事場附近ニテ階上議員用諸室ト連絡便利ナル位置ニ設ク
	三〇	
酒保及雜貨室	一	
	一八	
理髪室	一	階上トノ連絡便利ナル位置ニ相接近シテ設ク
	一五	
浴室	一	
	一七	

議員洗面所便所	一	
	一二	
議員脱帽室	適宜	成ルヘク二階ニ置キ已ムヲ得サルトキハ本階ニモ分置スルコトヲ得
炊事場	一	
	三〇	
配膳室	一	炊事場ハ一階二階各食堂トノ連絡及館外トノ交通便利ナル位置ニ設ケ配膳室食器室及洗場ハ炊事場ニ隣接又ハ接近シテ設ク
	一〇	
食器室	一	
	一〇	
洗場	一	
	一〇	
使丁室	一	館外トノ交通便利ナル位置ニ設ケ湯沸所及流場ヲ含ムモノトス
	三五	
電話室	一	
	五	
給仕室	一	
	八	
食料品貯藏所	適宜	炊事場附近ノ乾燥外ニ設クルコトヲ得
	二五	
使丁洗面所便所	一	炊事場及使丁室附近ノ乾燥外ニ設クルコトヲ得
	一〇	
	一	使丁室附近ノ乾燥外ニ設クルコトヲ得
	五	
使丁浴室	一	使丁室附近ノ乾燥外ニ設クルコトヲ得
	三	
倉庫	適宜	共通ノ部一階適當ノ位ニモ設クルコトヲ得
	計一五〇	
配氣室	適宜	氣溫及湯度調節ノ室トス議場床下ヲ以テ之ニ充ツル見込トス
	適宜	

室名	室數	坪數	摘要
混氣室	一	一六〇	議場床下ヲ以テ之ニ充ツル見込トス
階段室	適宜	適宜	
貴族院車寄	一	適宜	貴族院翼正面中央ニ設ク
支關	一	適宜	車寄ニ連續シテ設ク
昇降口	適宜	適宜	事務員公衆傍聽人等ノ各專用入口ヲ適宜ノ位置ニ設ク

衆議院ノ部

二階（主階）

室名	室數	坪數	摘要
議場	一	二一〇	議席四百五十席ヲ演壇ヲ中心トシテ弧狀階段形ニ排列シ通路共一席當四合六勺以上トス議席ハ六席迄ヲ連續セシムルコトヲ得
議長席		一席	議場正面中央ニ設ク
書記官長席		一席	議長席ノ右側ニ設ク
書記官席		六席	書記官長席ニ接近シテ設ク
演壇		一席	議場正面議長席ノ前方ニ設ク
速記者席		四席	演壇ノ前方ニ二席宛向ヒ合セニ設ケ速記者ハ一階ノ控室ヨリ坑道ニ由リ其ノ席ニ出入スルモノトス

國務大臣及政府委員席		左右各約二〇席	議長席ノ左右二列ニ設ケ尙其ノ後方ニ相當ノ空所ヲ存スルヲ要ス
議長室	一	三五	議場ニ接近シ之ト往復至便ナル位置ニ設ク
應接室	一	一七	議長室ニ隣接シテ設ク
副議長室	一	一七	議長室附近ニ設ク
應接室	一	一六	副議長室ニ隣接シテ設ク
書記官長室	一	一七	議長室ニ隣接シテ設ク
書記官室	一	一八	書記官長室ニ隣接シ若ハ其ノ附近ニ設ク
議事課	一	四五	議場及書記官室附近ニ設ク
議員脫帽室	適宜	適宜	議場及部屋ノ附近ニテ本館出入ニ當リ至便ナル位置ニ設ケ一人當坪數一合三勺以上トス但シ一部分ヲ一階ニ設クルヲ妨ケス
議員應接室	一	一六	控室ニ近キ適當ノ位置ニ設ク
議員控室	一	四五	各政黨ノ控室ニ充ツ議場附近ニ設ケ各所ニ散在セシメサルモノトス
	三	各四〇	控室間ノ間仕切ハ將來移動スルコトアルヘキヲ以テ成ヘク簡易ナル構造トスルコト
	一	三五	大控室ニハ成ルヘク幹部室ヲ隣接セシムルコト
	四	各二〇	

室名	室數	坪數	摘要
議員洗面所便所	一	一二	議場及控室ノ近傍ニ設ク
化粧室	一	五	議員ノ洗面所及整衣所トシ議場ノ附近ニ設ク
議員食堂	一	九〇	議場ニ近ク一階炊事場ト連絡シ便ナル位置ニ設ク
配膳室	一	一〇	食堂ニ隣接シ食器昇降機ヲ以テ厨房附膳室ト連絡セシム
喫茶室	一	一〇	食堂附近ニ設ク
警務室	一	五	議場附近ニ設ク
階段室	適宜	適宜	

三階

室名	室數	坪數	摘要
皇族席	一	八	議長席ノ向正面ニ設ク
傍聽席			議場上部周圍ニ於テ所要ノ座席ヲ設クルニ足ルヘキモノトシ已ムヲ得サル場合ニハ二層トスルモ妨ケス但シ議長席後方ニハ之ヲ設ケサルコト
			外交官（約二十五席）議員約三十五席）官吏（約四十五席）公衆（約千席）及新聞記者（約百席）用

室名	室數	坪數	摘要
傍聽席		計一、一三五席	新聞記者席ニハ各造付卓子ヲ備ツルモノトス新聞記者席ハ一席當坪數三合以上トシ其ノ他ハ同二合以上トス
傍聽人控室	適宜	計一〇〇	傍聽者後方ニ設ケ專用階段ニ由リ傍聽入口ニ連續セシム但シ他ノ交通ヲ成ルヘク遮斷スルコトヲカラシムヘシ
洗面所便所	一	一二	傍聽人用トシテ傍聽席附近ニ設ク
新聞記者控室	二	計五〇	新聞記者傍聽席ニ連絡便利且一階速記者事務室トノ連絡便利ナル位置ニ設ク
委員室	一	九九	豫算委員室トシテ使用スル室內適當ノ位置ニ「ガレリー」ヲ設ケ傍聽席（約百席）ニ充ツルモノトス
	一	四〇	
	三	各三五	委員室間ノ間仕切ハ將來改廢スルコトアルヘキヲ以テ成ルヘク簡易ナル構造トスルモノトス
	六	各三〇	
	六	各二〇	
	三	各一七	
洗面所便所	一	一二	各委員室ニ對シ略中央ニ設ク
喫茶室	一	一〇	豫算委員室附近ニ設ク
委員課	一	四五	委員室附近ニテ階下事務室トノ連絡便利ナル位置ニ設ク

一階

室名	室数	坪数	摘要
電話室	一	二〇	議員及事務員用トシ便利ナル位置ニ設ク
圖書閲覧室	一	三〇	主トシテ議員ノ圖書閲覧用ニ充ツ一階書庫ト連絡便利ナル位置ニ設ク但シ本室ハ將來書庫ト共ニ之ヲ館外ニ移シ其跡ノハ委員室ノ續ニ使用スル見込ナリトス
階段室	適宜	適宜	
速記課	一	七〇	道場ト連絡至便ナル位置ニ設ク但シ速記者ハ坑道ニ由リ速記者席ヘ直接出入スルモノトス
校正室	一	二〇	速記課ニ隣接シテ設ク
庶務課	三計	八五	成ルヘク大ナル室トシ窟外トノ交通便利ナル位置ニ置キ會計掛仕拂所ヲ設ケ又傍聽券交付室ニ隣接シテ支室ヲ設ク
守衛詰所	一	三〇	公衆通路ノ附近ニ設ケ面會人受付ニ兼用ス
	二	各七	公衆出入ノ取締ニ適當ナル要所ニ設ク
警務課	一	二五	正面昇降口附近ニ設ク
宿直室	二	二〇	正面昇降口附近ニ設ク
警察官幹部詰所	一	一五	傍聽人昇降口附近ニ設ク
警察官詰所	一	一五	警察官幹部詰所ニ隣接シテ設ク
傍聽券交付室	一	一五	傍聽人ハ通用門ヨリ入リ傍聽券交付室ヲ經テ便利ナル位置ニ設ケラレタル昇降口ヨリ館内ニ入ルヘキヲ以テ之ニ適當ナル位置ニ設クルモノトス
傍聽人控室	一	三〇	傍聽人昇降口ニ接續シ傍聽人用階段ノ附近ニ設ク
傍聽人脱帽室	適宜	適宜	傍聽人昇降口ノ附近ニ設ケ一人當坪數六勺以上トス
事務員應接室	一	一五	各課ニ便利ナル位置ニ設ク
事務員食堂	一	三〇	
事務員洗面所便所	一	一〇	
議員洗面所便所	一	一二	
化粧室	一	五	
酒保及雜貨室	一	一〇	
理髪室	一	一六	階上トノ連絡便利ナル位置ニ相接近シテ設ク
浴室	適宜	計二〇	
議員脱帽室	適宜	適宜	成ルヘク二階ニ置キ已ムヲ得サルトキハ本階ニモ分置スルコトヲ得
炊事場	一	三〇	炊事場ハ一階二階各食堂ノ連

配膳室	一	一〇	給及館外トノ交通便利ナル位置ニ設ケ配膳室食器室及洗場ハ炊事場ニ隣接又ハ接近シテ設ク
食器室	一	一〇	
洗場	一	一〇	
使丁室	一	五〇	館外トノ交通便利ナル位置ニ於ケ沸所及流場テ含ムモノトス
電話室	一	五	
給仕室	一	一五	
書庫	一	二五	室内テ二層ニ分チ書架テ排列ス但シ本室ハ三階圖書閲覧室ト共ニ將來之テ館外ニ移シ其ノ跡ハ事務室トシテ使用スルモナレバ假書庫トシテ適當ナル位置ニ設クルモノトス
食料品貯藏所	一	二五	炊事場附近ノ乾燥外ニ設クルコトヲ得
燃料庫	一	一〇	炊事場及使丁室附近ノ乾燥外ニ設クルコトヲ得
使丁洗面所便所	一	五	使丁室附近ノ乾燥外ニ設クルコトヲ得
倉庫	適宜	計一二五	共通ノ部一階適當ノ位置ニモ設クルコトヲ得
配氣室	適宜	適宜	氣溫及溫度調節ノ室トス議場床下ヲ以テ之ニ充ツル見込トス
混氣室	一	一六〇	議場床下ヲ以テ之レニ充ツル見込トス
階段室	適宜	適宜	

貴衆兩院共通ノ部

二階（土階）

名	室數	坪數	摘要
總理大臣室	一	三五	中央主要ナル位置ニ設ク
大臣室	一	二〇	總理大臣室ニ隣接シテ設ク
應接室	一	二〇	主トシテ總理大臣用ニ充ツ
內閣應接室	一	一五	大臣室附近ニ設ク
附屬室	一	二五	大臣室附近ニ設ク
內閣附屬室	一	一五	大臣室附近ニ設ク
內閣書記官室	一	二五	大臣室附近ニ設ク
			以上何レモ集合セシメ連絡至便ナラシムコト
	二	各二五	全部相隣接シテ設ク已ムヲ得サ

衆議院車寄	一	適宜 衆議院翼中央ニ設ク
支關	一	適宜 車寄ニ連續シテ設ク
昇降口	適宜	適宜 事務員公衆傍聽人等ノ各專用入口テ適當ノ位置ニ設ク

室名	室數	坪數	摘要
政府委員室	二 六	各二〇 一二坪乃至一六坪	ルトキハ一二室ヲ限リ他階適當ノ位置ニ之ヲ設ケルコトヲ得
電話室	一	五	
給仕室	一	五	
帝室階段	一	適宜	
帝室階段	一	適宜	
帝室玄關	一	適宜	中央正面ニ設ク
帝室車寄	一	適宜	中央正面ニ設ク
階段室	適宜	適宜	

三階

室名	室數	坪數	摘要
便殿	一	三五	中央主要ナル位置ニ設ク
皇族室	一	二〇	便殿ニ接近シテ設ク
貴賓室	一	二五	便殿附近ニ設ク
供奉員室	二	各一〇坪乃至一五坪	便殿附近ニ設ク

室名	室數	坪數	摘要
化粧室	一	計一五	主トシテ皇族用及貴賓用ニ充ツルモノトス
便所	一		
便殿附屬室	一	一二	便殿ニ接近シテ設ク
兩院協議室	一	五〇	貴衆兩院ト交通便利ナル位置ニ設ク
附圖室	一	二〇	兩院協議室ニ隣接シテ設ク
帝室階段	一	適宜	
階段室	適宜	適宜	

一階

室名	室數	坪數	摘要
郵便電信室	一	三〇	館外ト交通便利ナル位置ニ設ク
印刷室	適宜	一〇〇	
製本室	一	一七	印刷室附近ニ設ク
工務技師室	一	一五	
工務掛員室	一	三	工務技師室ニ隣接シテ設ク
工作室	一	二五	工務技師室ニ接近シテ設ク

電話交換室	二	各五 貴衆兩院各一室トス
新聞記者事務室	一	八五 館外トノ交通便利ナル位置ニ設ケ適宜之ヲ數室ニ區劃スルコトヲ得
洗面所便所	二	各五
倉庫	適宜	計一二〇
配電室	適宜	適宜 本館内成ルヘク中央ニ近キ位置ニ設ク
階段室	適宜	適宜
昇降口	適宜	適宜

外ニ

室名	室數	坪數	摘要
汽罐室		七〇	本館内外適當ノ位置ニ設ク但シ之レヲ地下室ト爲スコトヲ得
貯炭室		一〇	
車馬置場		計七〇〇	貴衆兩院ニ區別シ適當ノ位置ニ設ク
供待所及便所		計 八〇	車馬置場附近又ハ之ニ連絡シテ設ク

備考

廊下　交通頻繁又ハ主要ナル廊下ハ其ノ幅十二尺以上トス

昇降機　階上下ノ連絡至便ナル位置ニ之レヲ設クルコトヲ得

本表中ニ揭クル各室坪數數ハ大体ノ標準ヲ示シタルモノニシテ總坪數ニ影響ヲ及ホサヽル範圍ニ於テ多少ノ增減ヲ爲スコトヲ得

各室坪數ハ壁眞ヲ以テ計算ス

應募者心得書

一　數地ハ西方ヨリ漸次東方ニ降下セルヲ以テ其ノ地勢ヲ利用シ得ル樣設計スルコト

二　傍聽人ハ通用門ヲ入リ傍聽人專用ノ入口ヨリ下足及携帶品置場若ハ傍聽人控室ヲ經專用階段ニ由リ直ニ公衆席ニ達スルモノトシ其ノ通路ハ成ルヘク專用廊下ニ由ルコト

三　帝室ヲ關御車寄馬車出入口ノ内法幅ハ四間以上同高サハ十五尺以上トシ馬車廻シノ勾配ハ二十分ノ一、其ノ「カーブ」ハ六頭立儀裝馬車(全長八間)ノ通行ニ適當ナラシムルコト

四　本館各階ノ高サハ議場、「ドーム」及「タワー」其ノ他特種ノ場合ヲ除ク外左ノ通リトス但シ圖中地盤ト記セルハ正面地盤又ハ乾壕底面ノ位置トス



五　議場ハ音響ノ透徹ヲ期シ且各席間ノ視線ニ成ルヘク障碍ナ

カラシムルコト

六　本館大体ノ構造

イ　基礎　鐵筋混凝土地形ノ類タルコト

ロ　壁體　鐵骨、煉瓦及鐵筋混凝土構造トシ其ノ外部ハ石材裝飾瓦等ヲ以テ被覆スルコト

ハ　床及屋根　主トシテ鐵骨鐵筋混凝土ヲ以テ構造スルコト

七　煖房法ハ熱氣及蒸氣等ノ中央供給式ヲ採リ通風ハ人工換氣法及自然換氣法ニ依リ又夏季ニ於テハ適當ナル冷氣法ヲ行フモノトス

八　汽罐室ノ煙突ハ本館ノ外觀ヲ害セサル樣設計スルコト

九　電氣及瓦斯ハ外部ヨリ供給ヲ受クルモノトス

十　第五號間取略圖(略圖面)ハ單ニ各室ノ排列關係ヲ示シタルモノニシテ必スシモ之ニ拘束セラルヽヲ要セス

十一　署名ニ代フル暗號ハ各圖面及書類一點毎ニ見易キ位置ニ之ヲ明記スヘシ

暗號ハ文字ヲ用フヘシ

十二　圖面及書類ノ容器ハ送付中破損又ハ表記ノ汚損剝離等ナキ樣特ニ注意スヘシ

十三　應募者設計提出後住所氏名ニ異動ヲ生シタルトキハ其ノ都度書面ヲ以テ通知スヘシ但シ封筒ニハ宛名ノ外異動通知ノ四字及暗號ノミヲ記載スヘシ

十四　應募者ニシテ建築敷地ヲ踏査セント欲スルモノハ隨時臨時議院建築局ニ就キ案内ヲ請フヘシ

十五　懸賞圖集ニ關スル質疑ハ臨時議院建築局ニ書面ヲ以テ承合スヘシ

十六　前項ノ質疑ハ其ノ部度質疑者ニ回答シ其ノ質疑應答事項ハ同局備付ノ帳簿ニ記載シテ一般應募者ノ閱覽ニ供シ尙必要ト認ムルトキハ「建築雜誌」「關西建築協會雜誌」「建築世界」等ニ掲載スルコトアルヘシ

廣告目次

イ、井上水道工務所　一五
ハ、原安商會　一三
ニ、日本石綿盤株式會社　二一
ヘ、米國貿易會社　裏表紙表
ト、東松工作所　一四
オ、大阪窯業株式會社　二〇
大阪煖房商會　一六
大野式特許品營業所　（前）一
タ、高田商會　一七
ナ、土木建築内外材料合資會社　一一
ム、村井工業所　二六
ノ、野澤幸三郎　一五
マ、松尾和助商店　二四
ケ、建築事務所案内　四
建築請負業者案内　六
コ、コルク工業合資會社　裏表紙裏
エ、榮進社　一八
ア、秋山小林商店　一二
淺野スレート株式會社　二五
メ、明正社　一九
ミ、みよし組大阪支店　二二
モ、木材商案内　一〇
セ、石材商案内　一〇
ス、須賀商會　（前）二
巣鴨製作所　二三